

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 1

－ 上籠遺跡 第1次調査 －

－ 戸切巡り町遺跡 第1次調査 －

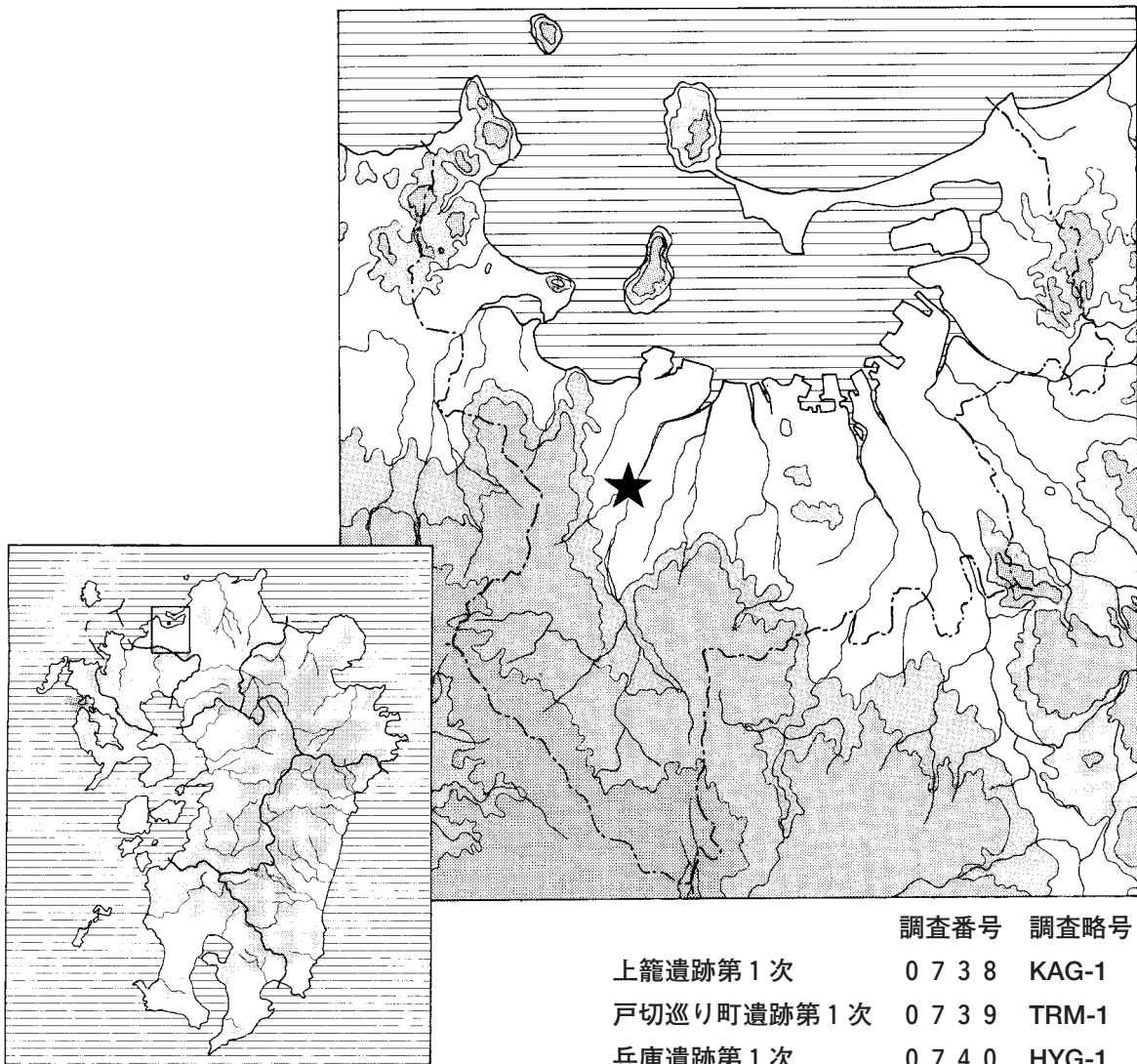
－ 兵庫遺跡 第1次調査 －

2009

福岡市教育委員会

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 1

- 上籠遺跡 第1次調査 -
- 戸切巡り町遺跡 第1次調査 -
- 兵庫遺跡 第1次調査 -



2009

福岡市教育委員会



2008 (平成 20 年) 2 月 19 日撮影航空写真

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件にも恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稲作の村である板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市博多などの貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存と保護措置に努めているところです。

本書で報告いたします西区戸切周辺では、これまでに弥生時代から中世にかけての集落跡などが調査されており、当時の生活用具であるたくさんの土器や石器などの遺物が見つかっています。

今回の道路改良工事に伴う調査では、二つの遺跡が新たに発見され、縄文時代から古代にかけての遺物が見つかり、この地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

本書の刊行が、市民の皆様への埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野でも役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査に際しご理解とご協力いただいた地元住民の方々をはじめ、関係者各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成19（2007）年度に西区戸切2丁目地内で、実施した市道戸切通線（戸切）道路改良工事に伴う発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会の加藤隆也が行った。
- (3) 遺構の実測・写真撮影は加藤が行い、セスナ機による空中写真撮影は株式会社パスコが行った。
- (4) 出土遺物の実測と写真撮影は加藤が行い、トレースは加集和子が行った。
- (5) 本書に使用した方位は座標北（世界測地系）であり、今回の調査・報告に係るレベル値は壱岐南小学校内ベンチマーク（標高11.848 m）を使用した。
- (6) 遺構の呼称は略号化し、掘立柱建物－SB、土壇－SK、溝－SD、柱穴－SPとした。
- (7) 今回の調査で出土した木製品は、遺存状態が良好であったため、まず保存処理を優先させて作業を行った。そのため、樹種同定などの科学的調査をすることができなかった。樹種同定等の科学分析結果は、今後刊行される同事業の報告書内で公表していく。
- (8) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。

遺跡調査番号	0738	遺跡略号	KAG-1
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切92
調査対象面積	-	調査面積	203m ²
調査期間	平成19年9月28日～平成19年11月7日		

遺跡調査番号	0739	遺跡略号	TRM-1
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切92
調査対象面積	-	調査面積	403m ²
調査期間	平成20年1月7日～平成20年3月18日		

遺跡調査番号	0740	遺跡略号	HYG-1
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切92
調査対象面積	-	調査面積	727m ²
調査期間	平成19年11月1日～平成20年3月18日		

本文目次

第1章 はじめに		第4章 戸切巡り町遺跡 第1次調査	
1. 調査に至る経緯	1	1. 調査の概要	11
2. 調査の組織	1	2. 遺構と遺物	11
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2	3. まとめ	14
第3章 上籠遺跡 第1次調査		第5章 兵庫遺跡 第1次調査	
1. 調査の概要	5	1. 調査の概要	15
2. 遺構と遺物	5	2. 遺構と遺物	15
3. まとめ	10	3. まとめ	42

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/7,500)	3
Fig. 2	市道戸切通線道路改良工事計画図 (1/3,000)	4
Fig. 3	各遺跡及び調査区位置図 (1/400)	折り込み
Fig. 4	第4調査区北側壁土層堆積状況図 (1/60)	6
Fig. 5	上籠遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 6	SK・SD・SX遺構実測図 (1/40)	7
Fig. 7	SK・SD・SX出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 8	第3区谷内出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/8)	8
Fig. 9	第4区谷内出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 10	戸切巡り町遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1/150)	12
Fig. 11	調査区西側・北側土層堆積状況図 (1/60)	13
Fig. 12	戸切巡り町遺跡出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 13	兵庫遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1/300)	折り込み
Fig. 14	兵庫遺跡第1次調査第1区遺構配置図 (1/100)	17
Fig. 15	第1調査区北側壁土層堆積状況図 (1/60)	18
Fig. 16	第1区SB-01・02遺構実測図 (1/40)	19
Fig. 17	第1区SB-03・04遺構実測図 (1/40)	20
Fig. 18	第1区SD・SP出土遺物実測図 (1/2・1/3)	20
Fig. 19	小型壁立ち住居、家畜小屋類例 (1/60)	21
Fig. 20	第1区遺物包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)	22
Fig. 21	兵庫遺跡第1次調査第2区遺構配置図 (1/100)	折り込み
Fig. 22	第2調査区北側壁土層堆積状況図 (1/60)	23
Fig. 23	第2区SB-01・02遺構実測図 (1/60)	24
Fig. 24	第2区SD・SP出土遺物実測図 (1/2・1/3)	25
Fig. 25	第2区SK・SD遺構実測図 (1/40)	26
Fig. 26	第2区SK-01出土遺物実測図1 (1/3)	27
Fig. 27	第2区SK-01出土遺物実測図2 (1/4)	28
Fig. 28	第2区SK-01出土遺物実測図3 (1/4)	29
Fig. 29	第2区SK-01出土遺物実測図4 (1/4)	30
Fig. 30	第2区SK-02出土遺物実測図1 (1/2, 1/3)	32
Fig. 31	第2区SK-02出土遺物実測図2 (1/3)	33
Fig. 32	第2区SK-02出土遺物実測図3 (1/4)	33
Fig. 33	第2区SK-02出土遺物実測図4 (1/4)	34
Fig. 34	第2区SK-02出土遺物実測図5 (1/4)	35
Fig. 35	第2区SK-04出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	36
Fig. 36	第2区SK-03出土遺物実測図 (1/3)	37
Fig. 37	第2区SK-06出土遺物実測図 (1/3)	37
Fig. 38	第2区谷落ち肩出土遺物実測図 (1/2, 1/3)	38
Fig. 39	第2区谷内出土遺物実測図1 (1/3)	39
Fig. 40	第2区谷内出土遺物実測図2 (1/3)	40
Fig. 41	第2区谷内出土遺物実測図3 (1/2)	40
Fig. 42	第2区谷内出土遺物実測図4 (1/3)	41

図版目次

カラー図版 2008（平成20）年2月19日撮影航空写真

図版扉 1948（昭和23）年4月7日米軍撮影航空写真（部分）

- | | | |
|-------|------------------------|---------------------------|
| PL. 1 | 1) 上籠遺跡調査前状況（南西から） | 2) 上籠遺跡調査風景（北東から） |
| | 3) 第1調査区西半完掘状況（北東から） | 4) 第1調査区西半南西壁状況（北東から） |
| | 5) 第1調査区東半完掘状況（南西から） | 6) 第2調査区②完掘状況（北東から） |
| PL. 2 | 1) 第2調査区①完掘状況（北東から） | 2) 第2調査区①SD-01堆積状況（北から） |
| | 3) 第3調査区東半完掘状況（北西から） | 4) SK-01, SP-01完掘状況（北西から） |
| | 5) 第3調査区西半検出状況（南から） | 6) 遺物包含層検出状況（南東から） |
| PL. 3 | 1) 遺物出土状況（北東から） | 2) 第3調査区西半完掘状況（南西から） |
| | 3) 第3調査区北壁状況（東から） | 4) 第4調査区完掘状況（北東から） |
| | 5) 第4調査区遺構掘削状況（南西から） | 6) 上籠遺跡調査終了状況（東から） |
| PL. 4 | 1) 戸切巡り町遺跡東側完掘状況（北東から） | 2) 戸切巡り町遺跡完掘状況（北東から） |
| | 3) SK-05掘削状況（北から） | 4) SK-06掘削状況（南東から） |
| | 5) ピット状遺構掘削状況（西から） | 6) 北壁断割り状況（南東から） |
| PL. 5 | 1) 戸切巡り町遺跡西側完掘状況（北東から） | 2) 戸切巡り町遺跡西側完掘状況（北東から） |
| | 3) 調査区西側壁土層堆積状況（北から） | 4) 西側調査区北壁断割り状況（東から） |
| | 5) 北側調査区完掘状況（東から） | 6) 北側調査区遺構検出状況（南東から） |
| PL. 6 | 1) 兵庫遺跡第1調査区完掘状況（東から） | 2) 兵庫遺跡第1調査区完掘状況（北から） |
| PL. 7 | 1) SB-01完掘状況（北西から） | 2) SB-02完掘状況（南東から） |
| PL. 8 | 1) SB-03完掘状況（北から） | 2) SB-04完掘状況（南東から） |
| PL. 9 | 1) SB-01掘削状況（北東から） | 2) SB-04完掘状況（南西から） |
| | 3) SD-01調査区壁状況（南西から） | 4) SD-03調査区壁状況（南から） |
| | 5) 第1調査区東側完掘状況（北から） | 6) 第1調査区北壁断割り状況（南西から） |
| PL.10 | 1) 兵庫遺跡第2調査区完掘状況（北西から） | 2) 第2調査区完掘状況（北西から） |
| | 3) 第2調査区遺構検出状況（北東から） | 4) SB-01, 02完掘状況（東から） |
| | 5) SK-01土層堆積状況（南から） | 6) SK-01遺物出土状況（北東から） |
| PL.11 | 1) SK-01遺物出土状況（南から） | 2) SK-01杭打ち込み状況（東から） |
| | 3) SK-01, 02検出状況（南から） | 4) SK-02土層堆積状況（南から） |
| | 5) SK-02遺物出土状況（北から） | 6) SK-02遺物出土状況（北から） |
| PL.12 | 1) SK-03遺物出土状況（北から） | 2) SK-04遺物出土状況（東から） |
| | 3) SK-05完掘状況（東から） | 4) SK-06完掘状況（南東から） |
| | 5) SD-01検出状況（南から） | 6) SD-01土層断面状況（北から） |
| PL.13 | 1) 第2調査区完掘状況（北東から） | 2) 第2調査区作業風景（北東から） |
| | 3) 谷落ち肩状況（北から） | 4) 谷内土層堆積状況（北から） |
| | 5) 第2調査区東側配置状況（西から） | 6) 第2調査区東側完掘状況（西から） |
| PL.14 | 出土遺物（縮尺不統一） | PL.15 出土遺物（縮尺不統一） |
| PL.16 | 出土遺物（縮尺不統一） | PL.17 出土遺物（縮尺不統一） |
| PL.18 | 出土遺物（縮尺不統一） | PL.19 出土遺物（縮尺不統一） |

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2007（平成19）年1月、福岡市土木局道路建設部（現；道路下水道局道路整備部）から教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課へ市道戸切通線（戸切）道路改良工事計画に伴い、西区戸切地内の埋蔵文化財について事前審査の依頼があった。当課では、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地および隣接地を含むことから、対象地について遺跡の遺存状態確認のため試掘確認調査が必要であると判断し、土木局道路建設部と協議を重ね、試掘可能な地点から試掘確認調査を実施した。第1回目の試掘調査は、6月から行った。

試掘調査は現在も行われており、当時の試掘範囲も計画地の一部であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地以外にも新たに2箇所埋蔵文化財の遺存する範囲が確認された。そのため、各地点の旧小字名をとり、それぞれ上籠遺跡、兵庫遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地への登録手続きを行った。

今回報告する埋蔵文化財発掘調査は、2007年9月28日から2008年3月18日にかけて行ったものであり、計画地内の埋蔵文化財発掘調査は今後も継続して行われる。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	土木局道路建設部（現：道路下水道局道路整備部）		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課	課長	力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）
庶務担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係長	杉山富雄
事前協議	文化財管理課	管理係	井上幸江
調査担当	埋蔵文化財第1課	事前審査係長	吉留秀敏
調査作業		事前審査係	星野恵美
整理作業	埋蔵文化財第2課	調査第1係	加藤隆也
	芦馬光夫 岩永いさ子 榎田信一 尾崎泰正 小田義之 川岡涼子 川嶋京子 菅野 武 柴藤清志 田中昭子 田原忠昭 永井ゆり子 西嶋ムラ子 西嶋洋子 野田英機 土生ヨシ子 松尾和子 山西人美 吉積百合子 脇坂ミサヲ 脇山千代美		
	山口とし子、鈴木美樹、加集和子、田中由紀、川田京子		

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

今回の調査地点が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯森・高祖地墨山地に、東を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部には背振山地を源流とする室見川が北流し、博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、背後には沖積低地が広がっている。また、両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

戸切遺跡群は室見川中流域西岸で名柄川、十郎川の沖積低地間、これらに開析された低位段丘礫台地の残丘上に立地する。標高は9～14mである。

早良平野の旧石器時代は各遺跡から表面採集の遺物が知られており、有田遺跡の調査で石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期の遺跡はいまだ不明確であり、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。平野の沖積低地部では夜臼式単純期から弥生時代初頭の初期農耕期の遺跡が多く、室見川東岸に有田遺跡・有田七田前遺跡・免遺跡・次郎丸遺跡、西岸では橋本一丁田遺跡、牟多田遺跡、拾六町平田遺跡・拾六町ツイジ遺跡・石丸古川遺跡・湯納遺跡が分布し、有田七田前遺跡では多量の夜臼式期の遺物が、有田遺跡では台地上に弥生時代初頭の環溝集落が、免遺跡では平野内で最古の突帯文期の土器が多量に出土し、橋本一丁田遺跡では夜臼式単純期～弥生時代初頭の河川から土器・木製農具等が多く、拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土壙から木製農具等が出土し、拾六町平田遺跡では家形土製品が出土している。また、平野奥部の東入部遺跡では夜臼式大型壺を組み合わせた晩期末の埋葬施設が検出されている。

弥生時代になると遺跡数が増大するが、前期初頭には有田台地に環濠集落遺跡が出現する。この集落は200×300mの環濠を有する大規模なもので、早良平野における前期最大の集落である。このほか前期の遺跡としては、十郎川に面する沖積地上に位置する石丸古川遺跡があり、突帯文土器をはじめ多くの遺物が出土している。この時期の埋葬施設は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などで調査されている。前期末から中期初頭の集落遺跡は平野全域に拡大しており、埋葬施設は藤崎遺跡、吉武高木遺跡、東入部遺跡などにみられる。中期から後期の遺跡は野方中原遺跡、野方塚原遺跡、野方久保遺跡などが近隣では知られている。

古墳時代の集落遺跡は、平野の低地部や低位段丘部に戸切遺跡・湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡・四箇遺跡・原遺跡・田村遺跡・免遺跡・次郎丸高石遺跡・重留村下遺跡などが位置している。海岸の砂丘上には生ノ松原遺跡・西新町遺跡などがみられる。室見川の中流域西岸の山麓部から広がる中位段丘や下位面の残丘上には「早良王墓」といわれる吉武遺跡群や、野方中原遺跡・野方久保遺跡・羽根戸遺跡・太田遺跡・広石C遺跡・都地遺跡・金武城田遺跡・浦江遺跡・浦江谷遺跡がある。東岸の段丘や下位面残丘の台地上には有田遺跡・飯倉遺跡・野芥遺跡・梅林遺跡・東入部遺跡が分布しており、その上流に集落は展開してない。平野の東側丘陵部および西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の樋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも中期から後期の古墳群が調査されている。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査では6世紀前半の須恵器窯が検出されており、本集落などに供給されていた可能性がある。

古代から中世の遺跡も平野全体にみられる。現在、早良郡衙や郷家・郷倉が特定される遺構は確認されていないが、有田遺跡検出の大型建物群を早良郡衙と推定するにとどまっている。

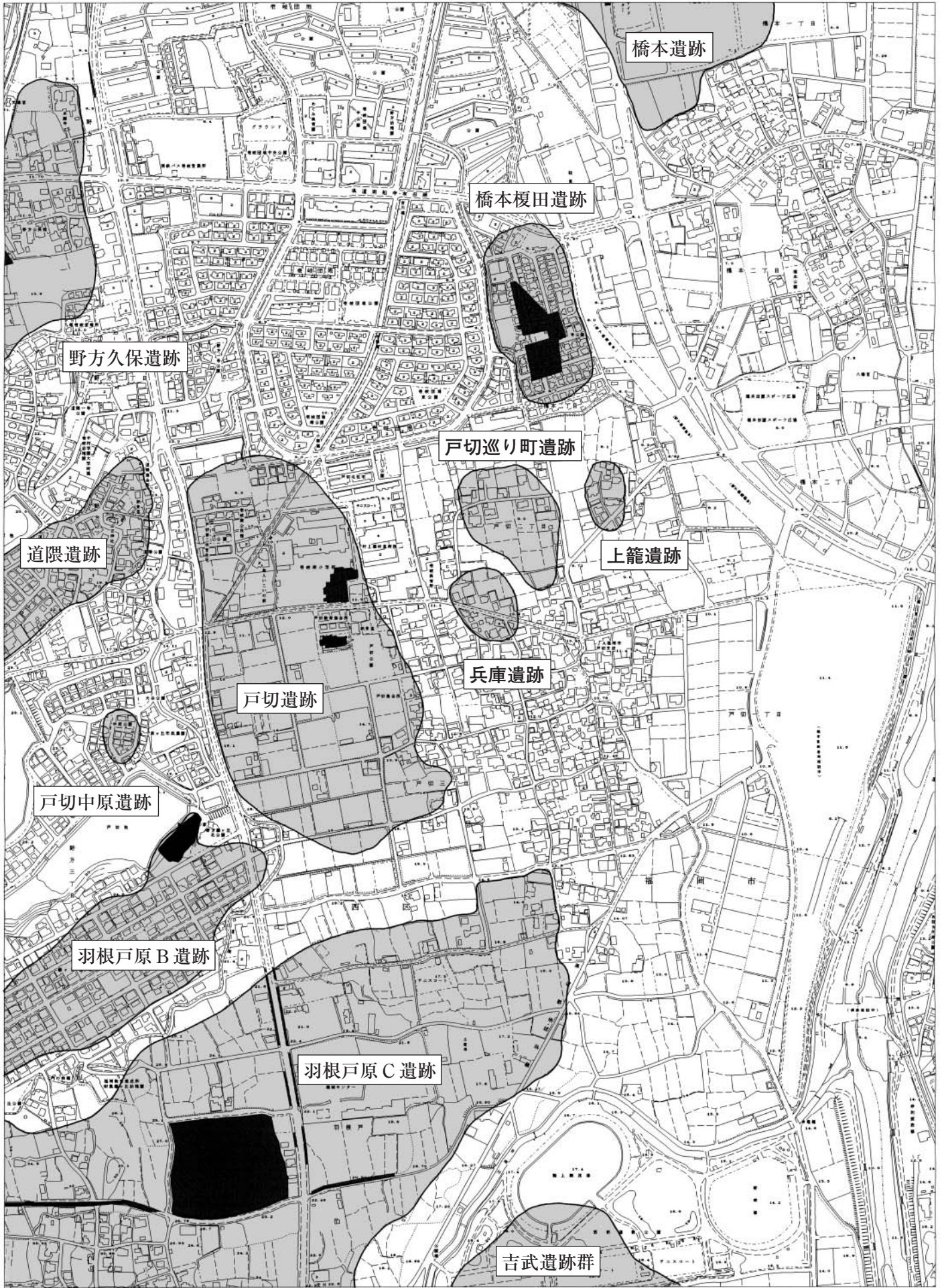


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/7,500)

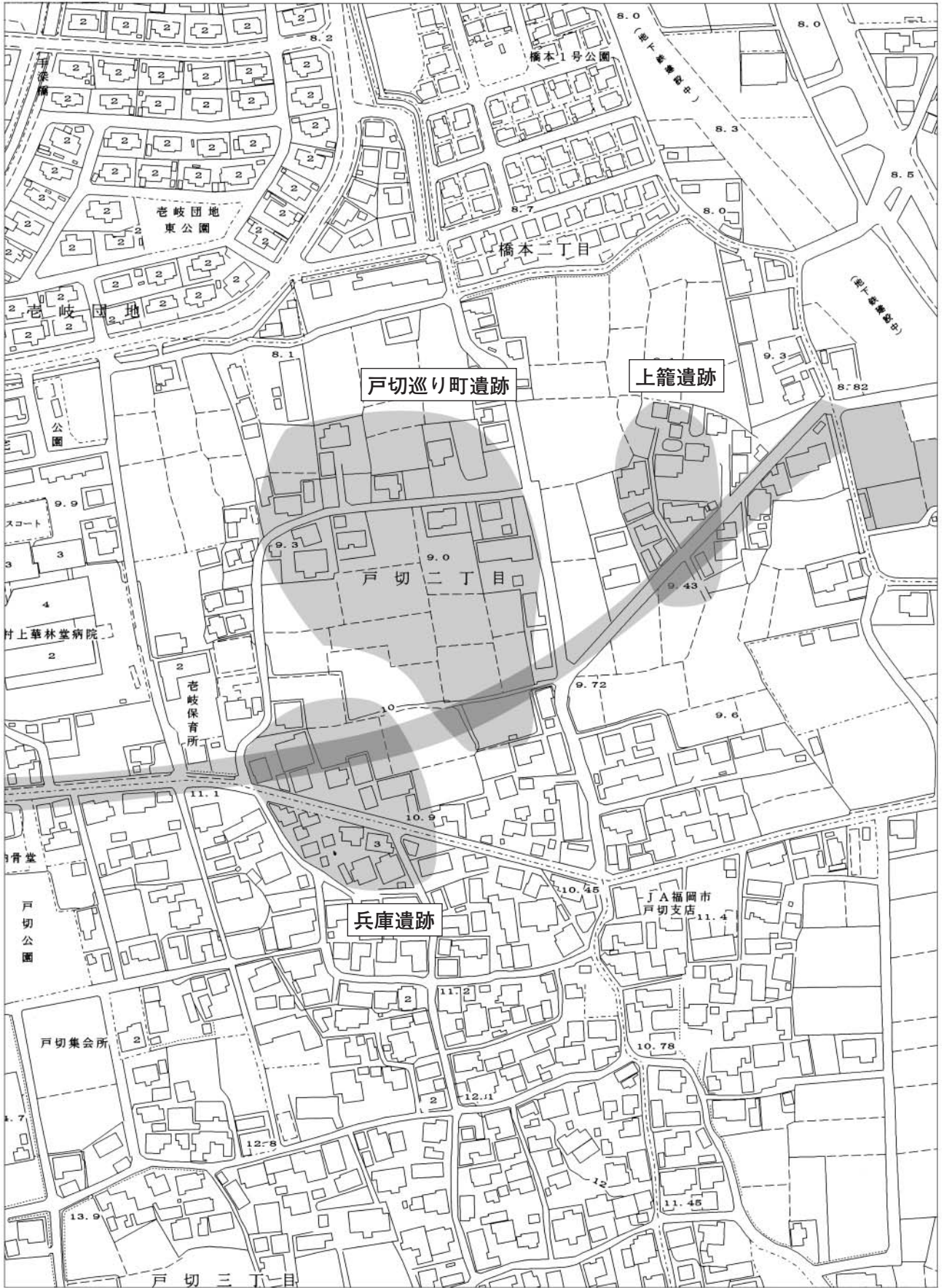
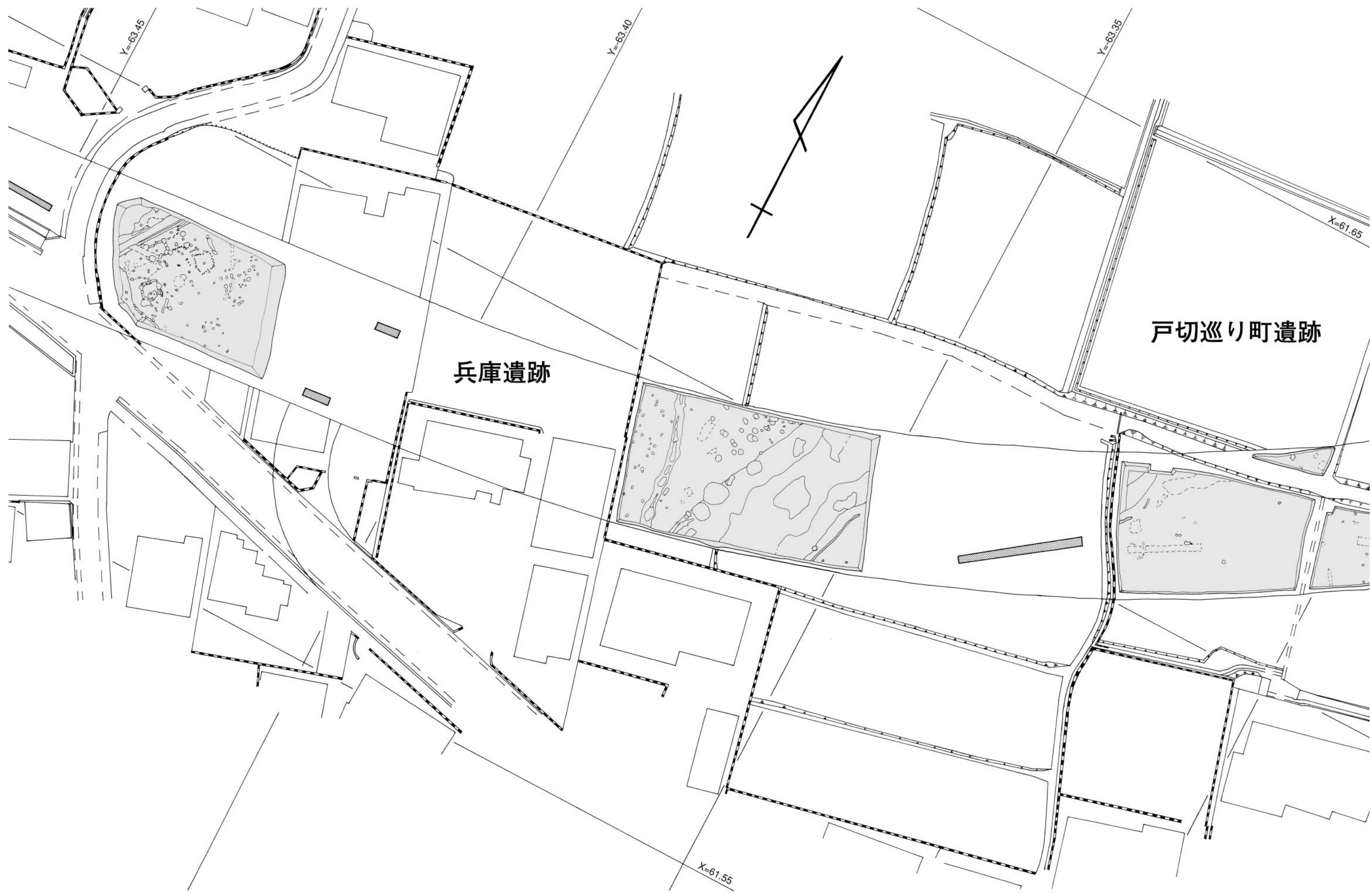


Fig. 2 市道戸切通線道路改良工事計画図 (1/3,000)



Y=63.45

Y=63.40

Y=63.35

X=61.65

兵庫遺跡

戸切巡り町遺跡

X=61.55

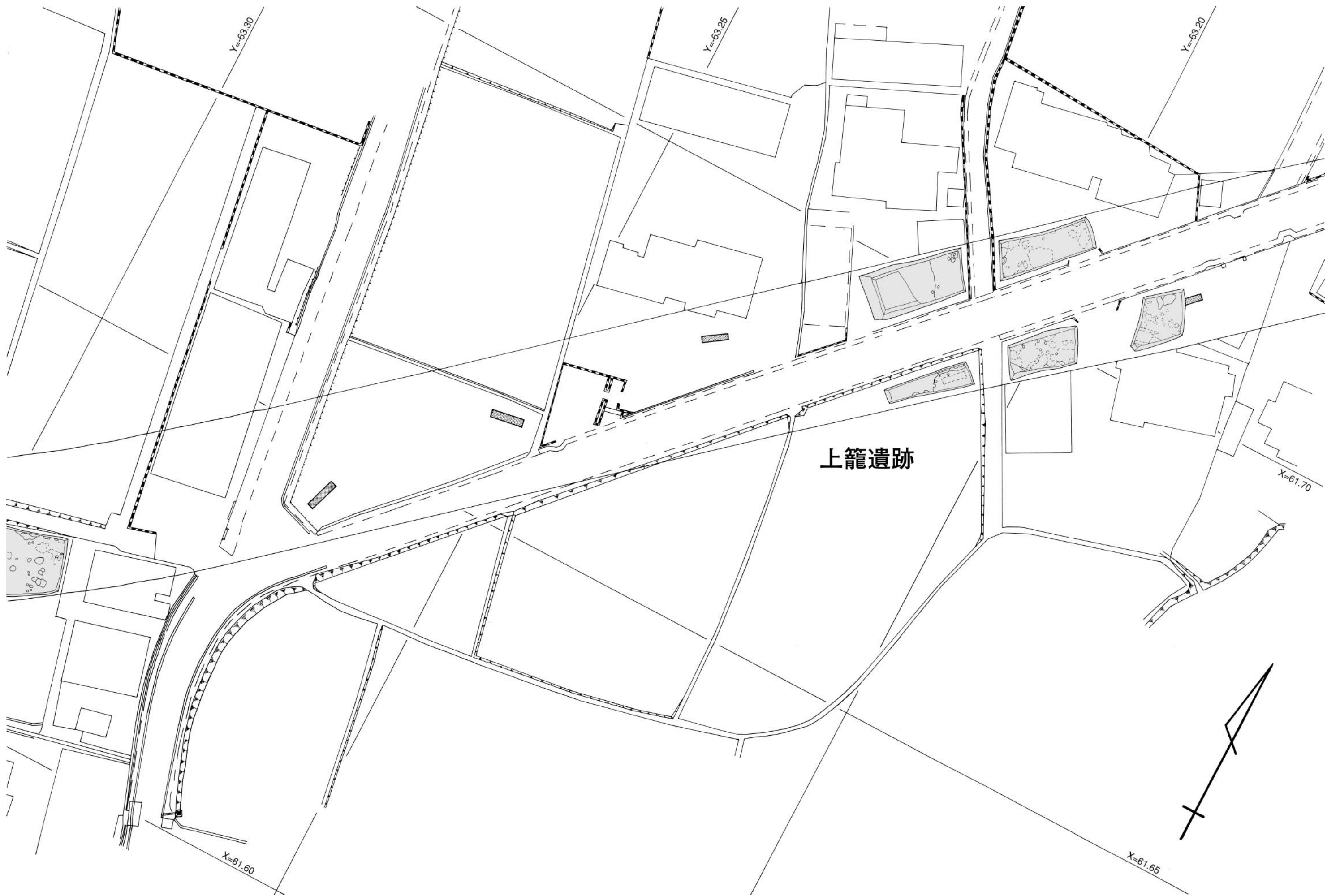


Fig. 3 各遺跡及び調査区位置図 (1/400)

第3章 上籠遺跡 第1次調査

1. 調査の概要

上籠遺跡は、今回の道路改良工事に伴い先行して行われた埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査により、新たに発見された遺跡である。試掘調査の成果から、沖積地の中に残る微高地上に遺構の遺存があり、その範囲は一定の広がりがあることが分かった。周辺の集落も古くからあり、古地図・古写真等を参照しながら旧地形の復元をおこない、遺構の遺存が想定される範囲をこの遺跡の範囲とした。今回発掘調査を行う対象範囲は、道路改良工事により破壊される範囲のみの調査である。上籠遺跡範囲内の発掘調査部分は、既存道路の両側への拡幅工事を行う計画の地点であった。集落内で既に、宅地が新しい道路幅にまでセットバックしている状況での掘削作業ということで、個人宅等への進入路を確保しながらの調査であったため、小面積調査区を小さく反転しながらの調査となった。

上籠遺跡での発掘調査は、平成19年9月28日からまず第3調査区の東側半分から着手した。表土の剥ぎ取りにより出た土壌は、トラックで工事地内の別地点に運搬移動させながら生活道路の確保をし、調査を進行させていった。

第1調査区は、まず西側半分の調査を先行して行い、終了後東側へと進めていった。第1調査区の東側では、微高地の落ち肩は確認されておらず、遺構の遺存範囲は更に東側へと広がることが予想された。しかしその東側には現況道路から宅地へ上下水道、ガス管が引き込まれており、安全確保のため発掘調査を断念した。

第2調査区の中央部にも埋設管等があることから、調査区を2地点に分けた。調査区の東側は試掘調査により、遺構が遺存していないことが確認されている。

第3調査区も東半分の調査後、西側の調査を行った。西側の調査では、微高地の西側への落ち肩がみられ、その上層には遺物を包含する灰茶褐色砂質土が厚く堆積していた。確認された遺物には、強いローリングを受け小破片になり摩滅したものと、ある程度形を残し廃棄後あまり動いていないと思われるものに分けることができた。

第4調査区の現況は田であり、表土は1回の剥ぎ取りで行った。第3調査区と同様の状況を示し、微高地の西側への落ち際であった。遺物包含層も第3調査区同様に厚く堆積していたが、ローリングを受けた小破片の遺物の出土する比率は少なかった。そして、平成19年11月7日に第4調査区の埋め戻し作業を終え、上籠遺跡の発掘調査が終了した。

2. 遺構と遺物

調査地内の微高地高所部は削平が著しく、遺構の遺存状況は極めて悪かった。検出遺構としては溝、不定形土壇である。最も遺物の出土が多かったのは低地へ緩やかに傾斜する微高地肩部に堆積した遺物包含層出土の遺物である。基本的な層順は（Fig. 4）上から盛土、旧耕作土、床土、淡茶褐色砂質土層、黄茶褐色粗砂混じり層（遺物包含層）の下は地山の黄褐色粘質土層となり、谷部はさらに、黒灰褐色粘質土層（古墳時代遺物を含む）、灰茶褐色粘質土層、洪水砂となる。遺物包含層には弥生時代から中世期までの遺物が混ざっているが、第4調査区で顕著にみられた下層の黒灰褐色粘質土層には古墳時代中期の高杯、小型丸底壺が比較的まとまってみられた。

第1調査区

この調査区の層順は、上から盛土、白灰色粘質土層、茶褐色粘質土層（灰褐色粘質土混じり）となっている。その下層が遺構検出面であり、微高地の基盤層で安定した灰黄色シルト層である。遺構精

査作業を行ったが、後世の削平が著しく顕著な遺構は確認できなかった。

SK-01 (Fig. 6)

西側調査区の壁際にて、緩やかな凹み状の遺構SK-01を確認した。その範囲は調査区の外へ延びており、北側を攪乱に切られる。確認された遺構の規模は横幅115、縦幅50cmである。埋土は、よく締まった暗茶褐色砂質土であり、土師器の小片が出土した。

第2調査区

第2調査区は、前述したように埋設管等の状況から2地点に分けて調査を行った。その西側を①区、東側を②区と呼称する。

①区は、微高地の落ち際であり、ピット状、土壇、溝遺構などがみられた。ピット状遺構の埋土は茶褐色粘質土で、検出時の平面規模は20~30cmであった。残存深さは5~20cmであり、須恵器小破片が出土するものもあった。南側調査区壁際には、浅い土壇状の遺構がみられた。埋土は灰茶褐色砂質土であり、遺物等は出土しなかった。

SD-01 (Fig. 6, PL. 2)

この溝は、調査区南隅にて確認された。調査区の隅であり、溝肩約2.7m、深さ80cmがみられるのみであった。溝幅は確認面で肩から底中央部まで70cmあることから、折り返して1.4m以上の溝幅が推測される。溝底部の傾きは東から西方向に下がっており、西側谷部への排水機能を有していたと考えられる。溝の配置は東西方向であり、上籠遺跡の範囲内にある微高地の範囲とも合致し、微高地の縁辺部を巡るように掘削されていたと考えられる。**出土遺物 (Fig. 7, PL. 14)** 1は甕の口縁破片である。逆L字形を呈する。2は甕の体部破片である。外面には断面三角形の凸体が2条巡る。弥生時代中期の遺物である。

②区は遺構面の削平が著しく、北側調査区の壁際にて土壇のみを確認した。浅い凹み状のものでどちらも調査区外に延びる。

SX-01、02と呼称する。01の埋土は灰茶褐色砂質土であり、底面の凹凸が著しい。土師器の小破片が出土している。02は幅50cmの細長い平面プランのもので、埋土は黄灰褐色砂質土であった。**出土遺物 (Fig. 7, PL. 14)** 3は、甕の底部である。やや丸みをもつ平底を呈する。弥生時代後期の特徴をもつ。4は、表土剥ぎ取り作業中に出土した須恵器の高坏脚部破片である。四方に幅約8mmの透かしをもち、底径は8.6cmである。

第3調査区

調査は、まず東半分の表土剥ぎ作業を行った。この地点の盛土が最も厚く、約40cmあった。旧耕作土と床土の直下が地山層であった。微高地の谷落ち肩部であり、微高地上にはピット状、土壇等の遺構がみられた。谷部の上層には遺物包含層が堆積していた。西半分の調査では、東から続く遺物包含層の下層は谷の堆積であり、掘削により微高地と谷との関係を確認した後、埋め戻した。

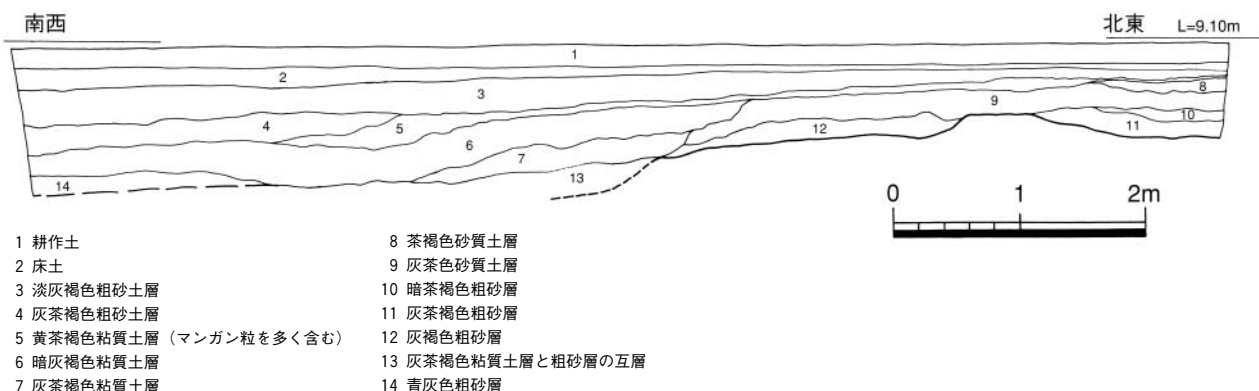


Fig. 4 第4調査区北側壁土層推積状況図 (1/60)

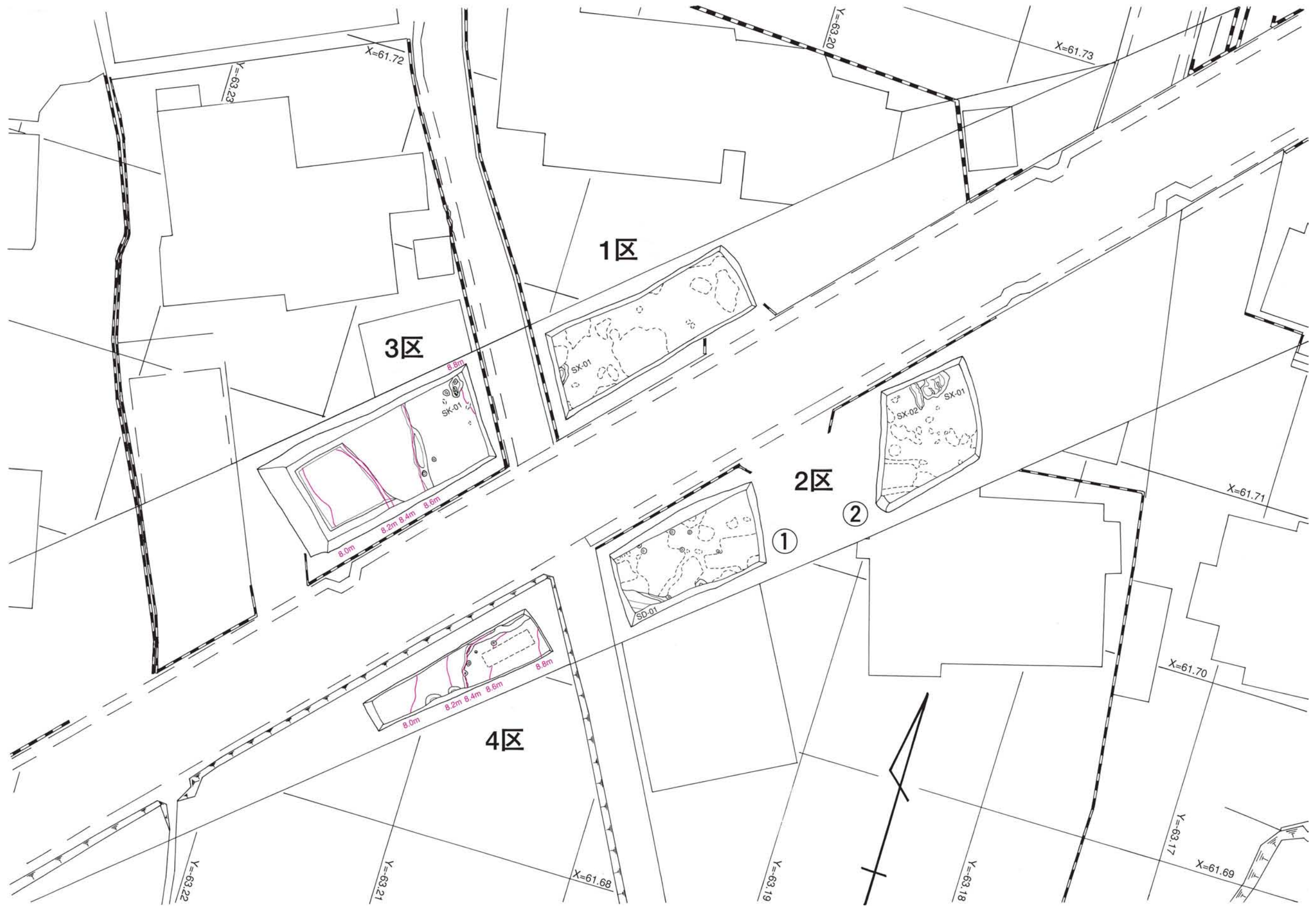


Fig. 5 上籠遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1/200)

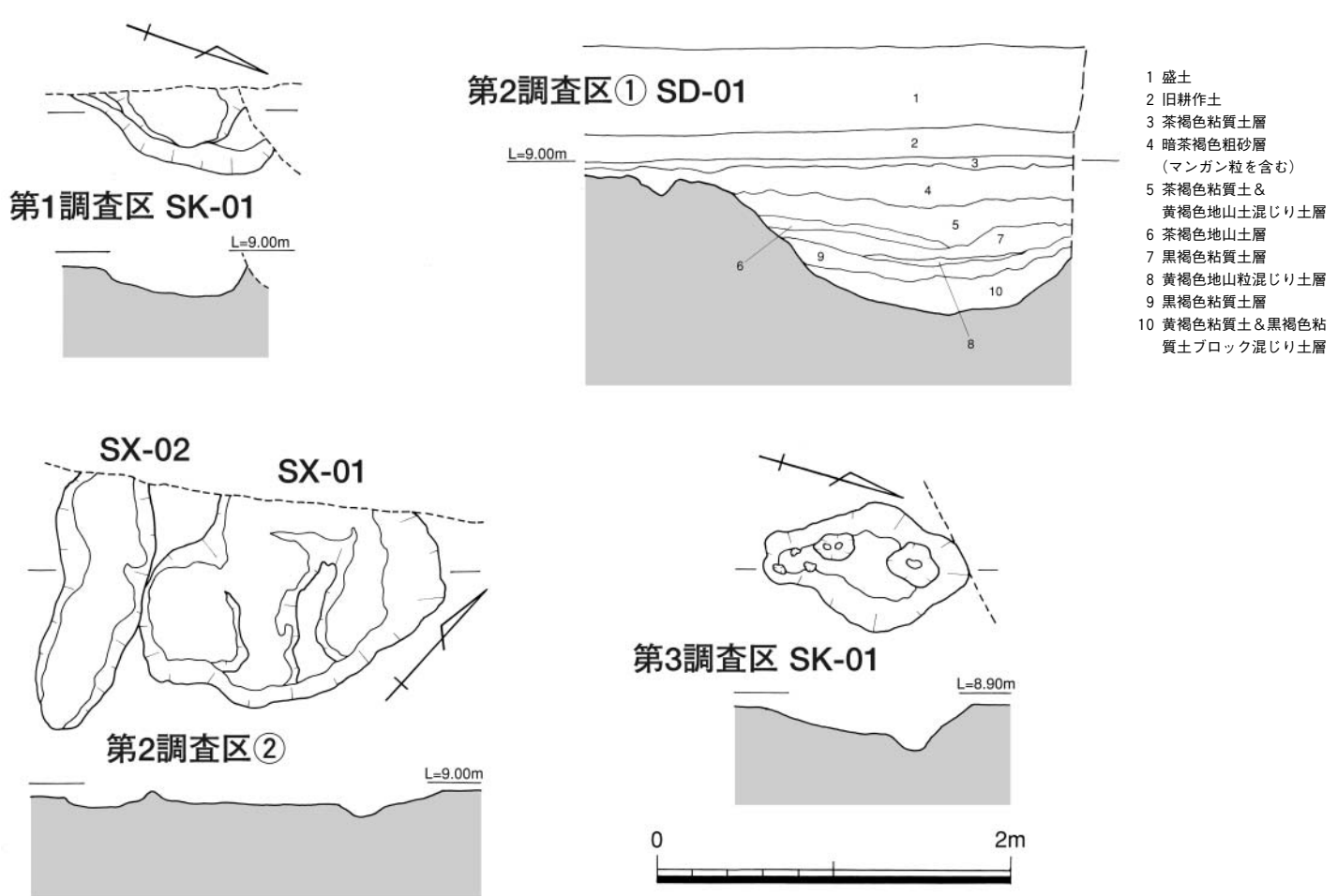


Fig.6 SK・SD・SX遺構実測図 (1/40)

SK-01 (Fig. 6, PL. 2)

この遺構は調査区北隅にて確認された遺構である。幅70、長さ120cm、残存深さ約10cmの土壇状を呈する。底部にピット状の小さな凹みをもち、埋土は灰茶褐色砂質土であった。須恵器、土師器の小片が出土している。

遺物包含層出土遺物 (Fig. 8, PL. 14)

5は、逆L字形を呈する弥生時代中期甕の口縁部破片である。第2調査区①で確認された溝と同時期の遺物である。6～10は土師器高坏である。6は坏部の破片で、坏部は途中屈曲点を有しやや外反しながら上方に広がる。口径21cmである。7も屈曲点をもって外反しながら開く坏部である。口径は27.4cmで、外部器面にハケ目が残る。8は脚部と坏部の一部が残る。脚の上部は柱状を呈し、裾部はふくらみをもって広がる。坏部には明瞭な段を有する。底径は13.4cmである。9の脚部はふくらみをもって広がり、裾部につながる。底径は11.2cmである。10の脚部は、脚柱部と裾部が明瞭に別れている。口径は10.6cmである。11～14は土師器の壺である。11は小型の壺で、頸部はやや長く屈曲しながら上方に広がる。口径は9.4cmである。12は壺頸部の破片である。頸部は直線的に上方へ延びる。口径は15.3cmである。13の壺内面にはヘラケズリ、外面にはハケ目が残る。口径は13.6cmである。14の壺は谷落ち肩に廃棄された状態で出土した。胴部の最大径はその上部にあり、頸部は一度大きく外反し、明瞭な段をもって直線的に上方へ延びる。口径29.4cmである。15～17は甑の把手の破片である。15が最も細く反りもやや直線的である。その他はやや太く、屈曲も明瞭である。18～26は須恵器の遺物である。18は坏蓋の破片で、天井部はやや丸みを帯び、口縁との境に突出し

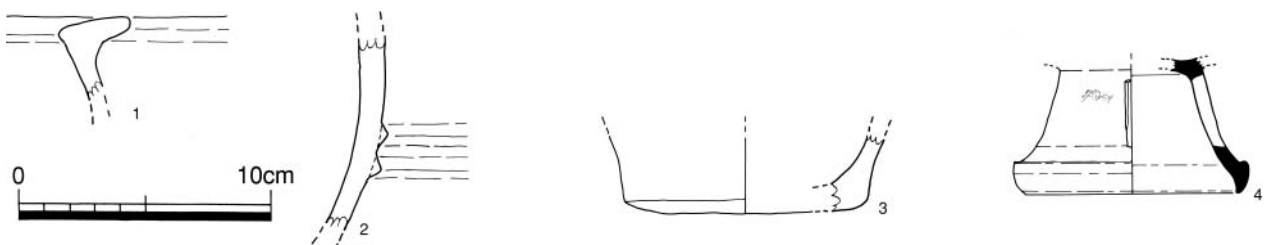


Fig. 7 SK・SD・SX出土遺物実測図 (1/3)

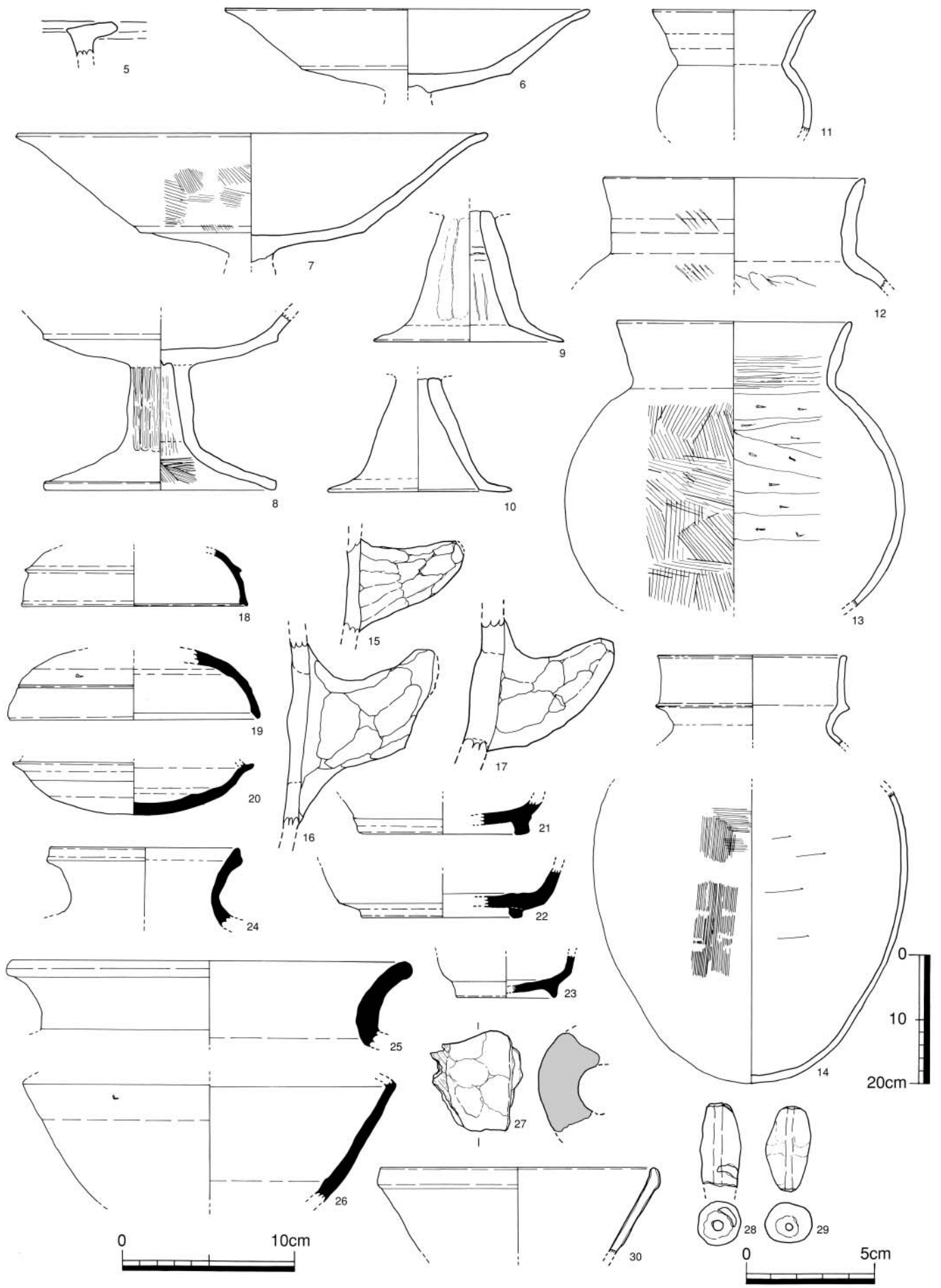


Fig. 8 第3区谷内出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/8)

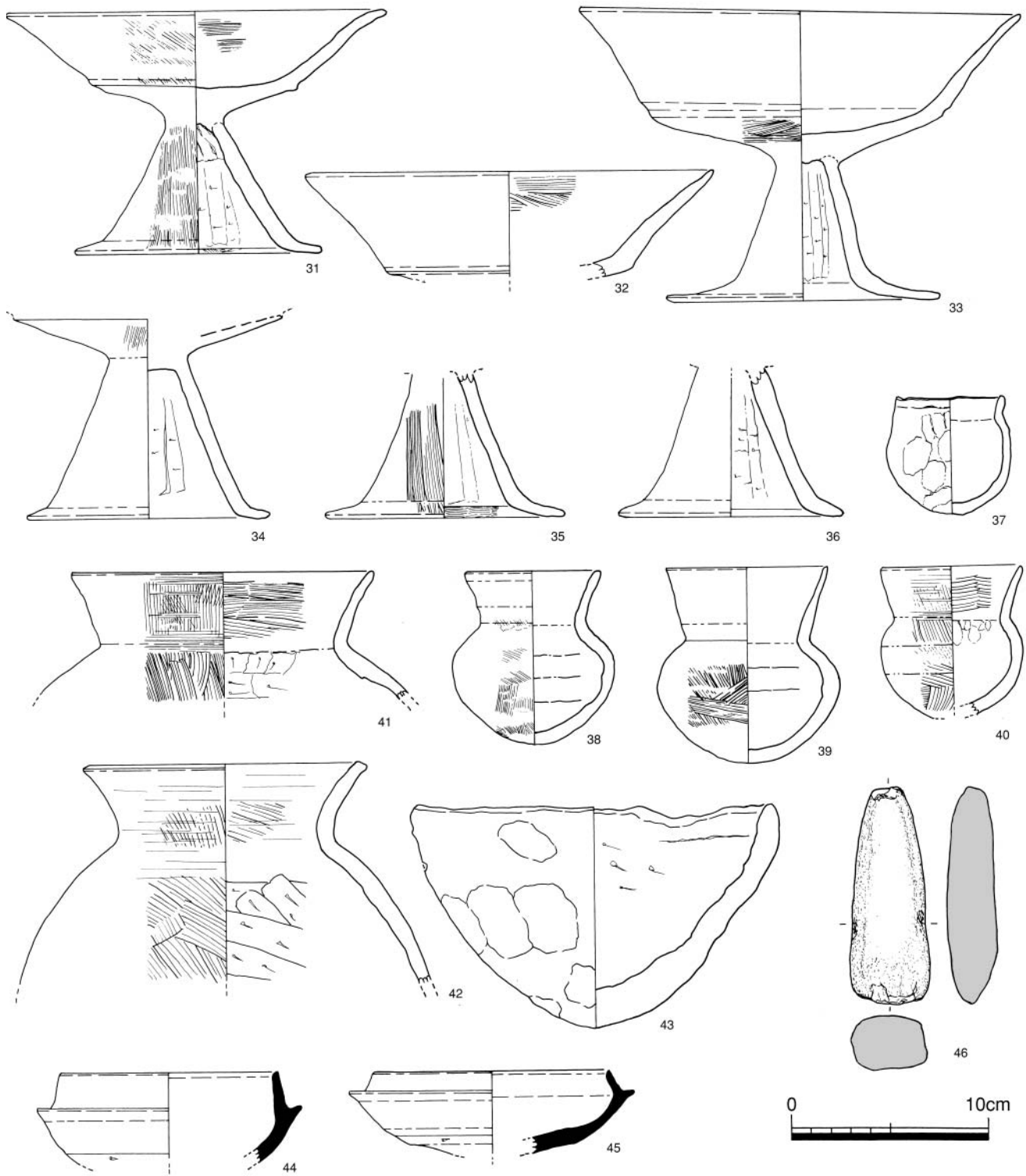


Fig. 9 第4区谷内出土遺物実測図(1/3)

た明瞭な稜をもつ。口縁端部は、外側につまみ出し、凹面となっている。口径は13.2cmである。19の坏蓋破片に稜は無く、天井部と口縁部との境に凹線を巡らす。口縁端部は内側に段をもち、口径は14.5cmである。20は坏身の破片である。身は浅く、口径は14.0cmである。21~23は高台付坏である。21の高台は身の最端部に貼り付けられており、断面形は四角と呈する。底径は10.2cmである。22の高台は、やや内側に貼り付けられており、底径は8.4cmである。23は小型のものである。高台の断面形は三角を呈し、底径は5.8cmである。24~26は、須恵器の壺である。24は壺の口縁破片である。口縁は大きく外反して広がり、端部外面は断面三角に豊厚させる。口径は10.9cmである。25の口縁は大きく外反させ、端部は丸くおさめる。口径は22.8cmである。26は壺体部の破片である。やや丸みをもって延びる体部は方部で大きく屈曲する。肩部の径は21.8cmである。27は羽口の端部片である。一部被熱により黒色化している。28、29は土錘である。28の最大直径は1.2、残存長は

3.2cmである。29の最大直径は1.8、長さは3.2cmであった。30は口縁が玉縁の白磁碗の破片である。口径16.2cmである。

第4調査区

第4調査区では、地山上にて数穴のピット状遺構を確認した。それぞれからの出土遺物は無いが、谷内の遺物包含層から多くの遺物が出土した。

遺物包含層出土遺物 (Fig. 9, PL. 14)

31～36は土師器の高坏である。31はほぼ完形で出土した。坏部は段をもって屈曲し、緩やかに外反しながら広がる。脚部は直線的に広がり、裾部は短い。口径19.3、底径12.6、器高12.3cmである。32は坏部の破片である。段をもって緩やかに外反して広がる。口径は20.8cmである。33は、ほぼ完形で出土した。坏部は段をもって屈曲し、緩やかに外反しながら広がる。脚部は脚柱部と裾部の屈曲が明瞭である。口径22.4、底径14.0、器高15.1cmである。34は脚部と坏部の一部である。坏部は段をもって屈曲している。脚部は直線的に広がり、裾部は短い。底径12.3cmである。35は脚部の破片である。脚柱部と裾部の屈曲が明瞭である。底径12.2cmである。36の脚部は直線的に広がり、裾部は短い。底径11.5cmである。37～40は小型丸底壺である。37はほぼ完形で出土した手づくね土器である。頸部は短く、最大口径5.8、器高6.0cmである。38は完形で出土した。頸部はやや長く、端部は丸く仕上げる。口径6.8、器高8.9cmである。39の頸部は長く、直線的に広がる。口径8.2、器高10.1cmである。40は破片である。頸部は直線的に開くものの、口縁端部はやや内湾する。復元口径は7.0cmである。41、42は甕である。41の器壁外面には縦ハケ目が、頸部内面には横方向のハケ目が残る。胴部内面は頸部際までヘラケズリ痕が残る。口径15.5cmである。42の肩はなで肩で胴部の最大径は下方にくると思われる。頸部は緩やかに外反し、口縁端部は面をもつ。口径は14.6cmである。43は手づくねの鉢形土器である。胎土は荒く、器壁も荒れている。直火にかける目的で製作されたと思われるが、内面に金属滓やガラス等の付着はみられない。最大口径18.3、器高11.3cmである。44、45は須恵器の坏身である。44の体部は丸みをもち、深い。口縁は直線的に立ち上げ、端部は内面に小さな段をつける。口径13.5、受部径11.1cmである。45の底部内面には同心円文の支具の痕跡が残る。口径14.6、受部径10.0cmである。46は磨製石斧である。体部やや下方の両側に凹みがあり、刃部には使用による欠損がみられる。最大幅4.1、残存長11.1cmである。

3. まとめ

今回の発掘調査は、この道路改良工事に伴い新しく発見された遺跡の第1次調査となった。調査中近隣の水田を耕作されている方から『かつてこのあたりは小高くなっていたのを、ある時期水田開発のために削り平坦にした』との話があった。ちょうどそれを裏付けるように、微高地上の遺構は削平が著しく、当時の状況が分かるような状況ではなかった。しかし、微高地の落ち肩と谷内には遺構と遺物が遺存しており、微高地の利用の状況をうかがい知ることができる有効な資料となった。

まず、第3区の溝状遺構が注目される。微高地の縁辺部を巡ると考えられる溝で、弥生時代中期の遺物が含まれている。土層の観察から、常時水が流れていたとは考えられないことから、微高地上に当該期の集落があり、その周りを囲んでいた溝である可能性がある。その後、出土遺物がまとまる時代は、古墳時代前期の始め頃の壺、中期の手づくね土器や高坏、小型丸底壺などは、微高地から谷に向かって行われた水際祭祀の行為を表す資料と考えられる。古墳時代後期、古代の遺物も少なからず出土し、中世の輸入陶磁器なども出土することから、長期間連続とこの地は人々の活動の場となっていたことが明らかとなるのである。狭小な調査区による調査であったが、第1次調査として、新発見遺跡の性格を裏付ける貴重な成果を得ることができた。この道路整備を契機に、今後も発掘調査が行われると思われるが、集落構造の解明や早良平野内での位置づけなど、課題は山積みである。

第4章 戸切巡り町遺跡 第1次調査

1. 調査の概要

戸切巡り町遺跡は、古くから耕作土に遺物が混じる等のことから遺跡の存在が想定されており、福岡市文化財分布地図にも記載され、遺跡として周知されている。今回、道路改良工事に伴い恒久的建造物である道路部分を対象に遺跡の有無を確認する試掘調査を行った。その結果、耕作土、床土の直下にて遺構が始めて確認されたのである。今年度の調査は、現状が畑地、水田になっている発掘調査可能部分において行った。

調査地は幅約18mある道路の新設部分にあたり、全面の調査が調査対象地となったが、調査地内には現在使用している農道、水路等があり、調査地を3地点に分けて作業を行った。第1調査区は、水路の東側、農道の南側区画である。調査面積は96m²である。第2調査区は水路の西側、農道の南側である。ただし、掘削土置場の都合から東西半分ずつの調査となった。東側を①、西側を②とした。調査面積は①②合わせて289m²であった。第3調査区は、農道の北側三角地を指す。調査面積は18m²であった。各調査区の遺構掘削終了時には、遺跡の立地が沖積地の中にあり遺構面が複数存在する可能性も考えられ、また微高地形成状況の確認のため、遺構検出面を含めた掘削を行い土層断ち割りの記録を行った (Fig. 11)。2008年1月7日に第1調査区の表土剥ぎ作業から調査を始め、同年3月18日に第3調査区の埋め戻し作業をもって調査を終了した。

2. 遺構と遺物

遺跡の基本層序は (Fig. 11)、約20cmの耕作土と床土下には灰茶色砂質土層の各時代遺物を含む遺物包含層がみられ、その直下が茶褐色粗砂層や青灰色シルト層等を基盤とする安定面となる。その上面にてピット状、土壙状等の遺構を検出した。この微高地は、第2調査区②の西側では北西方向の谷に向けて傾斜している。その上面には、弥生時代前期末の土器を多く含む灰黒色粘質土が体積していた。

第1調査区

調査区は最も西側に位置しており、遺構面は浅く表土・床土と約10cmの厚さで堆積する遺物包含層である灰茶褐色砂質土層を剥いだ面にてピット状、土壙状の遺構を検出した (Fig. 11)。遺構を検出した基盤となる層は、青灰色シルト層、茶褐色粗砂層、黄茶褐色砂質土層など一様ではない。検出したピット状遺構の径は10~40cm、深さは10~25cmである。その配置は散漫であり、建物の復元などはできなかった。出土遺物は黒曜石のチップと土師器の小破片、須恵器小破片などが少量みられた。土壙状遺構は、全体的に平面は不定形を呈し、底面の形状も一定ではない。SK-05 (PL. 4) は、長軸約1.7、幅0.9mの不定形を呈しており、中央部は更に直径約50cmの不定形状に窪んでいる。出土遺物は須恵器、土師器の小破片がみられたが、その性格は不明である。SK-06 (PL. 4) は北壁際にて確認された土壙状の遺構である。平面形は壁際で3.5mみられ、調査区外へと延びている。埋土は灰茶褐色粘土と粗砂の互層である。埋土の状況から水が溜まる状況にあったと考えられる。出土遺物には、須恵器、土師器の小破片がみられた。

第2調査区

最も東よりに位置する調査区である。前述したように廃土置場の確保から東半、西半の2回に分けて調査を行った。東半を①と呼称する。①区は全体的に後世の削平が著しく遺構の検出はみられなかった。しかし、遺構面の土層に堆積する灰黄色砂質土内には、弥生時代から中世期までの小遺物が含

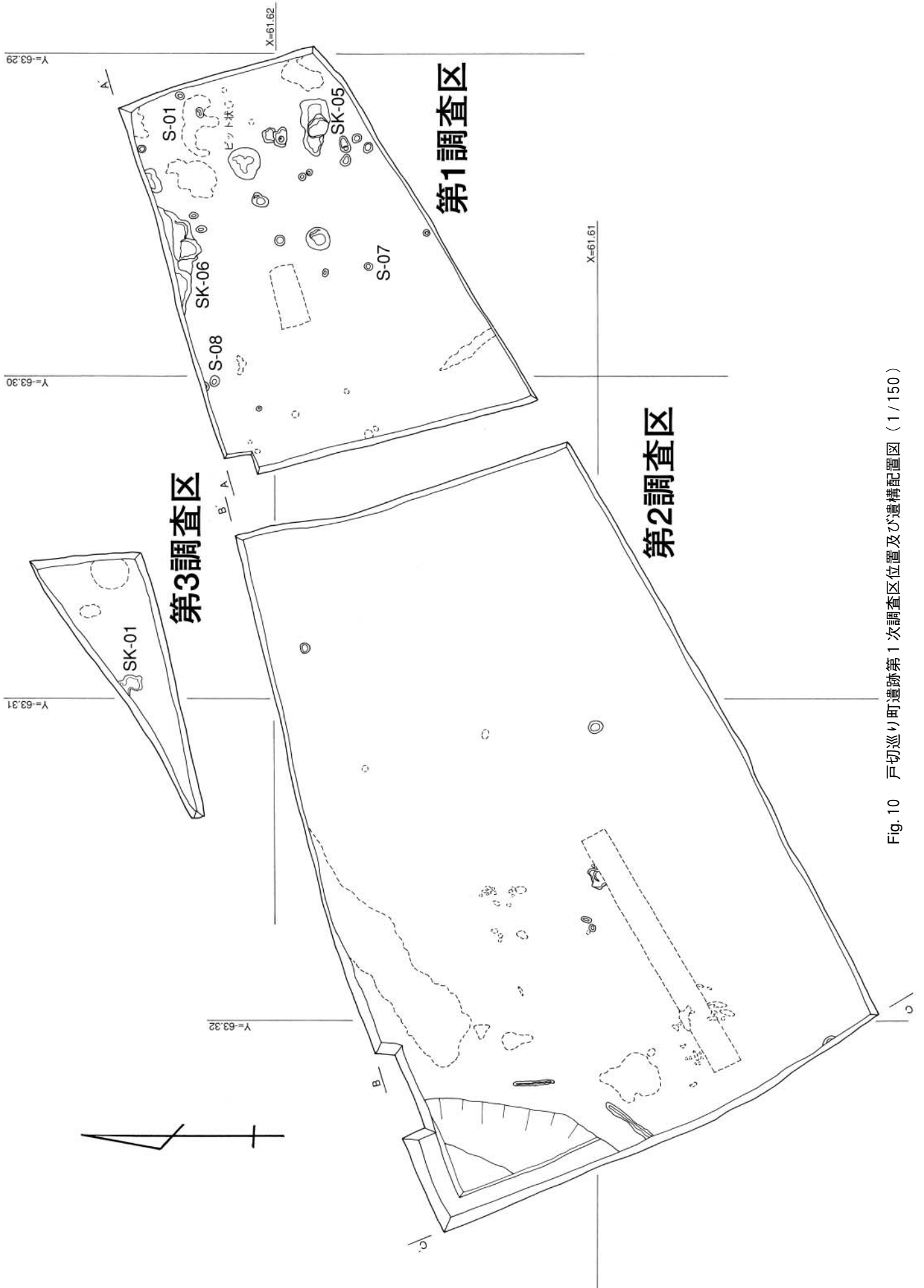
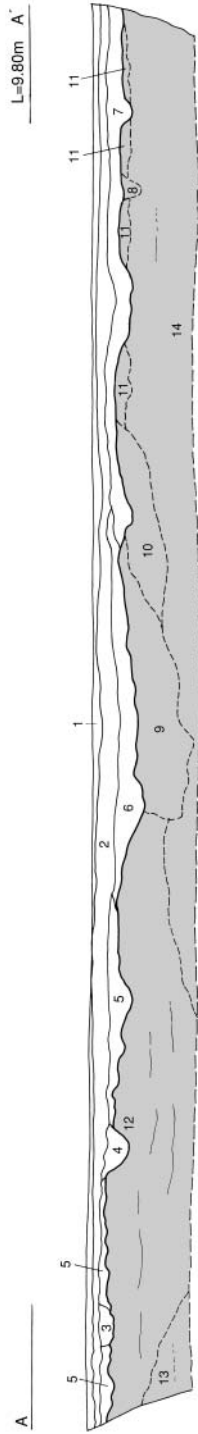
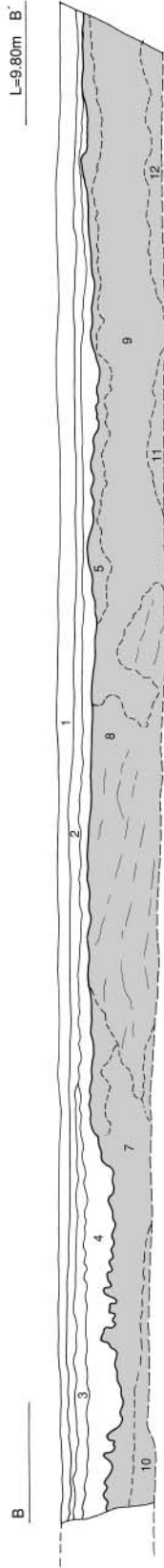


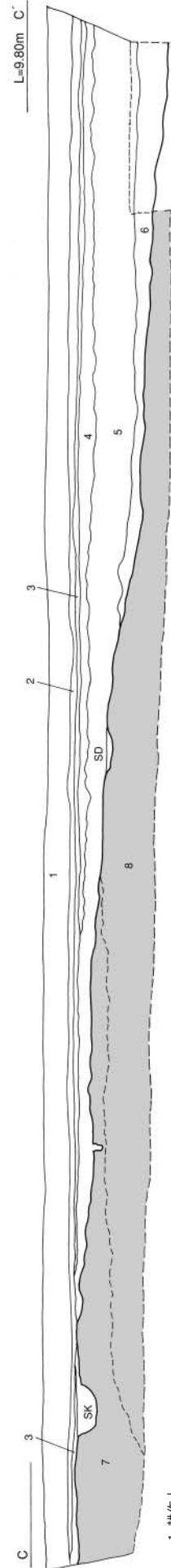
Fig. 10 戸切巡り町遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1 / 150)



- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 灰褐色砂質土層
- 4 灰茶褐色砂質土層
- 5 灰茶褐色砂質土層
- 6 灰茶色粗砂層
- 7 灰茶色砂質土層
- 8 茶褐色砂質土層
- 9 灰茶褐色砂質土層と粗砂層との互層
- 10 茶灰色粘質土層 (粗砂混じり)
- 11 茶褐色粗砂層
- 12 青灰色シルト層
- 13 青灰色シルト層と粗砂層との互層
- 14 灰茶色砂質土層



- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 灰黄色砂質土層 (マンガン粒を多く含む)
- 4 灰茶褐色粘質土層
- 5 黄灰色粗砂層
- 6 灰黄色粗砂層
- 7 灰白色粘質土層
- 8 茶褐色粗砂層
- 9 青灰色シルト層
- 10 灰褐色砂礫層
- 11 茶褐色粗砂層
- 12 灰褐色砂礫層



- 1 耕作土
- 2 旧耕作土
- 3 床土
- 4 黄茶褐色粘質土層
- 5 茶褐色砂質土層 (一部に粗砂層あり)
- 6 灰黒色粘土層
- 7 灰黄褐色シルト層
- 8 黄褐色砂礫層

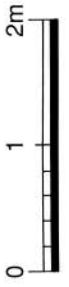


Fig. 11 調査区西側・北側土層推積状況図 (1/60)

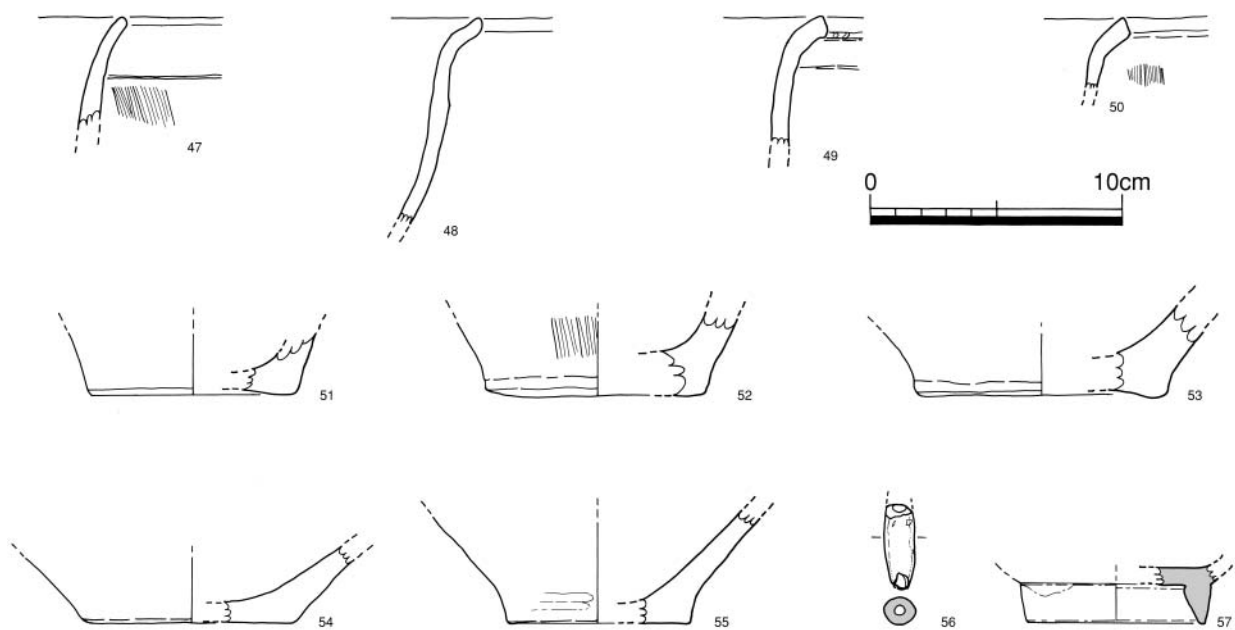


Fig. 12 戸切巡り町遺跡出土遺物実測図(1/3)

まれており、遺構の存在がうかがわれる。②区は①区同様に遺構の検出には至らなかったが、微高地が北西に落ちた肩部から谷内にかけて、遺物の出土が顕著であった。谷内の堆積状況は、大きく上下2層に分けることができる (Fig. 11)。上層の茶褐色砂質土層 (粗砂混じり) は、谷部を含めてやや広い範囲を覆っており、須恵器を含む古墳時代遺物がみられる。下層の灰黒色粘質土層は谷内の深い部分に堆積しており、弥生時代前期の遺物がみられる。出土遺物 (Fig. 12, PL. 15) 47~55は谷内下層出土の遺物である。47~50は甕の口縁部破片である。47, 49の口縁下に沈線が巡り、49の口縁端部には小さい刻み目が施されている。50の口縁端部は平坦に面取りされている。51, 52は甕底部の破片である。底部裾の張り出しはみられず、外面にハケメが施されている。53~55は壺底部破片である。底径はそれぞれ9.7、8.4、4.3cmである。56, 57は遺構検出時に出土した土錘と白磁碗の底部破片である。

第3調査区

調査地の北側を東西に横切る農道北側三角地の調査区である。検出遺構は不定形土壇1基であった。遺構は北側調査区壁際にて確認され、埋土は灰褐色砂質土 (黄褐色粘土混じり) であった。幅約50、長さ60cmがみられ調査区外へと延びる。遺物は出土していない。

3. まとめ

検出された遺構の密度は決して高いものではないが、谷を埋める土層には弥生時代前期後半の遺物が多くみられ、また古墳時代の遺物を包む層が基盤層の上面を広く覆うことから、当該期の集落の存在がうかがえる。今回の調査は第1次調査であり、今後の調査成果により集落構造などが明らかになることを期待したい。

第5章 兵庫遺跡 第1次調査

1. 調査の概要

兵庫遺跡の発掘調査は、今回の道路改良工事に伴い先行して行われた埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査により、新たに発見された遺跡である。試掘調査の成果から、沖積地の中に残る微高地上に遺構の遺存があり、その範囲は一定の広がりをもつことが分かった。古地図・古写真等を参照しながら旧地形の復元をおこない、遺構の遺存が想定される範囲をこの遺跡の範囲とした。

今回の調査地は幅約18mある道路の新設部分にあたり、全面の調査が調査対象地となった。調査地内には後世の削平により遺構の遺存していない範囲と用地がまだ利用されている部分があり、調査地を2地点に分けて作業を行った。現在も利用されている部分は今後発掘調査を継続して行う予定である。第1調査区は、遺跡範囲の西端の調査区である。調査は、廃土処理の都合から東側、西側の順で2回に分けて行った。面積は263m²である。2007年11月1日から掘削を始め、11月下旬に廃土を反転、12月17日に埋め戻し作業を行った。第2調査区は、遺跡範囲の東端の調査区である。廃土処理の都合から西側、東側の順で2回に分けて調査を行った。面積は464m²である。2007年11月14日に掘削を始め、翌年3月18日に埋め戻した。

2. 遺構と遺物

出土遺物の主体を成すのは、弥生時代前期末から中期初頭のものである。当該期の遺構は壁立ち建物、大型掘立柱建物、木製品の水漬け遺構である。また微高地間の谷部には多くの遺物が含まれていた。それ以外には古墳時代の溝、古代末の溝などが検出された。

第1調査区

遺跡の基本層序は (Fig. 15)、40～60 cmの厚い盛土が全体を覆っており、旧耕作土と床土下には黒茶色粘質土層の遺物包含層がみられ、その直下が茶褐色砂質土層や灰褐色粗砂混じり層等を基盤とする安定面となる。その上面にて遺構を検出した。この微高地は、西側に緩やかに傾斜しており、調査区西半の調査では残存は悪いものの遺構が検出されたが、東半の調査区は地山の削平が著しく遺構の良好な遺存はみられなかった。今回の調査では調査区西側を中心に、構造の異なる壁立ち建物を4棟検出した。

SD-01 (Fig. 14)

調査区北西隅にて検出した水溜まり状の遺構である。2×3 mの平面規模が確認され、底部は漏斗状に一個所深くなっている。埋土は (Fig. 15)、粗砂、砂質土、礫、拳大礫などが層状に堆積しており、水の強い作用と関係する性格をもっていたことを裏付けている。出土遺物 (Fig. 18, PL. 15) には、58の須恵器つまみ付坏蓋がみられる。つまみ部は宝珠形を呈しており、直径1.6 cmである。遺構の埋没時期は、出土遺物から7世紀代と考えられる。

SD-02 (Fig. 14)

調査区西側にて検出され、SD-03とほぼ平行する溝である。幅約20、長さ300 cmが確認された。遺構の残存深さは約10 cmで、どちら側に流れていたかは不明である。遺物は、摩滅した土師器小破片が出土している。

SD-03 (Fig. 14)

調査区西側で検出され、SD-02とほぼ平行する溝である。N-32° -Eの方位を有し、直線的に幅1.3、長さ7 mが確認された。埋土は (Fig. 15)、上下2層に分けることができ、上層は淡灰茶色砂層、下

層は暗茶色粘質土層である。土層の観察から、遺物包含層の上面から掘り込まれており、包含層形成後に機能していたことが明らかである。底部の傾斜は南西から北東方向である。遺物は、摩滅した土師器小破片が出土している。

SD-04 (Fig. 14)

調査区南西隅にて検出された溝である。片側肩の検出長は約5.5mあり、SB-03を切る。その幅は、調査区外へと延びており不明である。N-38°-Wの方向をとり、検出部分での底面レベル差が少ないため傾きの方向は不明である。埋土は、黄灰褐色砂質土であった。遺物包含層を切っており、出土遺物には摩滅した土師器小破片がみられる。

SB-01 (Fig. 16, PL. 7)

SD-03とほぼ方向を揃えるように検出された壁立ち建物である。SP-1と6の間は試掘トレンチにより失われている。N-40°-Eに長い1×2間の建物で柱間には溝や杭痕などがみられる。梁間は芯々で約1.5m、桁行は全長で約4.5m。桁間は梁間より大きなスパンとなる。北西側の柱穴から、時計回りにSP-1～6まで番号を付した。6穴の柱穴状の平面規模は40～70cmの不定形を呈しており、残存する深さは約20～50cmである。各柱穴の埋土中には黒灰色粘質土と地山粒が混じる層があり、共通性をみることができる。建物の南側区画をなすSP-1、2、5、6の間は、幅20～25cmの溝状と凹み状の遺構でつながっている。柱穴同様、黒褐色粘質土を主体とする土壌で埋められており、焼土等は見られなかった。それに対して北側区画のSP-2と3、SP-4と5の間には小さな杭状の痕跡がみられる。杭状痕跡の規模は2～15cmのほぼ円形を呈し、残存する深さは5～15cmである。SP-3と4の間にはピット状の遺構はあるが、他の痕跡はみられなかった。そして、溝状遺構の底部等に杭状の遺構はみられなかった。柱間にみられる溝状、杭状遺構どちらも壁を立てるための構造物の痕跡であるが、同一建物内で異なる構造が使用されていることになる。

建物規模としては1×2間、1.5×4.5mの小規模なものであり、さらにSP-2と5間に壁を立てた痕跡があることから、2部屋としての利用が想定される。

出土遺物 (Fig. 18, PL. 15) は極めて少なく、弥生土器片が出土した。59はSP-3から出土した甕の口縁部破片である。口縁端部外側を断面三角形につくっており、刻目等は見られなかった。遺構の配置関係からSD-03と強い関係にあるようにも思われたが、その埋土に大きな差異があり、遺物包含層との関係からも時代差は歴然としており、等高線に平行するという地形的な規制を受けて同方向につくられたものと考えられる。遺構の時代は、出土遺物が少なく不確定であるが、遺物から弥生時代前期末中期初頭頃と考えられる。

SB-02 (Fig. 16, PL. 7)

調査区南側、SB-01の南東側で検出された壁立ち建物である。ピット状の遺構が連続して、ほぼ方形に巡る遺構である。北西・南東辺が約2.0m、南西・北東側辺長が約1.8mである。北西列の遺存がやや良好であり、その方位はN-41°-Eをとる。溝の幅は20～40cmである。埋土はSB-01同様、黒灰色粘質土を主体とするもので、四隅に特別な構造の痕跡はみられなかった。

出土遺物は極めて少なく、北西側溝から弥生土器の小破片が出土している。また、建物中央部に近いピット状遺構からも弥生土器の破片が出土している。茶褐色を呈する土器片で器壁外面は、細かいハケメの後、撫で消しの調整を施している。

SB-03 (Fig. 17, PL. 8)

調査区南西隅にて検出された壁立ち建物である。2間分の柱穴とその間をつなぐ溝状遺構が確認された。柱列の方向はN-75°-Wであり、2間の柱間はどちらも約1.8mである。柱穴の残存する深さは30～50cmである。溝の幅は約10～30cmであり、残存する深さは約10～15cmである。溝の底面は



Fig. 13 兵庫遺跡第1次調査区位置及び遺構配置図 (1/300)



Fig. 14 兵庫遺跡第1次調査第1区遺構配置図 (1/100)

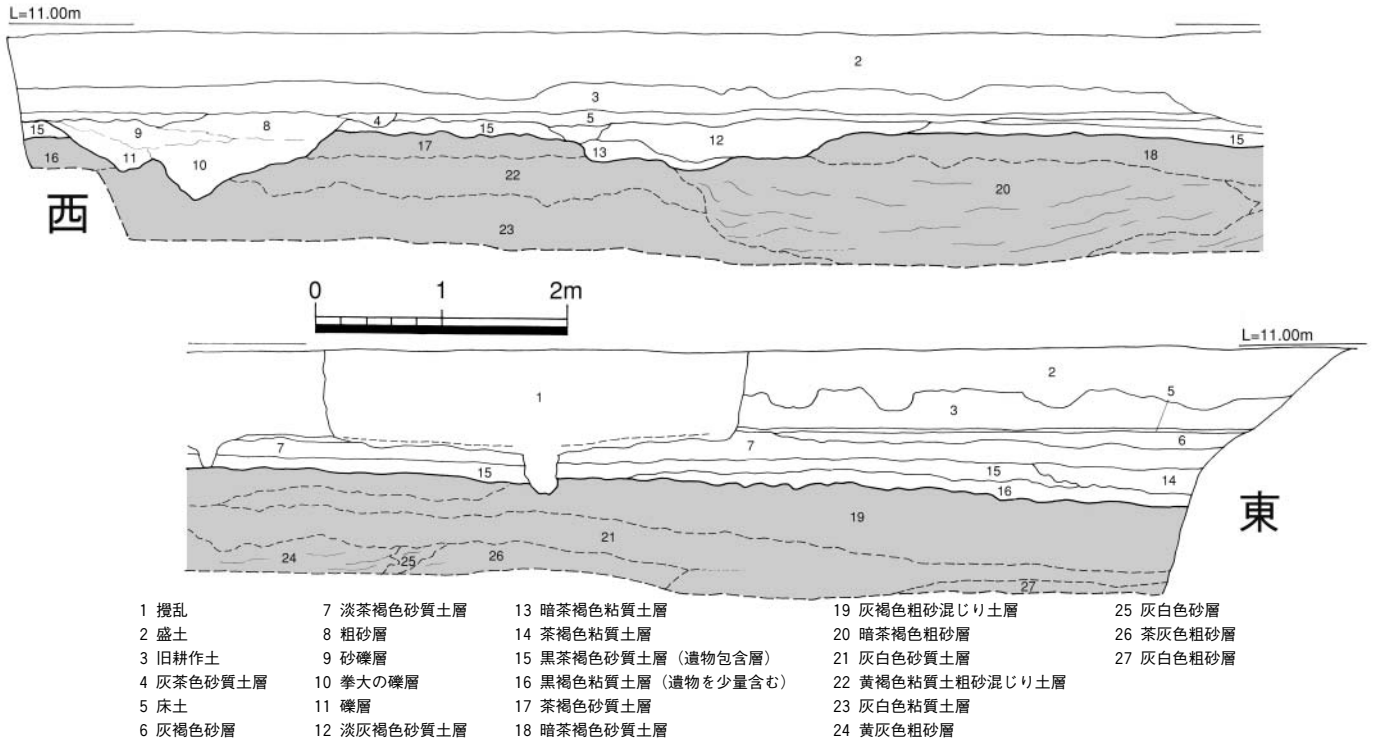


Fig. 15 第1調査区北側壁土層推積状況図 (1/60)

比較的平坦であり、緩やかな凹凸がみられる。埋土は黒灰色粘質土であり、遺構廃棄後大きな削平を受けており、その後黒褐色の遺物包含層が堆積している状況が調査区南壁の土層観察から明らかとなっている。出土遺物は無く、掘削時期は土層堆積状況などから、他の壁立ち建物群と近い時期のものと推測される。

SB-04 (Fig. 17, PL. 8)

調査区北側中央、SB-01の北東側にて検出された壁立ち建物である。小さなピット状の遺構と杭状の痕跡が略方形に巡るものである。ピット状遺構は直径20cm前後、残存する深さは10~20cmである。杭状遺構は直径10cm以下のもので、残存する深さは5~20cmである。SB-01とほぼ同方位のN-42°-Eをとり、北西・南東辺が約2.0m、南西・北東側辺長が約2.1mである。四隅に特別な構造の痕跡はみられなかった。SB-01との間にL字形の杭列がみられ、柵ないしは同様の建物が存在した可能性が考えられる。遺物は小破片を含めて出土していない。

壁立ち建物について

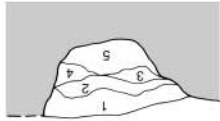
北部九州の弥生時代前期末中期初頭の住居群の中には、炬をもたない納屋や作業場と考えられる小型の住居を伴う場合があることが知られている。今回検出された小型建物群は、壁立ち構造の平地式建物であり、その規模は一辺2m前後とほぼ近似しており、近接して配置されているにも関わらず、その詳細な構造が異なる点が特徴である。01は四隅にやや大きい柱を立て、一部屋分はその間を溝でつなぎ、もう一部屋分は杭を打つ構造である。02は四隅には柱を立てずに溝だけが巡る構造である。03は四隅に小さめの柱を立て、その間を溝でつなぐ構造の部屋を連結させている。04は杭の打設のみで柱構造を伴わない構造である。このように4基とも異なる様相を示している。

このような構造形態をもつ遺構の類例を他遺跡資料で概観したい (Fig. 19)。まず弥生時代前期末頃の小型住居とされているものである。

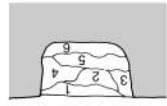
①は、博多区金隈の持田ヶ浦古墳域で検出されたものである。一辺約3.2mのほぼ方形を呈する竪穴住居である。壁溝が巡り、四隅に小穴がみられる。床面上に柱穴はない。明らかに平地式住居では

(地山ブロックを含む)

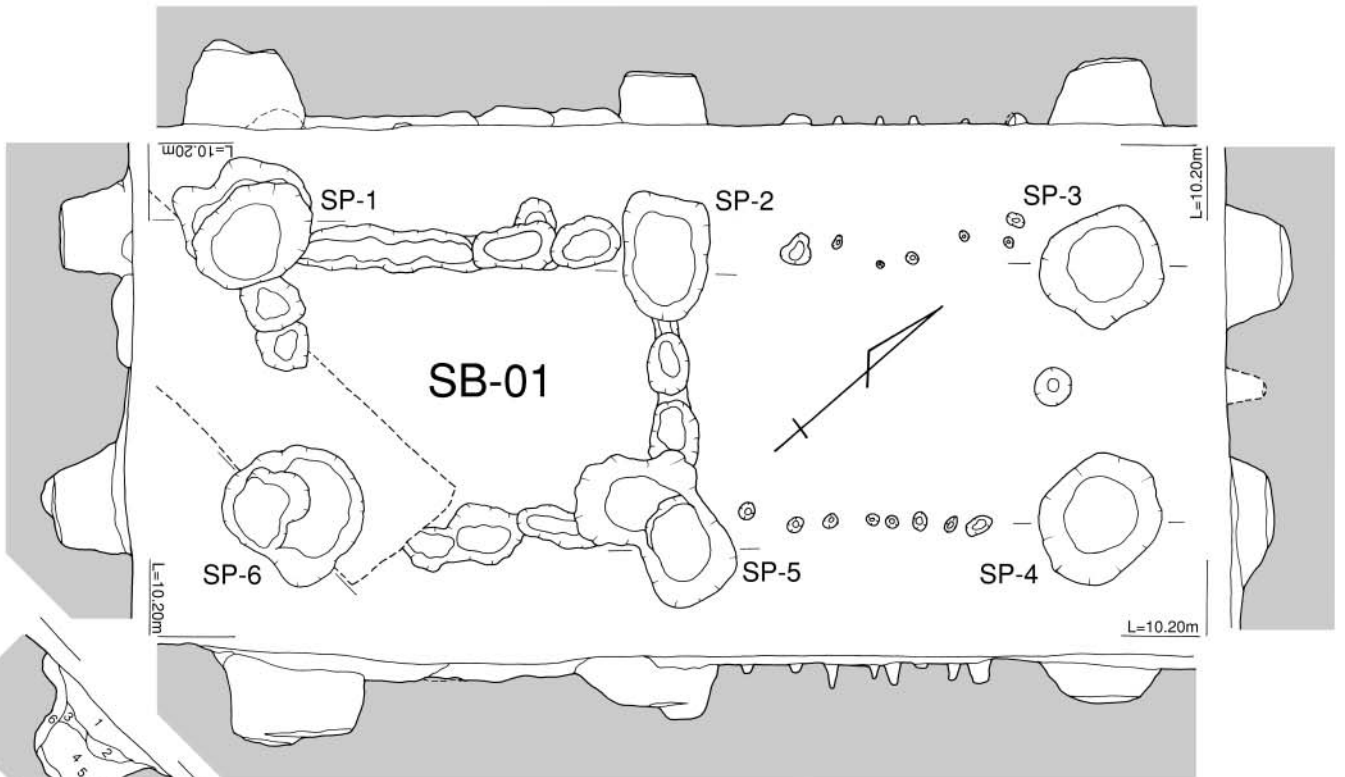
- 5 黒灰色粘質土層
- 4 地山ブロック
- 3 黄褐色地山ブロック
- 2 灰褐色粘質土層
- 1 灰茶褐色粗砂層



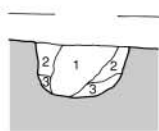
- 6 黒灰色粘質土層
- 5 黄茶褐色粗砂混じり土層
- 4 灰茶褐色粘質土層
- 3 黄灰褐色粗砂混じり土層
- 2 灰褐色粗砂混じり土層
- 1 灰褐色粗砂混じり土層



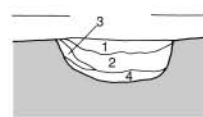
- 5 黒灰色粘質土層
- 4 黄灰色粗砂混じり土層
- 3 灰茶色粘質土層
- 2 灰褐色粗砂混じり土層
- 1 茶灰色粗砂混じり土層



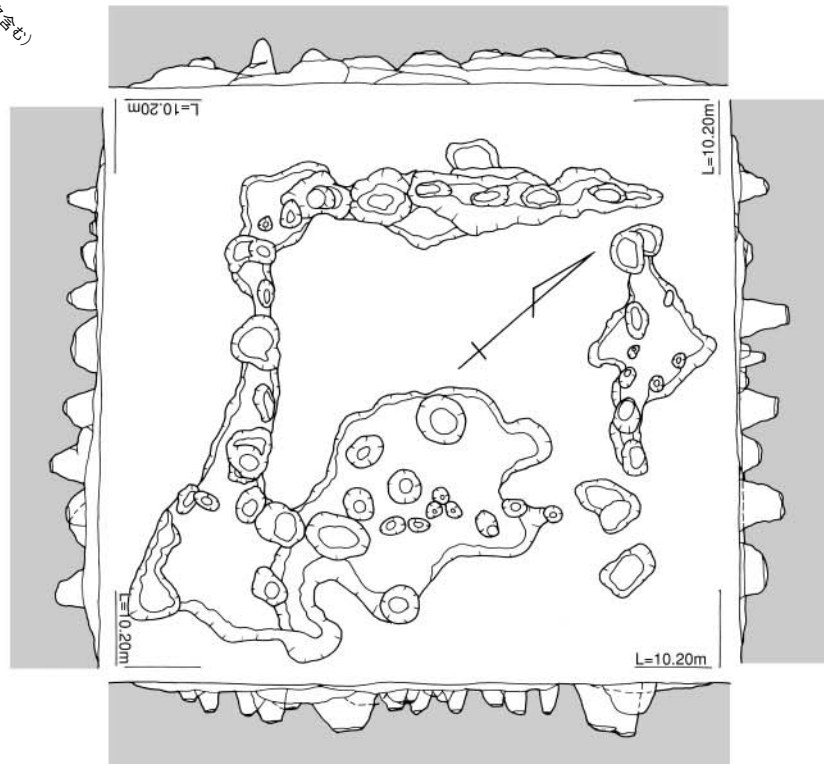
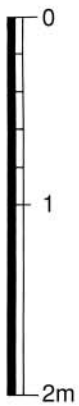
- 1 灰黄色粗砂混じり土層
- 2 黄褐色地山ブロック
- 3 茶灰色粘質土 (粗砂含む)
- 4 茶灰色粘質土 (地山ブロック含む)
- 5 黒灰色粘質土層
- 6 黄褐色地山ブロック



- 1 灰黒色粗砂混じり土層
- 2 灰茶褐色粗砂混じり土層
- 3 暗灰褐色粗砂層



- 1 明灰黒色粗砂混じり土層
- 2 灰黒色粗砂混じり土層
- 3 黄褐色地山ブロック
- 4 暗灰黒色粘質土層



SB-02

Fig. 16 第1区SB-01・02遺構実測図 (1/40)

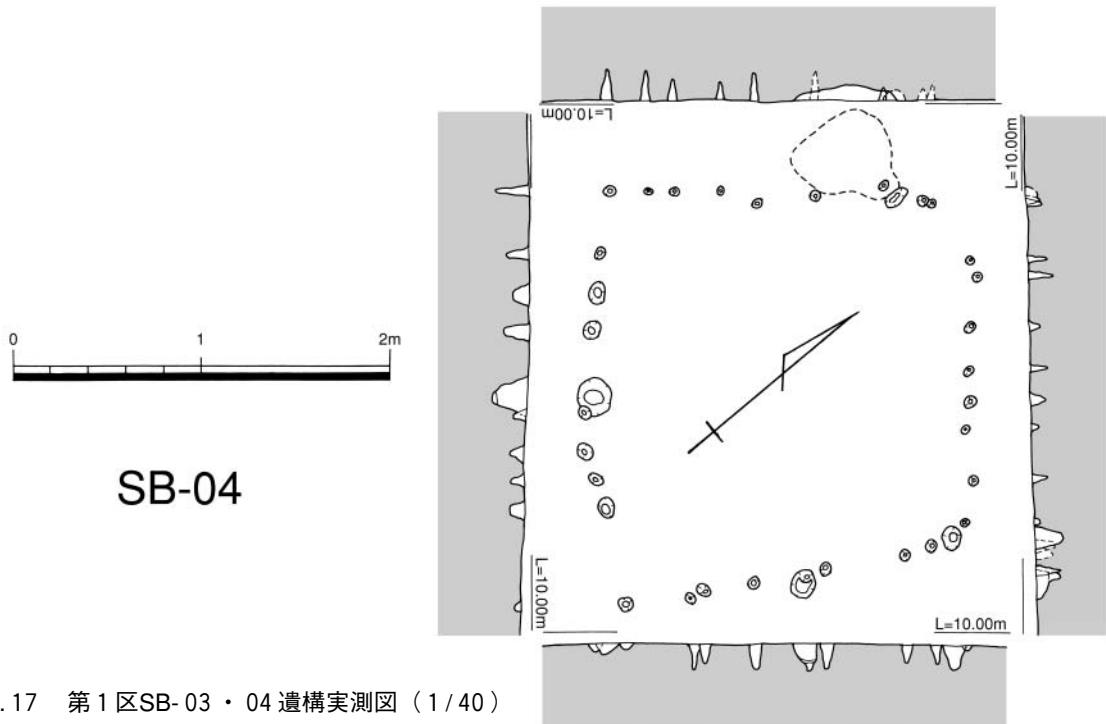
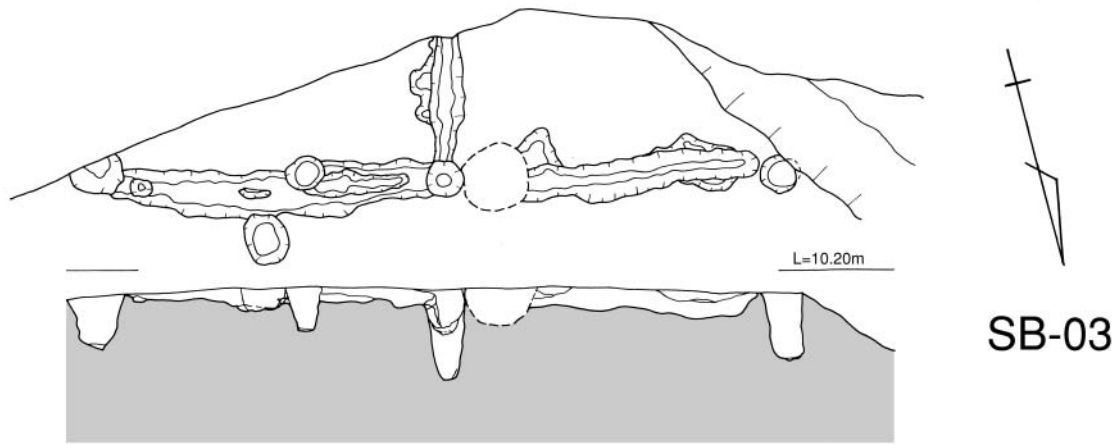


Fig. 17 第1区SB-03・04遺構実測図(1/40)

ないが、削平が著しければ、同様な状況を示す可能性があり、図示した。

②は、博多区新和町の雑餉隈遺跡第5, 8, 10次調査検出住居である。幅20cmの溝が、平面形3×3.6mの長方形を呈するように巡る遺構である。溝内には四隅を含め幾つかの小穴がみられ、中央部床面には焼けた部分がある。入口構造もみられる。時代を示す出土遺物はないが、周辺には前期の遺構がみられる。

③は、博多区井相田の井相田C遺跡第3次調査検出の住居である。3.5×4.2mの長方形を呈する。2本の支柱穴をもち、壁溝内に2×3間分の柱穴がみられる。前期の住居と考えられている。

④～⑥は博多区福岡空港内の雀居遺跡第12次調査の円形溝とされて家畜小屋と想定されている遺構である。同10次・13次調査においても数基の円形溝が調査されている。今回は12次調査の3基を取り上げる。遺構の切り合い関係から前期中ごろ以前と考えられている。

④平面形は楕円で、長軸1.4、短軸1.2mである。溝の底に深さ13cm前後の小ピットが連続してみ

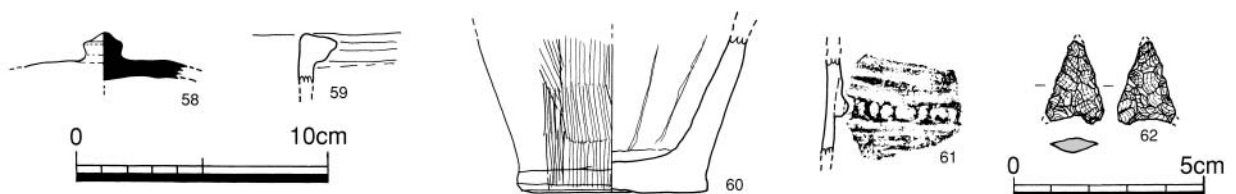
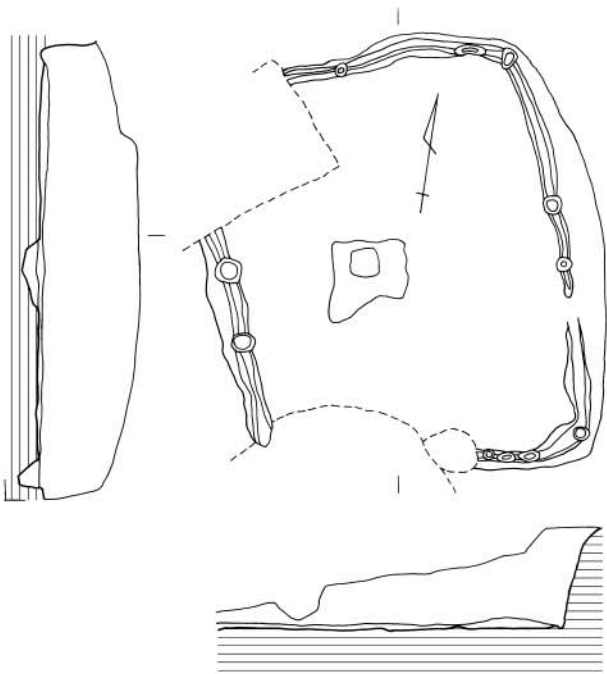
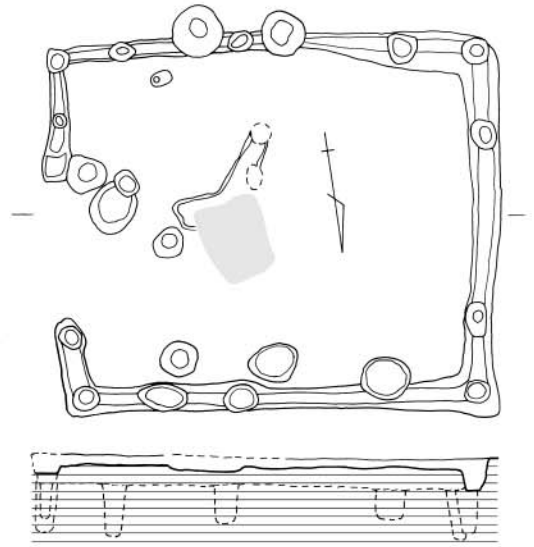


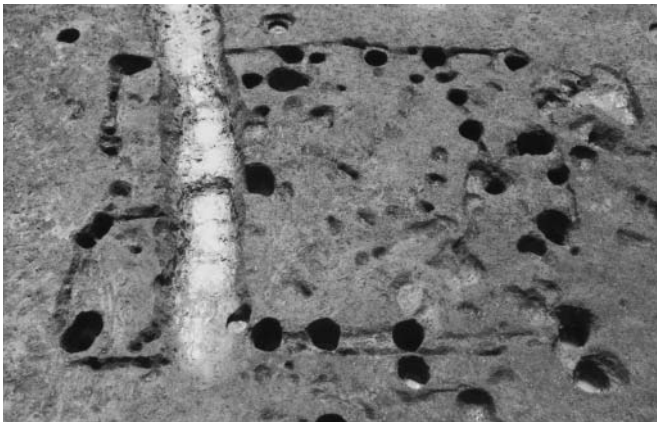
Fig. 18 第1区SD・SP出土遺物実測図(1/2・1/3)



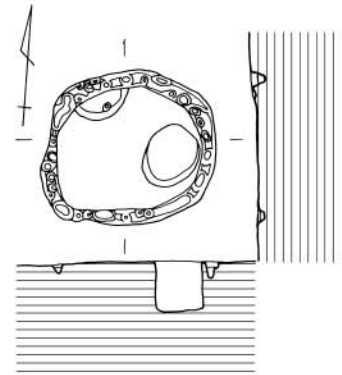
① 博多区金隈 持田ヶ浦古墳域



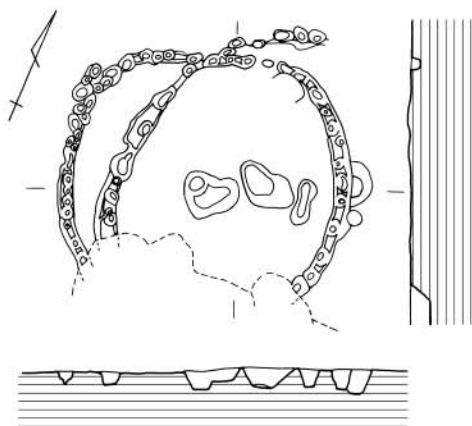
② 博多区新和町 雑餉隈遺跡第5, 8, 10次方形周溝58



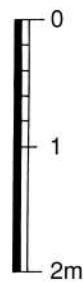
③ 博多区井相田 井相田C遺跡第3次SC44



④ 博多区大字雀居 雀居遺跡12次SS01



⑤ 博多区大字雀居 雀居遺跡12次SS02・SS03



⑥ 博多区大字雀居 雀居遺跡12次SS04

Fig. 19 小型壁立ち住居、家畜小屋類例 (1/60)

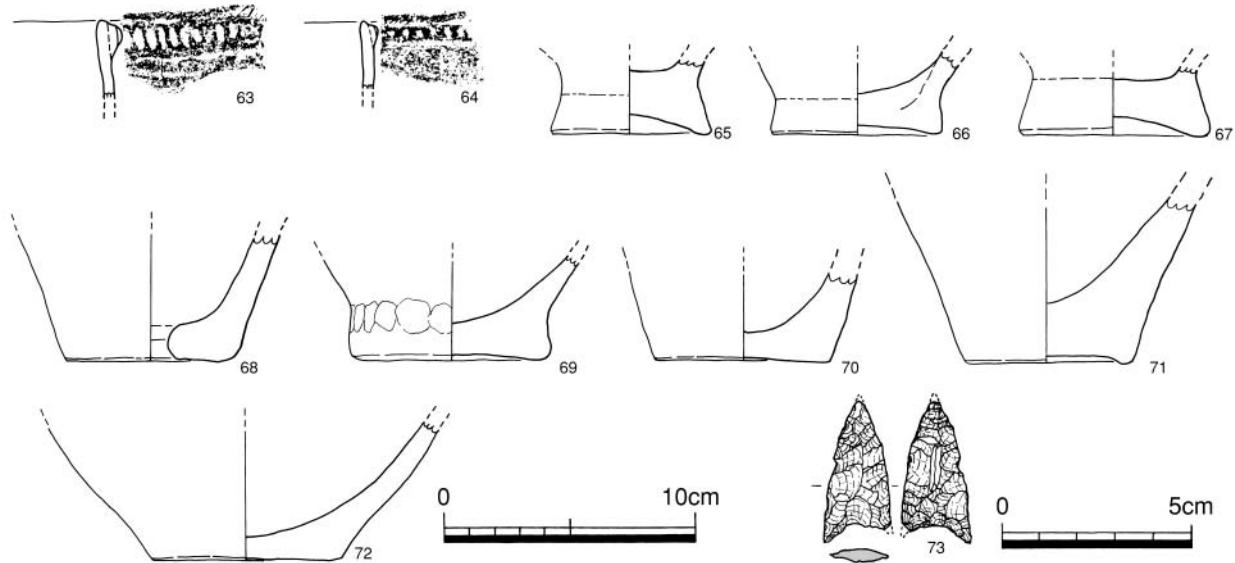


Fig. 20 第1区遺物包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）

られる。最も規模の小さい遺構である。

⑤2基の円形溝が切り合っている。遺存の良好な遺構の平面は楕円形を呈しており、復元直径は約3.5mと考えられる。

⑥やや長い楕円形で、長軸2.3、短軸2.3mである。幅15cmの溝の中に39個の小ピットが並んでいる。以上市内で確認されている同時代と思われる類似遺構と比較すると、SB-04は杭だけで構成されており、雀居遺跡の家畜小屋と考えられている遺構と共通性がある。SB-01の柱穴の掘り方は大きく、柱の強度も高く恒久的の構造物であったと推測される。SB-03も同様であるが、建物内空間の中央に壁を立て狭い複室構造にして、狭小な空間と臨機応変とも思える多様な構造が、この遺構の性格解明のカギであるように思われる。

その他の遺物 (Fig. 18・20, PL. 15)

SP-12はSB-02の東側に位置し、直径25、残存深さ25cmのピット状遺構である。SP-11と溝状の遺構でつながっているが、それ以外の展開は確認されなかった。60はSP-12から出土した甕底部である。底径7.6cmで、底部中央部だけが少し上げ底になる平底である。外面は細かいハケメが低位まで施されており、内面には木口の跡が残る。

SP-14はSP-12のさらに東側に位置する、長軸40、短軸20cmの楕円形を呈し、残存深さ25cmのピット状遺構である。61が出土した。屈曲甕の胴部の破片である。外面器壁には条痕が残るが、屈曲の角度はゆるい。

SP-13はSP-12の東側に位置する。長軸50、短軸35cm、残存深さ約15cmの凹み状の遺構である。62はSP-13から出土した無茎の黒曜石製鏃である。先端と脚が欠損しているが残存長2.3、残存幅1.6、厚さ0.4cmである。

63～73は、遺構検出面の上面を覆う遺物包含層からの出土遺物である。63、64は刻目突帯文土器の口縁破片である。破片のため口径等は不明である。65～67は底部の中央部が上げ底気味になる甕底部破片である。底径はそれぞれ6.4、7.5、7.4cmである。68は底部に焼成後穿孔をもつ甕底部である。底径は6.6cmである。69は底部裾が広がり、外面くびれ部に圧痕が残る甕底部片である。口径7.6cmである。70、71は底部裾がすぼまるタイプの甕底部である。底径はそれぞれ7.0、6.6cmである。72は壺の底部で、底径は3.7cm。73は無茎黒曜石製鏃で全長3.8、幅1.8cm、断面は薄い菱形であり厚さは0.4cmである。

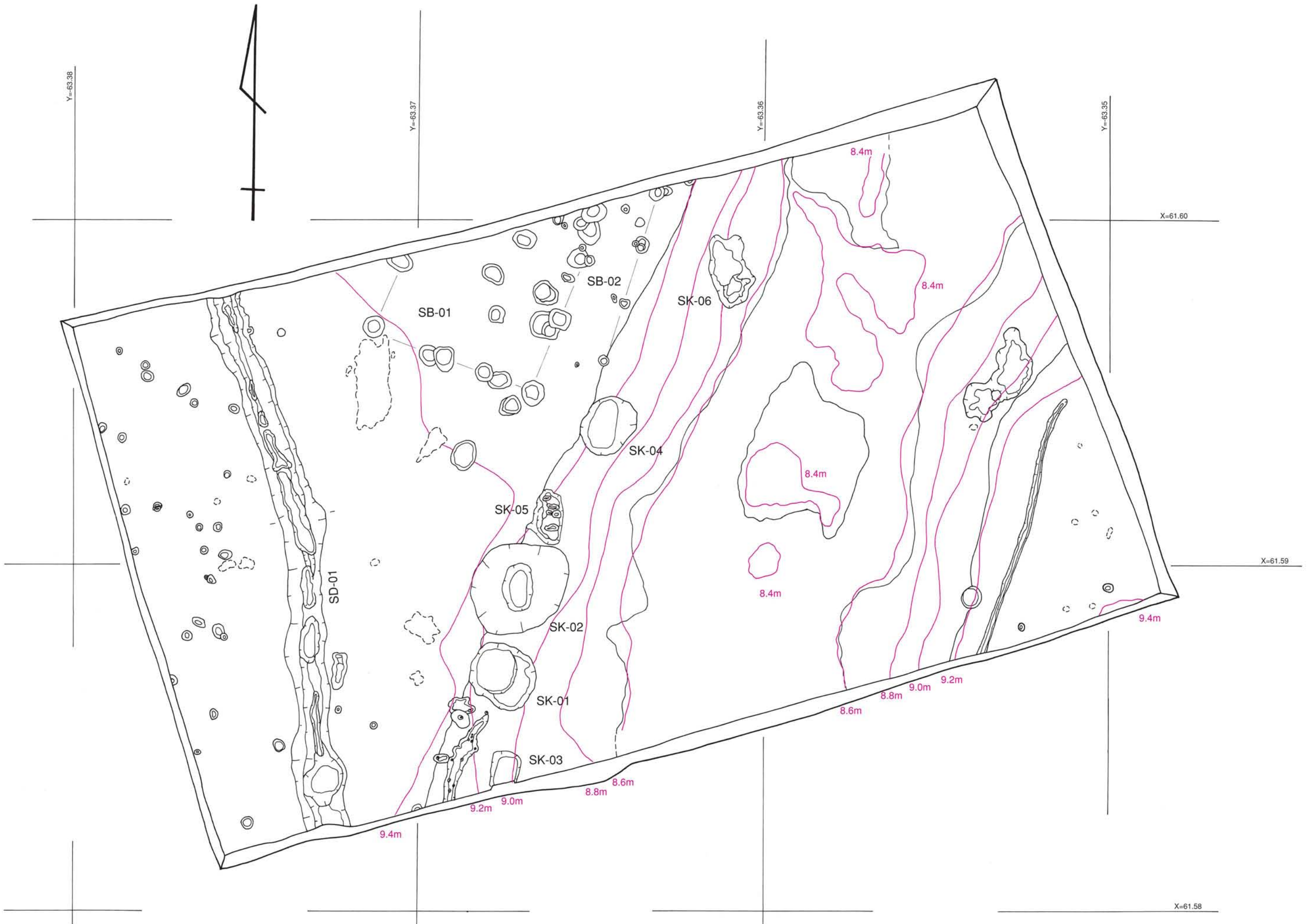


Fig. 21 兵庫遺跡第1次調査第2区遺構配置図 (1/100)

第2調査区

調査は試掘の成果から、約350m²の調査区を設定して行った。地勢は西側が黄灰色粘質土層などを主とする安定面であり、溝、柱穴、土壇などの遺構を検出した。東側は、谷状に緩やかに落ちており、谷内に堆積する黒色土からは多くの遺物が出土した。谷内土壌には多くの遺物が含まれているため、東側に調査区の拡張を行った。拡張区から黄褐色の安定面が確認され谷の範囲がほぼ明らかとなった。この安定面は、周辺の試掘成果と照合すると、南から続く舌状を呈する安定地と思われる。その範囲は不明であるが、中洲状となる可能性も考えられる。遺跡の基本層序は (Fig. 22)、25~40cmの旧耕作土と床土下には灰茶褐色粘質土層の遺物包含層が微高地上に部分的にみられ、その直下が黄灰色粘質土層や灰白色粘土層等を基盤とする安定面となる。その上面にて遺構を検出した。今回の調査では調査区西側を中心に、掘立柱建物2棟、土壇6基、溝1条を検出した。

SB-01 (Fig. 23)

この掘立柱建物は、調査区中央部北側にて検出された。周辺には幾つかの柱穴が分布しており、その中で建物として復元された一棟である。遺構の範囲は調査区北側に広がっており、方位をN-21°-Eにとる3間×3間以上の建物である。SP-1は北側調査区壁の際に位置しており、一部は調査区外へ広がる。長楕円形を呈すると思われる、残存深さは約25cmである。出土遺物はない。SP-2は直径約40cmのほぼ円形を呈する柱穴で、建物の角にあたる。残存する深さは約10cmであり、遺物は出土していない。SP-4はSP-3に切られる。SP-4は長軸40、短軸30cmの楕円形を呈し、残存する深さは約10cmであった。遺物は出土していない。SP-5はSP-6を切っている。SP-5は直径約35cmのほぼ円形を呈しており、残存する深さは約6cmであった。遺物は出土していない。SP-12は直径約45cmの略円形を呈する、建物角の柱穴である。残存深さは20cmである。弥生土器の小破片が2点出土している。SP-13はSP-14を切る。SP-13は長軸40、短軸35cmの隅丸長方形を呈し、残存する深さは20cmである。弥生土器片が2点出土している。SP-16はふたつの小ピットに切られる。長軸45、短軸40cmの長楕円形を呈し、残存深さは20cmである。弥生土器の小破片が2点出土している。梁間は芯々で約3.3mであり、柱間は1~1.15mである。桁間は1.3~1.5mと梁間よりやや長い。埋

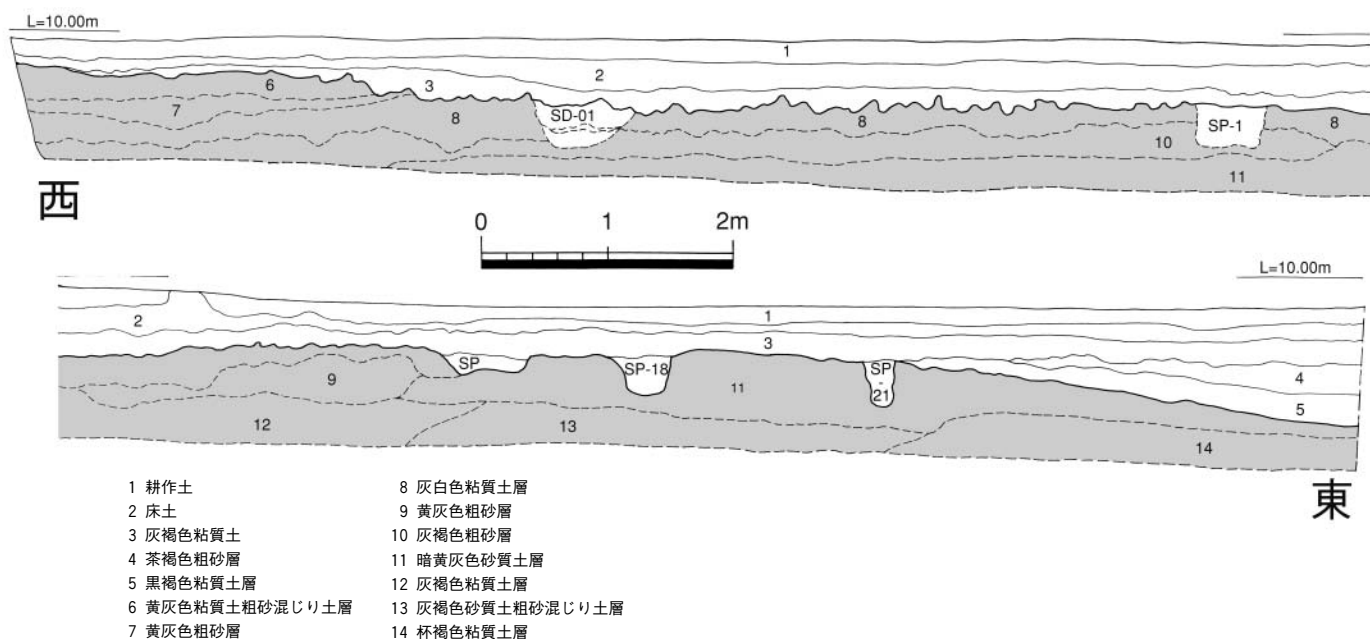


Fig. 22 第2調査区北側壁土層推積状況図 (1/60)

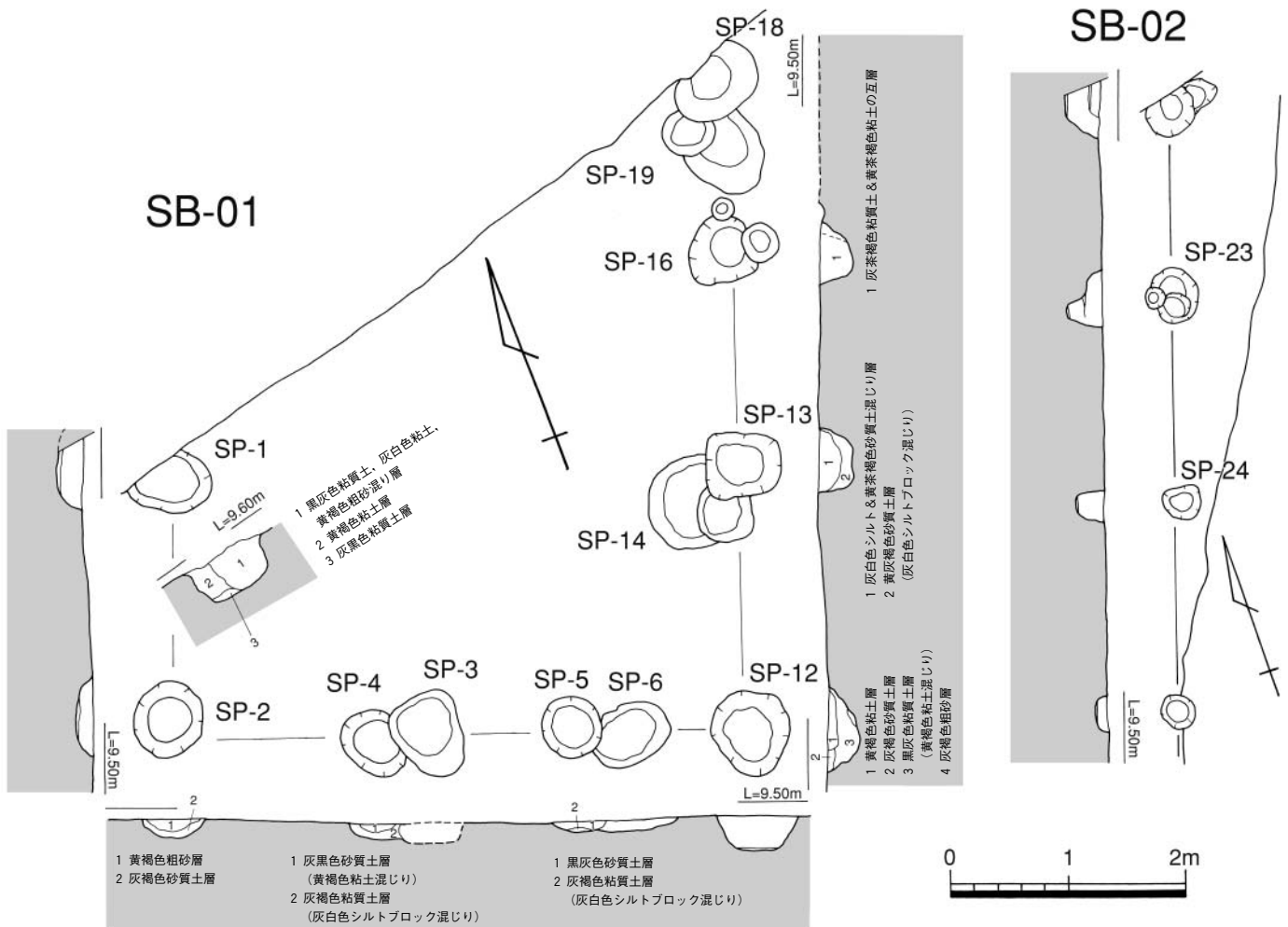


Fig. 23 第2区SB-01・02遺構実測図(1/60)

土は茶褐色～灰黒色の土である。出土遺物が少なく構築時期の断定はできないが、弥生時代以降の遺物はみられないため、周辺遺構と同時期と考えておきたい。

SB-02 (Fig. 23)

この柱列は、SB-01の東側で検出された。方位をN-18°-Eにとる3間分である。ほぼSB-01と平行するが、どのように展開するか不明である。北端の柱穴は調査区の際にあたり遺構の一部は調査区外へ広がる。長軸45、残存深さ20cmである。2穴目はSP-23である。小穴に切れ、長軸30、短軸25cmの楕円形を呈し、底面は一部が深くなっている。残存深さは20cmである。弥生土器片が出土している。3穴目はSP-24である。直径20cmの不定形を呈し、残存深さは16cmである。弥生土器片が出土している。南端の柱穴は直径約20cmの略円形を呈し、残存深さは8cmである。柱間は芯々で北から約1.2、1.1、1.2mである。遺構の時代は、出土遺物が少なく不明であるが、弥生時代の範疇におさまるものと考えられる。

SK-01 (Fig. 25, PL. 10)

この土壌は調査区西寄り、微高地の落ち際に位置する。北側のSK-02とは、幅40cmの溝でつながっている。平面は長軸2.1、短軸1.9mの楕円形を呈し、残存する深さは約50cmである。覆土は灰黒色粘土が主で、黄褐色粗砂が間層としてはいる。多くの木製遺物が出土した。諸手鋤の未製品、エブリの未製品、太型蛤刃石斧柄などがあり、木製品は土壌の壁側に寄せているものが多かった。木の先

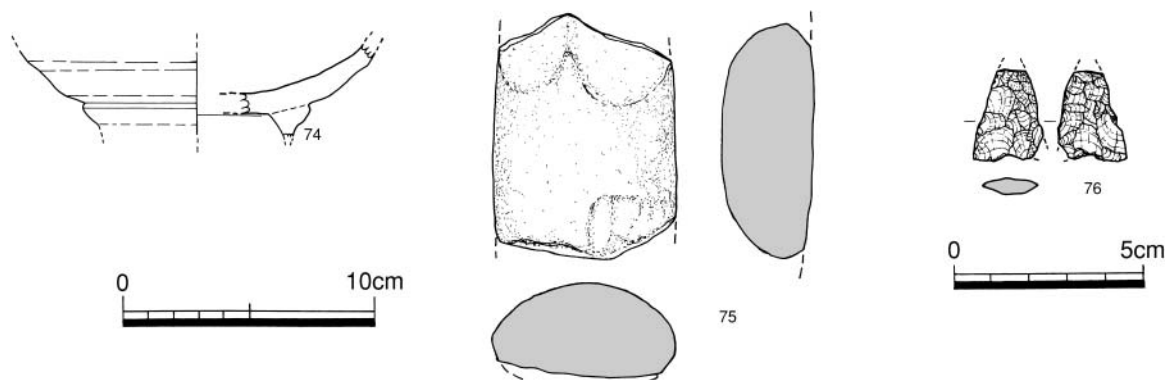


Fig. 24 第2区SD・SP出土遺物実測図（1/2・1/3）

端を尖らせた杭も打たれているが、木製品に打たれているものや、杭のうち数本は土壌の底面にとどいていないものもあり、土壌がある程度埋没した後、乱杭が打たれたことが分かる。木器は未製品、未加工品であったが、石斧柄1点だけが廃棄品であった。

出土遺物 (Fig. 26・27・28・29, PL. 15・17) 77は如意形口縁の甕上半部破片である。外面頸部下に沈線が一条めぐる。口径は25.2cmである。78, 79は口縁部を断面三角形につくる甕である。78は口縁下に断面三角形の突帯を一条貼り付ける。口径15.2cmである。79は甕口縁部の破片である。内面は指押さえ、断面三角形の口縁端部に淡い刻み目を施す。80~82は甕底部である。80は厚底を呈し、裾の張り出しが強い。底径は7.4cmである。81は平底のもので底中央部がやや上げ底になっている。底径6.3cmで内面には煤が付着している。82平底で底部の上げ底が強いものである。底径6.4cmである。83は壺の底部破片である。底径13.2cmである。84は土壌内東壁近くで出土した諸手鋏の未製品である。荒加工だけをしたもので、刃部や柄孔は、まだ加工されていない。全長55.1、最大幅22.1cm。柄穴隆起は菱形を呈し、長軸22、短軸10.8、隆起高4.2cmである。刃部の幅は22.1と18.8cmで、厚さは約3cmである。木取りはカシ材の柾目取りである。85は土壌内南東部の壁際で出土した不明木製品の破片である。木取りは板目取りで、内側に向けて緩やかに弧を描く。全長36.5+ α 、幅16.4、厚さ1.4cmである。86は土壌内南側で諸手鋏、エブリ未製品などと出土した板状木製品である。出土時はほぼ完形であったが、上面から杭が打たれており、取上げ時に約1/3が小片に崩れた。形状は隅丸長方形を呈しており、片面は緩やかに弧を描いている。全長37.2、厚さ約2cmで、木取りはカシ材の板目取りである。87は土壌内北側やや西寄から出土した舟底形を呈する加工材である。板面に加工痕が残る。全長70.8、最大幅20.2、最大厚7.8cmである。割さい後、板面は丁寧に加工されているが一方の側縁部には樹皮を残す。木取りはカシ材の板目取りである。88は土壌内中央部やや北側で石斧柄とともに出土した角材である。幅6.9、厚さ4.1、長さ20.4cmの角柱状に加工されている。89は土壌内南壁近くで板状木製品、エブリ未製品などと出土した出土した諸手鋏の未製品である。84の諸手鋏よりも更に加工を進めているが柄孔は、まだ穿孔されていない。全長40.6、最大幅20.2cm。柄穴隆起は楕円形を呈し、長軸10.6、短軸8.4、隆起高3.4cmである。刃部の幅は20.2と19.4cmで、厚さは約1cmである。木取りはカシ材の柾目取りである。90は土壌内中央部やや北側で角材とともに出土した太型蛤刃石斧柄である。柄の部分は欠損しており、頭部のみである。残存長33.6cmである。石斧挿入孔の最大径は9.1×4.1cmであり、最小径は7.2×2.1cmである。樹種は不明である。91は土壌内南側壁際で諸手鋏、板状木製品などと出土したエブリ未製品である。柄孔は穿孔されておらず、刃も加工されていない。面形はほぼ台形を呈しており全長18.2、頭部幅23.8、

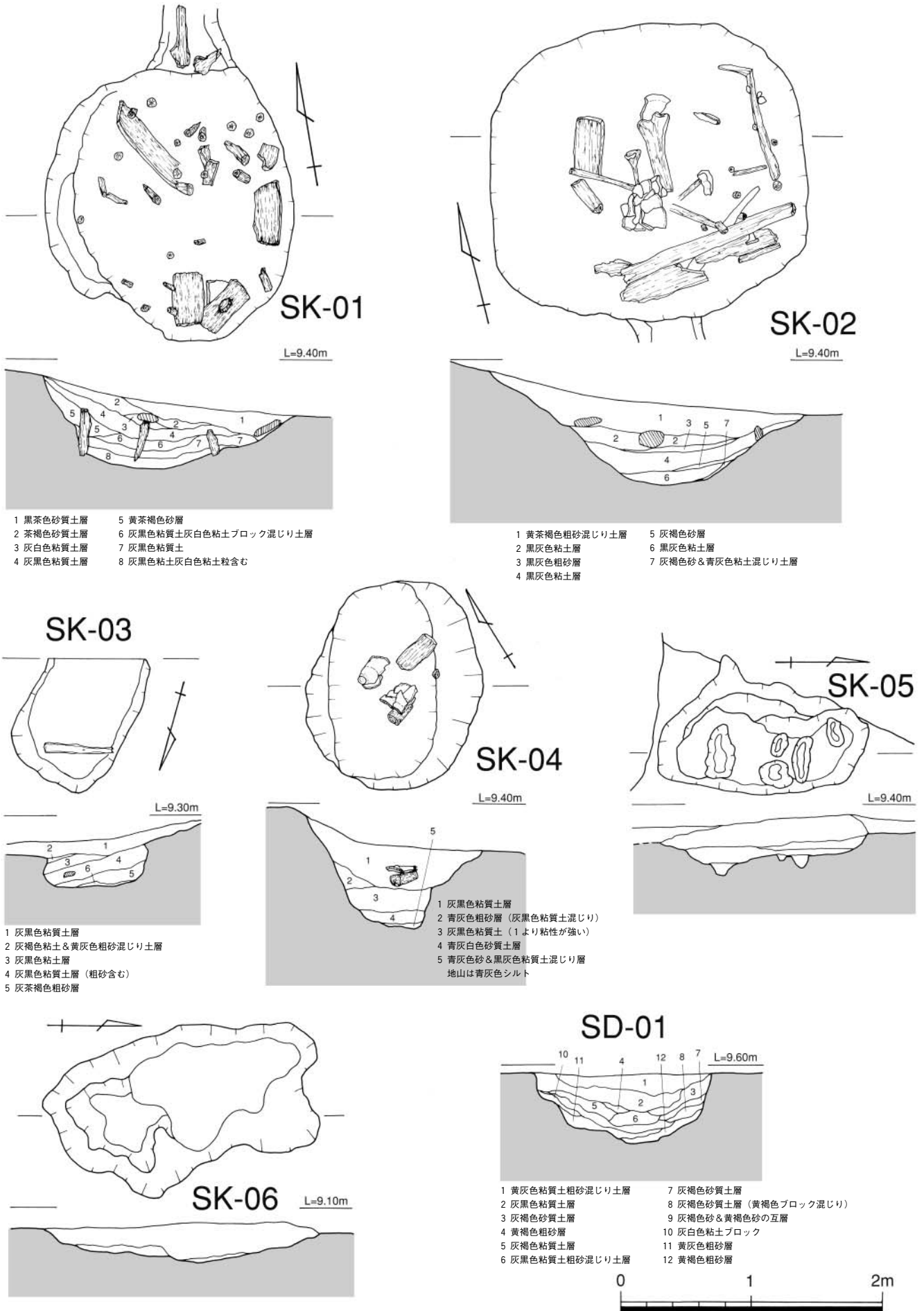


Fig. 25 第2区SK・SD遺構実測図(1/40)

刃部幅27.8cmである。柄孔される部分は厚く削り残されており、最大厚さ2.4cmである。木取りはカシ材の柾目取りである。遺構が埋没した時代は、出土遺物から弥生時代前期末、中期初頭と考えられる。

SK-02 (Fig. 25)

この土壌は調査区西寄り、微高地の落ち際に位置する。南側のSK-01とは、幅40cmの溝でつながっている。平面は長軸2.42、短軸2.25mの楕円形を呈し、底面の一部は深くなっており残存する深さは62cmである。覆土は灰黒色粘土が主で、灰褐色砂が間層としてはいる。多くの遺物が出土した。

出土遺物 (Fig. 30・31・32・33・34, PL. 16・18) 92~96は甕である。**92**は遺物溜まりの最上位からほぼ完形で出土した如意形口縁の甕である。外面は細かいハケ目が縦方向に施されている。口径23.2、底径7.0、器高25.4cmである。**93**は如意形口縁の甕破片である。口縁端部の刻み目はやや下位で、密度は粗である。口径23.2cmである。**94**は外湾が強い如意形口縁の壺である。器壁の摩滅が著しく、外面に煤が付着している。口径は16.6cmとやや小型である。**95**は如意形口縁の甕で、頸部下にハケ目調整後断面三角形の突帯を一条貼り付ける。口縁端部と突帯には刻み目が施されている。口径22.3cmである。**96**も如意形口縁の甕で、頸部下にハケ目調整後断面三角形の突帯を不整形に一条貼り付ける。内面の指押さえ痕が顕著に残る。口縁端部と突帯には刻み目が施されている。口径19.2cmである。**97, 98**は広口壺の口縁破片である。2点とも大きく外開きする頸部の上端に粘土板を水平に貼り付けて幅広の口縁部をつくっている。**97**は口縁端部の上下端に刻み目を加えており、口径42.2cm。**98**は口縁端部下端にのみ刻み目を加えている。口径40.8cmである。**99**は一部が欠損している土製投弾である。残存長3.4、最大径2.1cmである。**100**は軽石である。加工痕は特にみられない。**101, 102**は砥石である。**101**は三面を砥石として使用しており、背面は剥離している。**102**は砂岩質の砥石である。四面に砥石としての使用痕がみられる。**103, 104**は玄武岩製石斧である。**103**は太型蛤刃石斧の刃部片である。**104**は石斧の基部である。全面に敲打が施されている欠損品である。**105**は土壌内ほぼ中央部より出土した鋤柄である。残存長53.3cm、握部孔が三角形を呈しており、握部と柄部との境に浅い掘り込みを1周まわす。握部内幅6.8、握部内長8.1cmである。柄断面は楕円形であり、

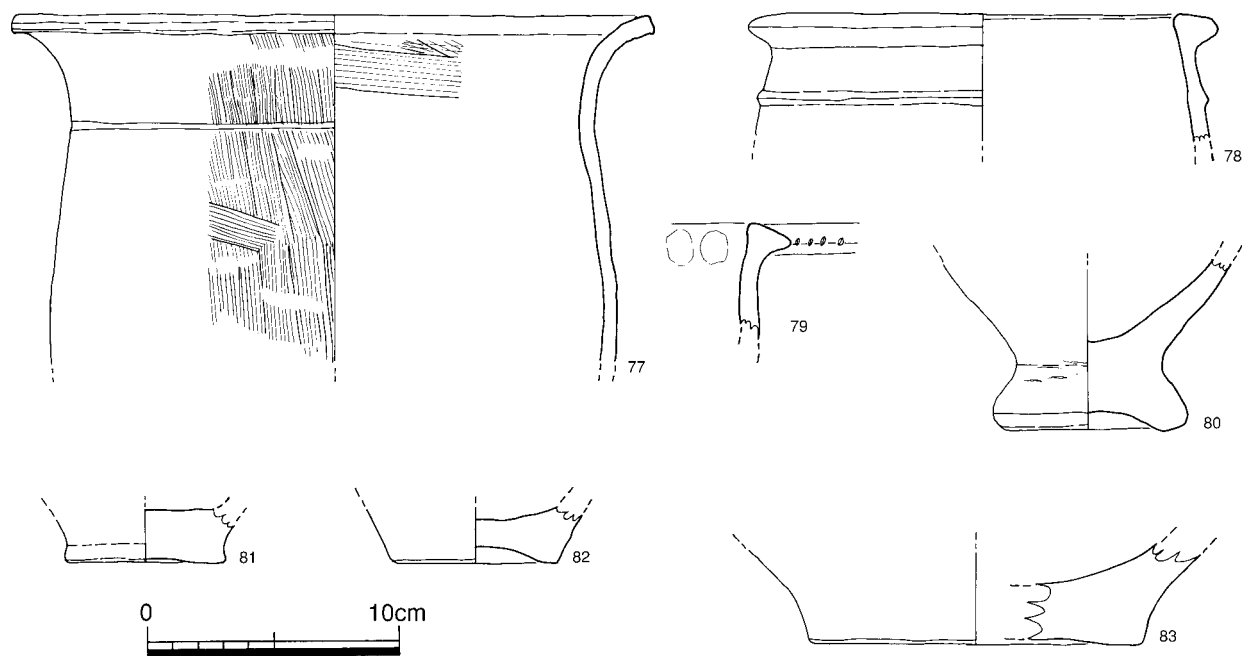


Fig. 26 第2区SK-01 出土遺物実測図1 (1/3)

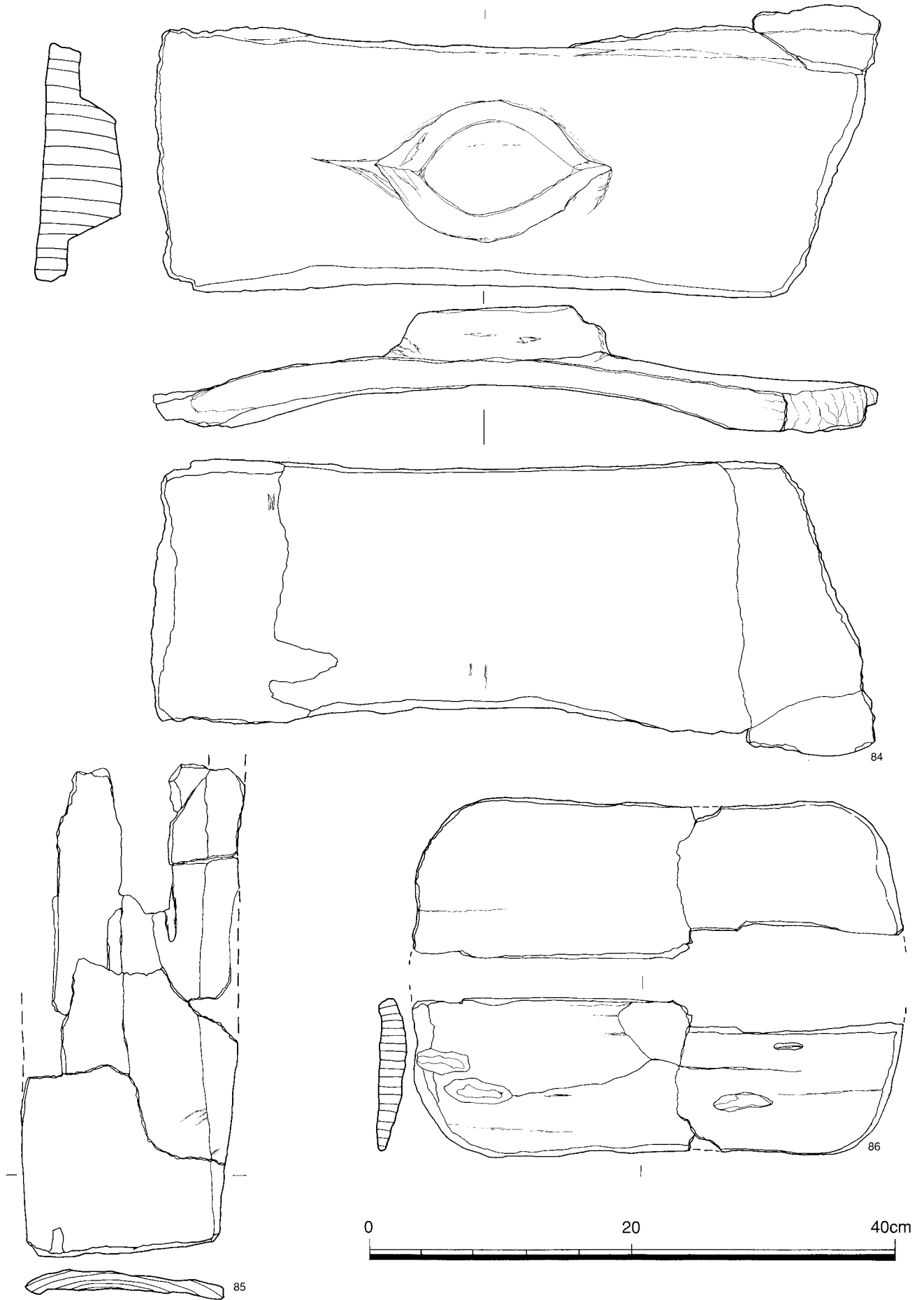


Fig. 27 第2区SK-01 出土遺物実測図2 (1/4)



Fig. 28 第2区SK-01 出土遺物実測図3 (1/4)

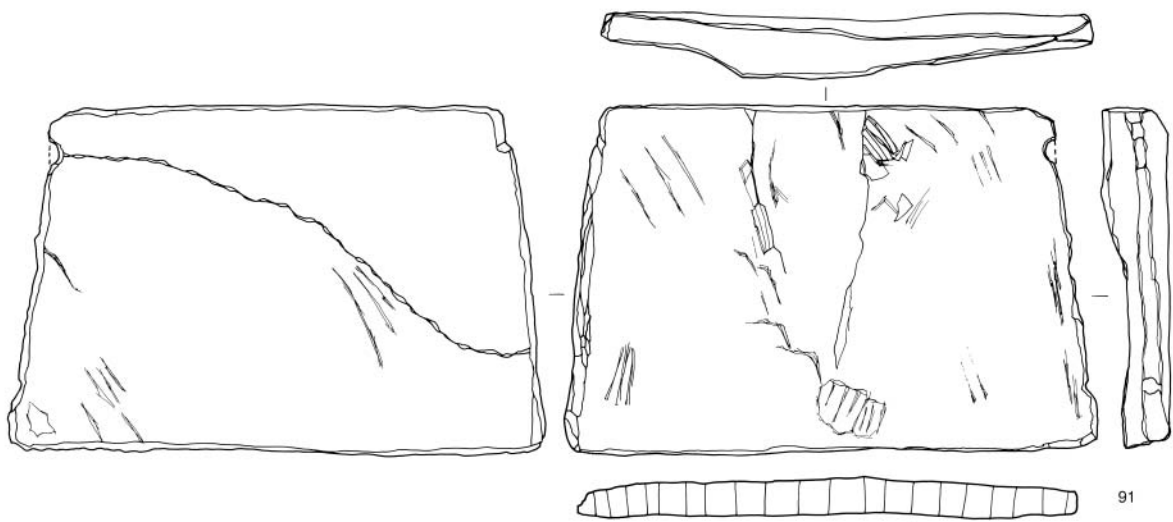
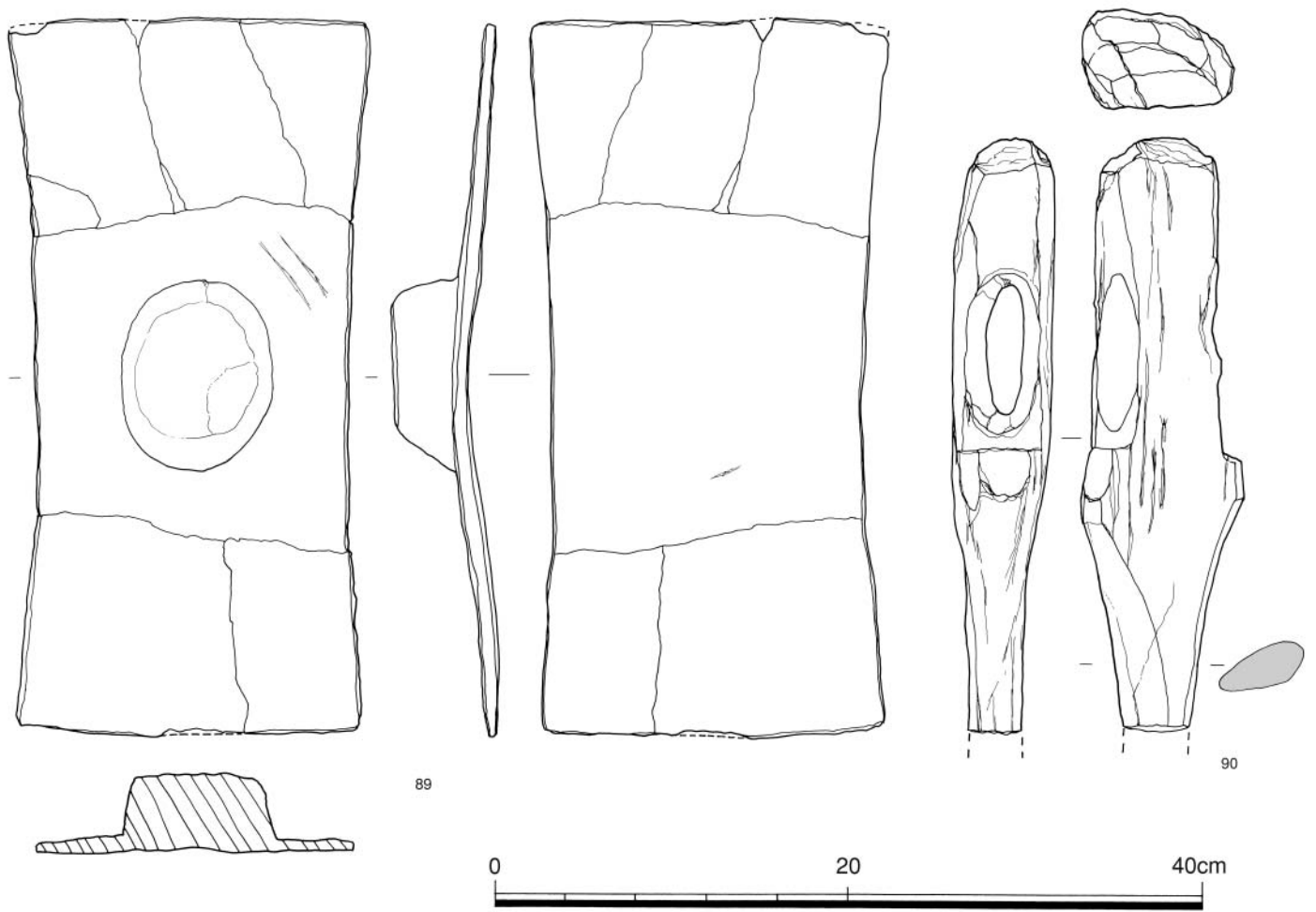


Fig. 29 第2区SK-01出土遺物実測図4 (1/4)

柄径は長軸3.2、短軸2.1cmである。木取りはカシ材の柾目取りである。106は土壙の南側最下層から完形で出土した太型蛤刃石斧柄である。全長68.4cmであり、石斧着装孔の内径は4.3×3.4cmである。柄握部の断面は楕円形であり、最細部は4.1cmである。107は土壙内中央部やや北寄りから出土した建築部材である。端部の片方先端を二股に加工しており、横木を受ける柱の部材と思われる。受けの幅は約4cmであり、基部は折損している。柱径は約8cmである。108は土壙内やや西寄りにて出土した割さい材である。丸太を縦にみかん割り状にした材である。全長59.1、幅20.1、厚さ9cmで一方の側縁部には樹皮が残る。木取りは柾目取りである。109は土壙内西寄りで出土した杭状の遺物である。端部の片方を杭状に加工しており、樹皮が付いている。残存長30.5、直径8.4cmである。110は土壙内東側壁寄りで出土した大型の不明木製品である。丸太の一部を削って形を成形している。樹皮が付いており、木取りは正柾目ではないが、博多区雀居遺跡第12次調査第4号凹地出土の全長60cmを越える諸手狭鋏や、西区拾六町ツイジ遺跡の前期初頭の遺構から出土している全長70cmを超える諸手鋏と同系鋏の未製品と考えられる。全長85.6、幅17.4cmである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期末、中期初頭ごろと考えられる。

SK-03 (Fig. 25, PL. 12)

この土壙は調査区西寄り、微高地の落ち際の南側調査区壁際に位置する。SK-01の南側になる。遺構の一部は調査区外へ広がっており、幅約80cmの長楕円形を呈すると考えられる。壁際に位置するため壁面の土層堆積の観察ができ、土壙が埋まった後遺物包含層が堆積した状況を確認することができた。覆土は灰黒色粘土と灰茶褐色粗砂などである。板状で表面が摩滅した木製品が1点みられた。

出土遺物 (Fig. 36, PL. 16) 117は甕の口縁部破片である。口縁端部は直立する口縁に粘土帯を貼り付けて断面三角形につくるものである。口径18.8cmである。118は甕の底部破片である。底径11.0cmの平底であり、底部の中心部がやや上げ底になっている。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期末、中期初頭と考えられる。

SK-04 (Fig. 25, PL. 12)

この土壙は調査区西寄り、微高地の落ち際に位置する。南西側にはSK-05が、北東側にはSK-06がみられる。平面は長軸1.6、短軸1.4mの楕円形を呈し、底面の一箇所が長軸1.5、短軸0.8mの長楕円形に深くなっている。残存する深さは約60cmである。覆土は灰黒色粘質土が主な層である。土器、木製品などの遺物は主に、確認できる最上層から出土した。弥生時代前期末頃と考えられる。

出土遺物 (Fig. 35, PL. 16・19) 111～113は甕である。111は、土壙の上層からつぶれた状態で出土した甕である。如意形口縁の傾きは強く、外器面にはやや粗いハケ目が残る。底部は中央部が上げ底になる平底で、焼成後と思われる穿孔が施されている。口径25.4、底径7.6、器高26.1cmである。112は如意形口縁の甕上半部破片である。口縁の傾きは強く外反し、端部下に刻み目が施され、外面頸部下に沈線が一条めぐる。口径は29.4cmである。113は甕の底部である。外面器壁には粗いハケ目がのこり、内面には炭化物が付着している。底径は8.0cmである。114は玄武岩の打製石斧の破片である。打列のみをおこなっており、刃部となる部分の一部が欠けている。115は土壙覆土の上層から出土した筒型容器の未製品と思われる。黄断面は長径9.6、短径8.1cmの楕円形を呈し、長さ20.1cmである。外面には上下2ヶ所に幅1.5cm前後の突帯をつくり出している。内側の削りぬきは未完である。樹種は未分析のため不明である。類例として長崎県田平町の里田原遺跡からは突帯形状は異なるが同様の筒型容器があり、また佐賀県唐津市の千々賀遺跡からは、この容器の底板、蓋板と思われる漆塗りの製品がみられ、韓国慶尚南道茶戸里遺跡では2本1組の細い突帯が上下2組付く漆塗筒型容器が出土している。116は板状のカシ材であり、全長31.2、幅13.5、厚さ5.2cmである。顕著な

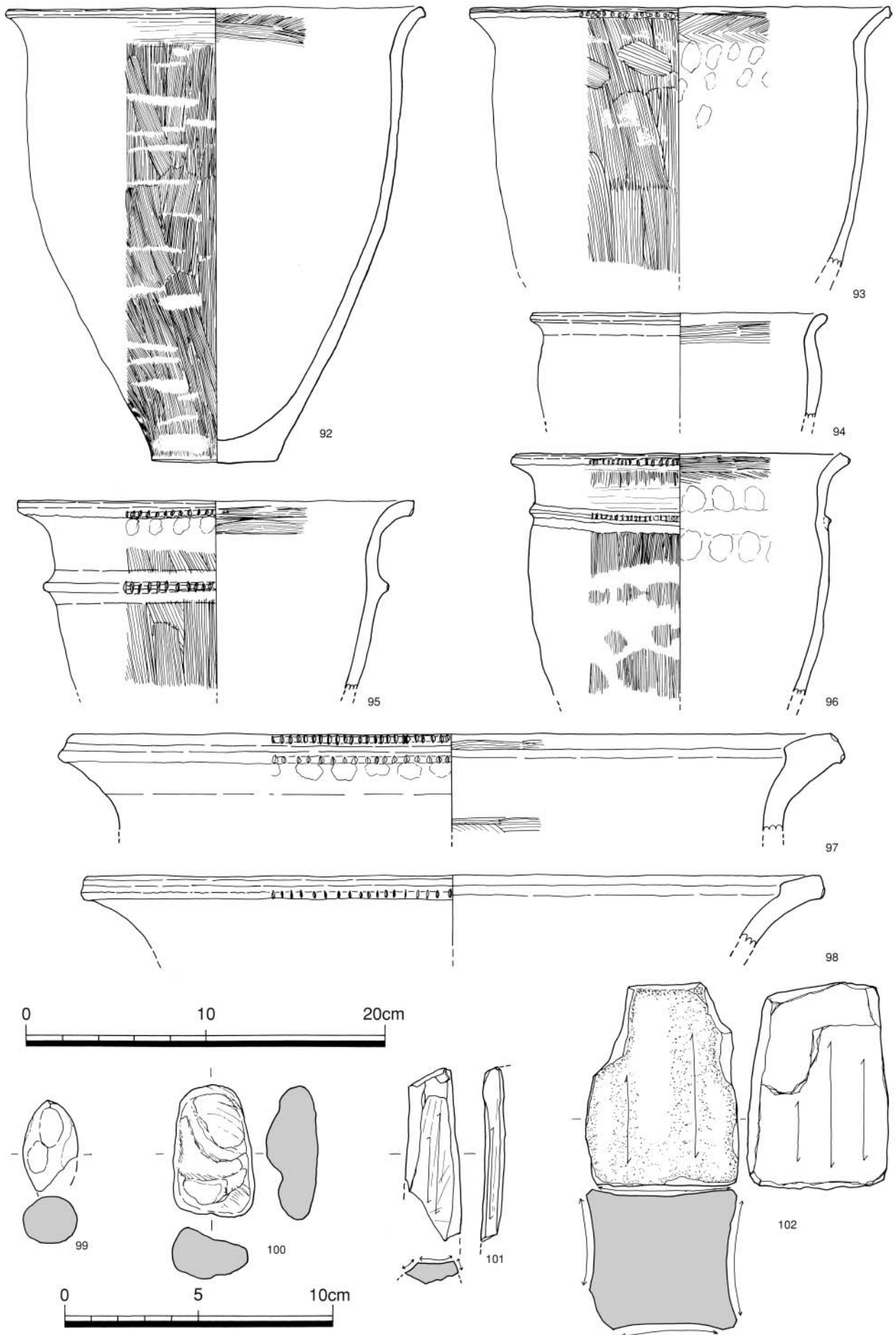


Fig. 30 第2区SK-02出土遺物実測図1 (1/2, 1/3)

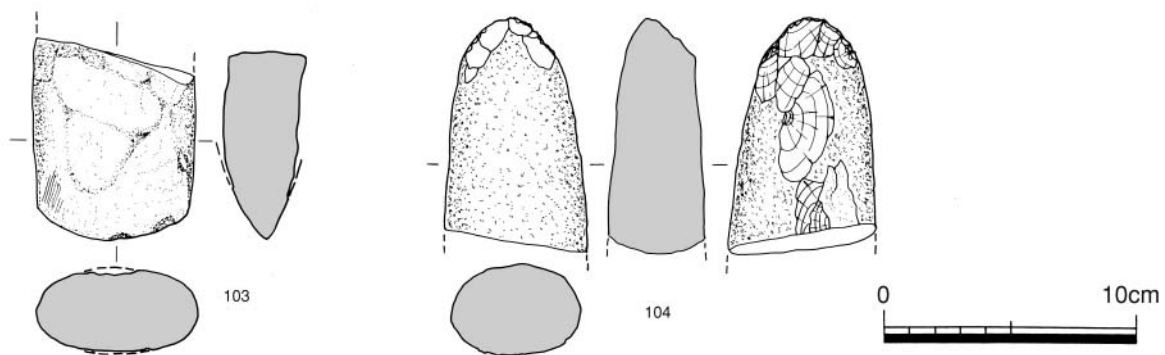


Fig. 31 第2区SK-02 出土遺物実測図2 (1/3)

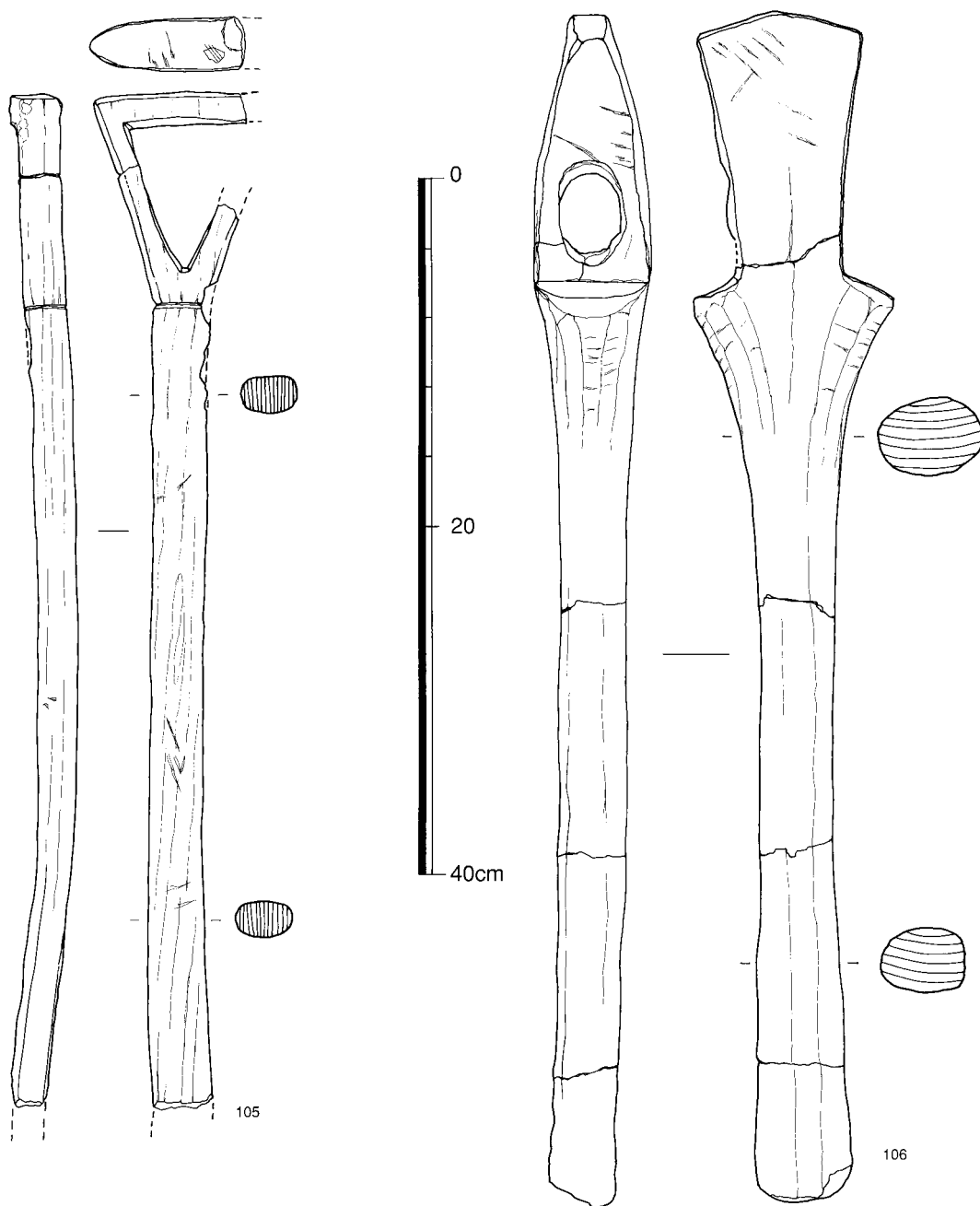


Fig. 32 第2区SK-02 出土遺物実測図3 (1/4)

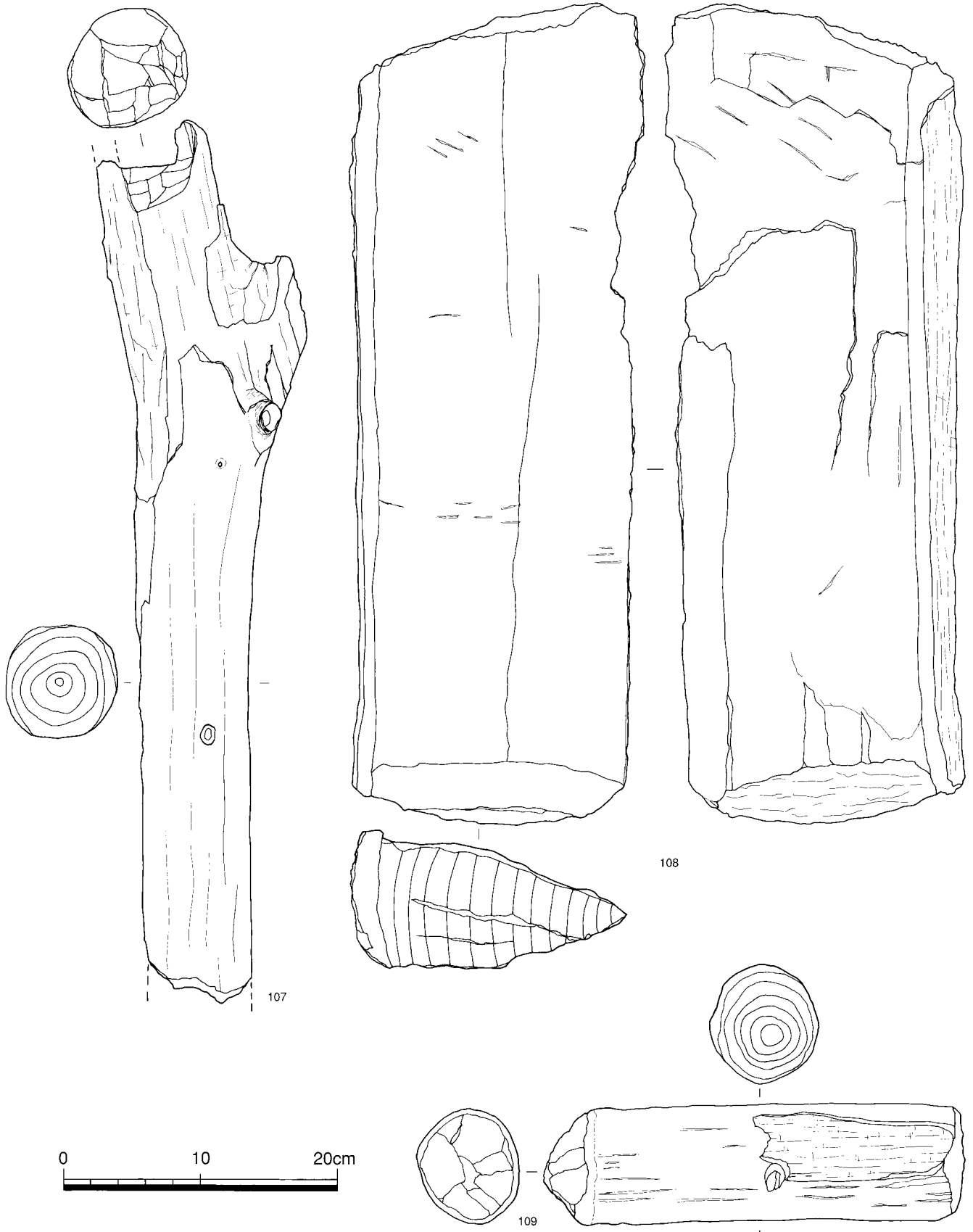


Fig. 33 第2区SK-02 出土遺物実測図4 (1/4)



Fig. 34 第2区SK-02出土遺物実測図5 (1/4)

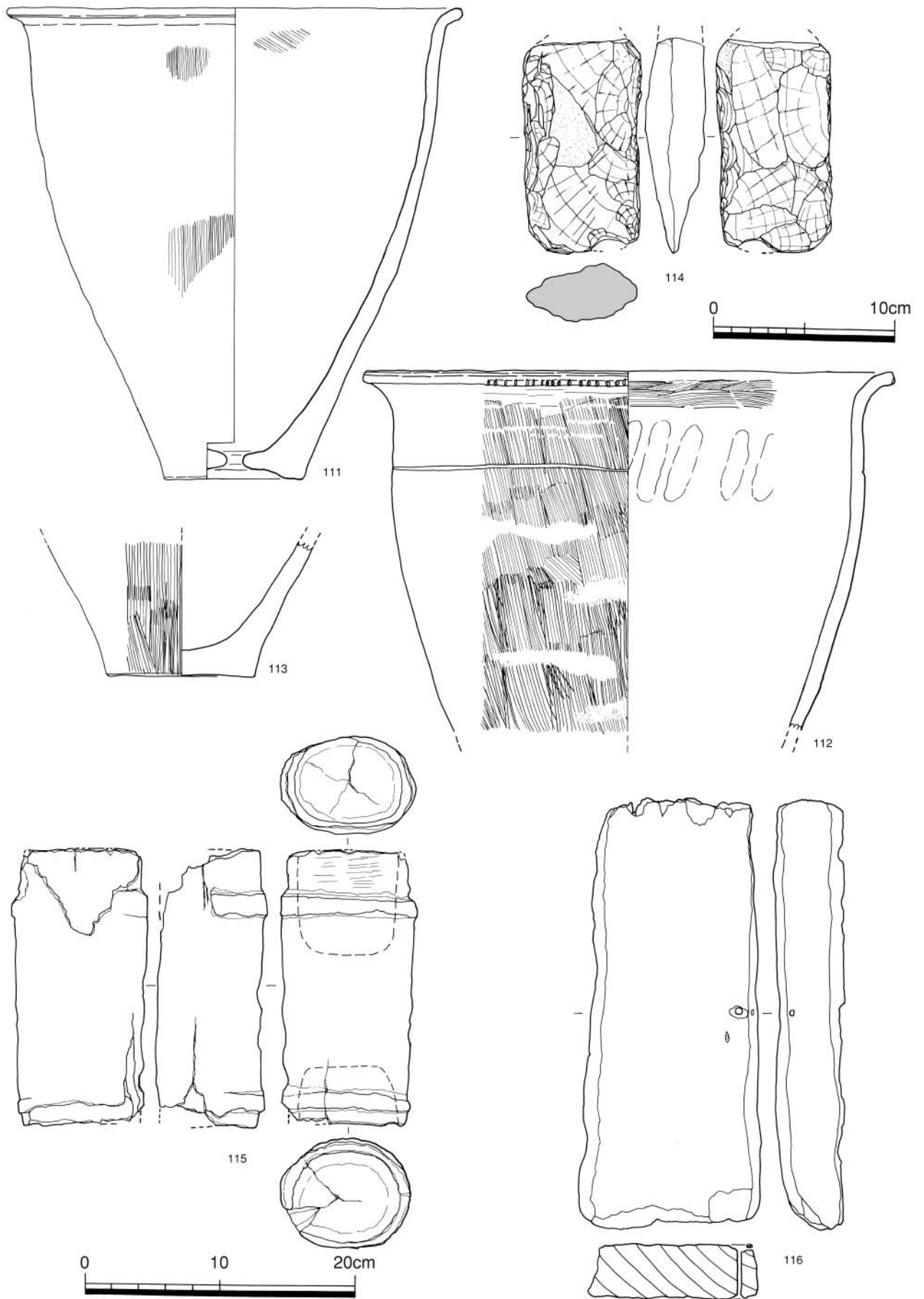


Fig. 35 第2区SK-04 出土遺物実測図 (1/3)

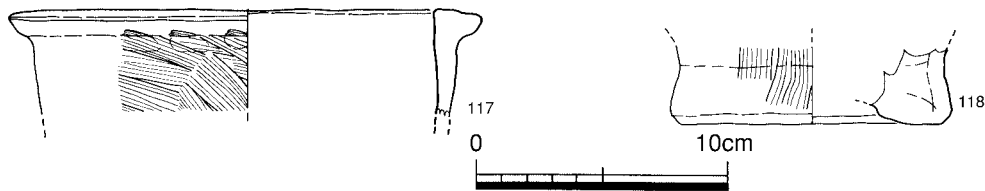


Fig. 36 第2区SK-03 出土遺物実測図 (1/3)

加工痕はなく、1箇所細い孔がみられるが植生によるものと思われる。木取りは斜め柁目取りである。

SK-05 (Fig. 25, PL. 12)

この土壌は調査区西寄り、微高地の落ち際に位置する。南側には木製品が大量に出土したSK-02が隣接する。平面は長軸1.6、短軸0.8mの不定楕円形を呈し、底面には小穴が数穴みられる。残存する深さは約20cmである。底面の状況は隣接するSK-02と異にする。出土遺物は弥生土器小片が1点のみ出土している。

SK-06 (Fig. 25, PL. 12)

この土壌は調査区東寄り、微高地の落ち際北側に位置する。平面は長軸2.1、短軸1.1mの不定形を呈し、底面の一部はやや深くなっており残存する深さは約30cmである。

出土遺物 (Fig. 37, PL. 16) 119~122は如意形口縁甕の口縁部破片である。強く外湾しており、口縁短部下位に刻み目を施す。119の口径は23.0cm、120は25.4cmである。123は平底の甕底部であり、内面には炭化物が付着する。底径8.9cmである。124は広口壺の口縁破片である。大きく外開きする頸部の上端に粘土板を水平に貼り付けて幅広の口縁部をつくっている。口縁端部の上下端に刻み目を加えている。125は壺の底部破片で、底径8.8cmである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉ごろと考えられる。

SD-01 (Fig. 25, PL. 12)

この溝は調査区の西端にて検出した。その方位はやや蛇行しながら、北から数十度西に振っている。幅は100~120cm、残存する深さは30~45cmである。溝の底には、幾つかの凹みが見られ、粗砂が堆積していることから、相当量の水が流れていたことが分かる。南北の高低差はあまり顕著でないが、北側に向けて緩やかに傾斜している。**出土遺物 (Fig. 24)** は、あまり出土していない。74は脚付埴

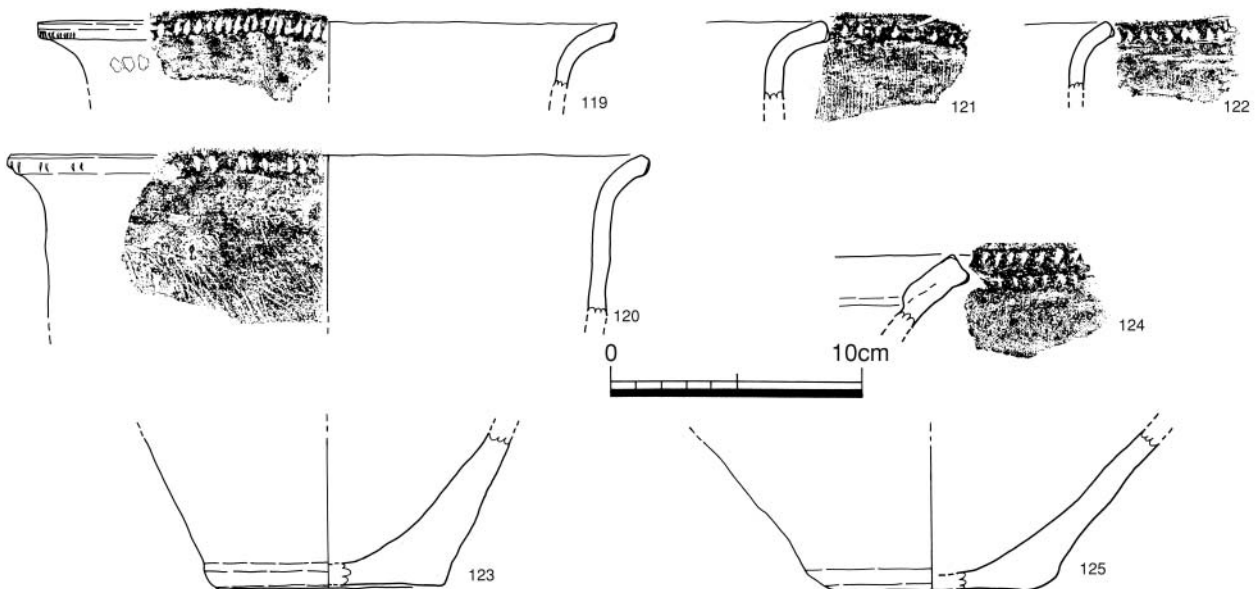


Fig. 37 第2区SK-06 出土遺物実測図 (1/3)

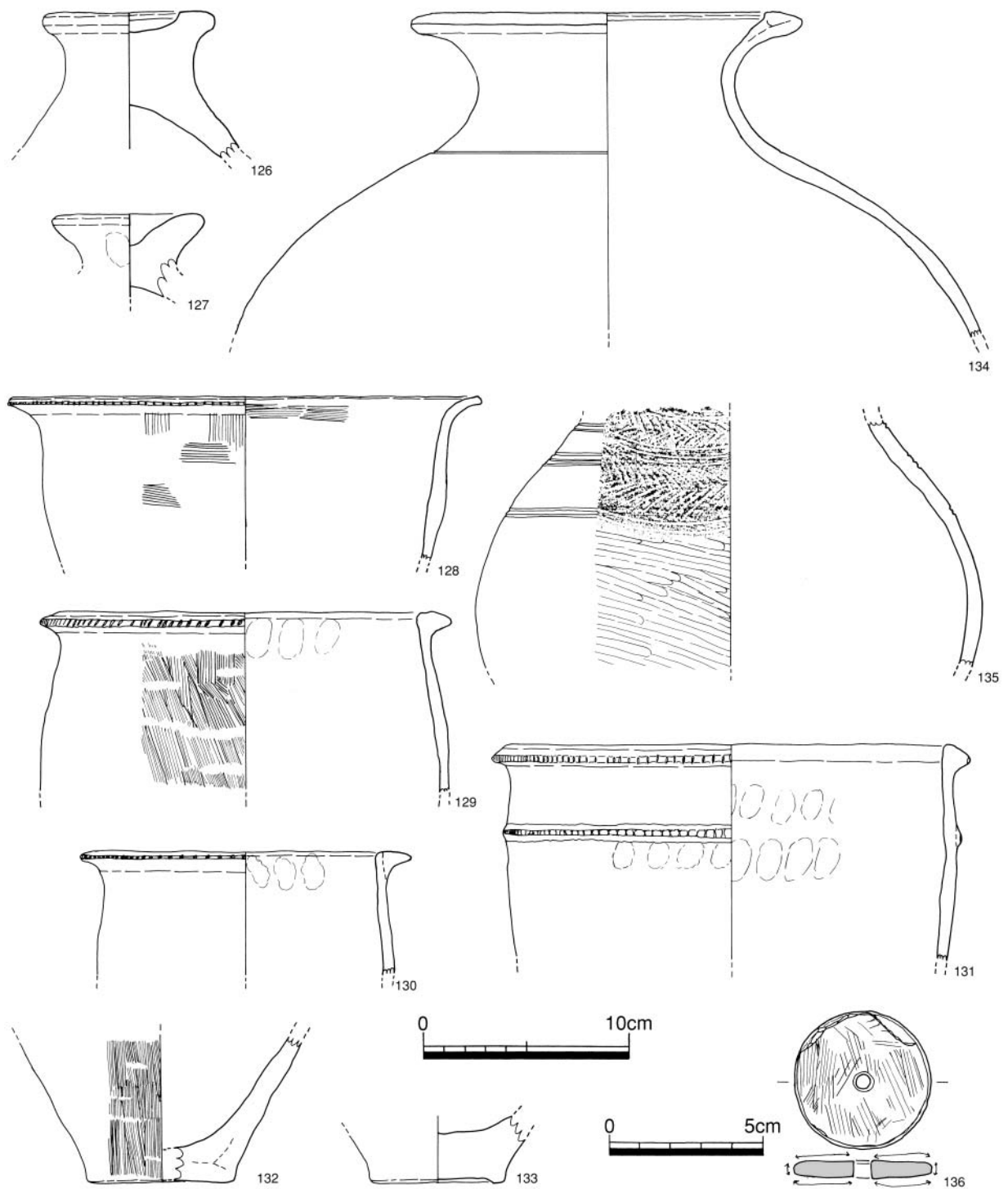


Fig. 38 第2区谷落ち肩出土遺物実測図（1/2，1/3）

の破片である。高脚となるもので、胎土は密であるが焼成は不良、淡灰褐色を呈する。遺構の時期は、出土遺物から古代後半期のものと考えられる。

谷落ち肩出土遺物 (Fig. 38, PL. 19)

この調査区では、微高地が谷へ向かって緩やかに落ちていく落ち肩部の土壌から多くの遺物が出土した。この落ち肩部分の掘削時に多くの遺物が出土しており、谷内堆積遺物の上層遺物としての性格も有するため代表的な遺物を図示する。126, 127は蓋形土器である。上部の径はそれぞれ8.4, 7.4 cmである。128~133は甕である。128は如意形口縁であり、強く外湾する口縁端部下位に刻み目を

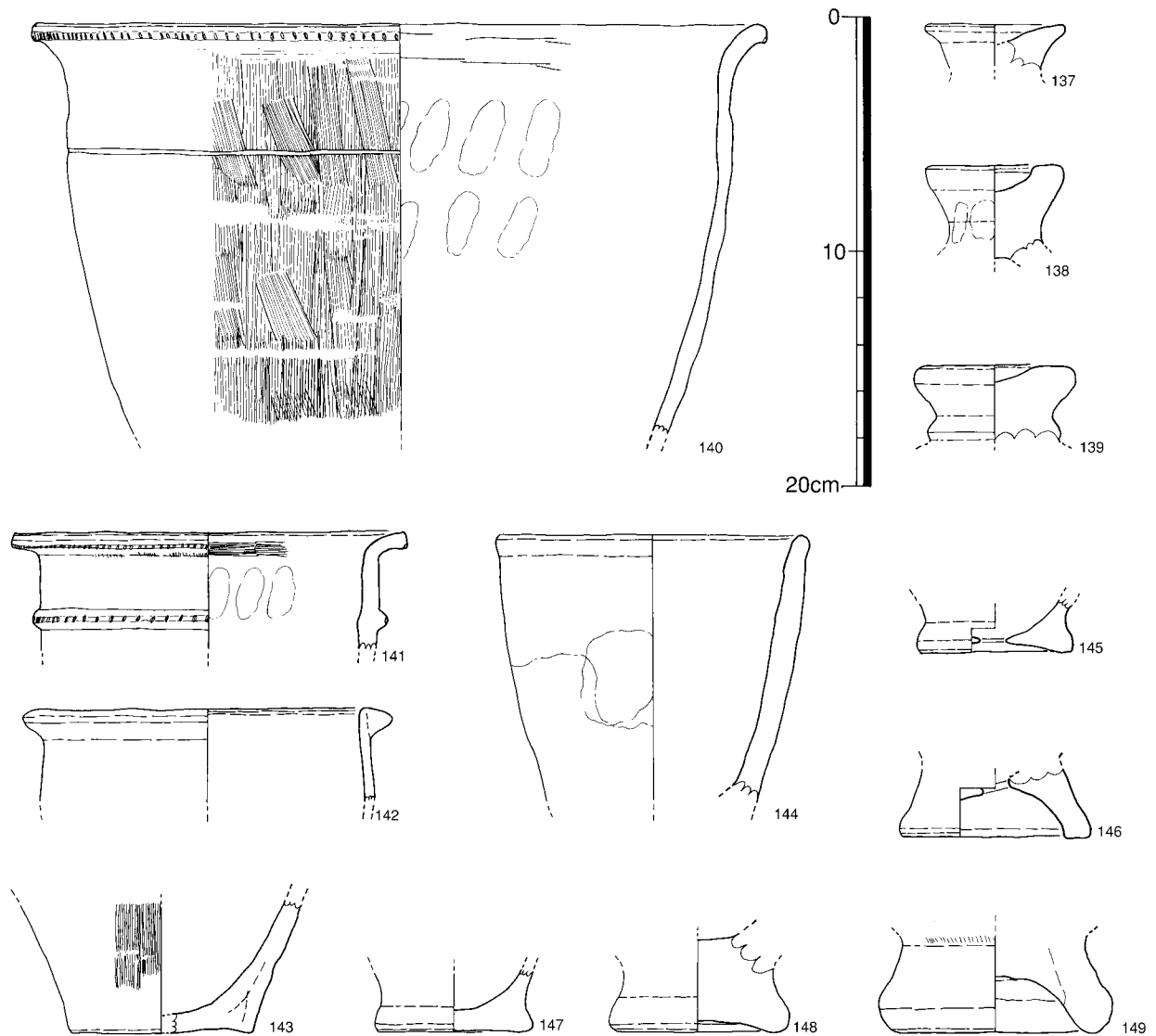


Fig. 39 第2区谷内出土遺物実測図1 (1/3)

もつ。口径は23.0cmである。129は口縁部を断面三角形につくる甕である。口縁内面には指頭圧痕が残り、外側端部に刻み目を施す。口径は20.0cmである。130も直立する口縁に粘土帯を貼り付け、断面三角形につくるものである。口縁外側端部に刻み目を施し、口径は16.0cmとやや小型である。131は口縁断面が三角形を呈し、頸部下の低い突帯を一条めぐらすものである。内面には突帯貼り付け時の圧痕が残り、口縁外側端部と突帯上に刻み目が施されている。132はやや厚くつくられた平底の底部である。外面には細かいハケ目が残り、底径は7.0cmである。133は底部の中央部がやや上げ底につくられたもので、底径は6.4cmである。134, 135は壺である。134の壺は頸部のしまりが強く、口縁端部は内端に折り返して厚くしている。頸部と胴部の境に沈線を一条めぐらす。口径19.1cmである。135は壺の胴部破片である。最大径24.6cmの丸みをもった胴部の外面はミガキを施しており、その上位には2, 3, 2本の沈線を巡らし、その中を軸が通らない羽状文で飾っている。136は蛇紋岩製紡錘車である。直径4.55、厚さ0.54、孔径0.69cmである。

谷内出土遺物 (Fig. 39・40・41・42, PL. 19)

谷内の掘削時多くの遺物が出土した。上層は谷部を覆う黒灰色粘質土であり、下層は砂を多く含ん

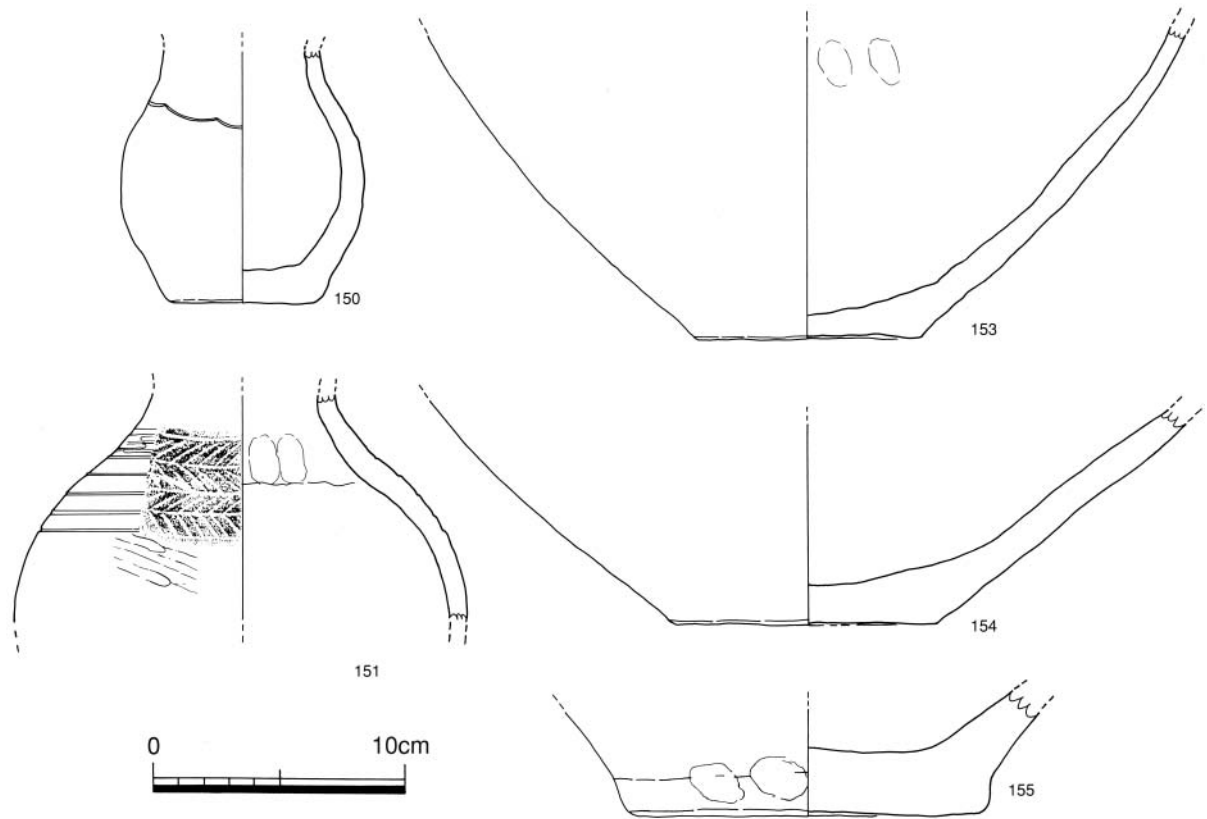


Fig. 40 第2区谷内出土遺物実測図2 (1/3)

でいる。谷内という遺構の性格上、正確な分層と遺物取り上げはできなかった。**137~139**は蓋形土器である。上部の径はそれぞれ6.0, 5.9, 6.9cmである。**139**はくびれ部に段がつくものである。**140~149**は甕である。**140**は如意状口縁甕の上半部の破片である。口縁端部下に刻み目を施し、頸部下には沈線を一条巡らす。口径は31.4cmである。**141**は如意状口縁の下に突帯がめぐる甕である。口縁は強く外反し、外端下位に刻み目を施す。頸部下にやや高い断面三角形の突帯を巡らし、その端部にも刻み目を加えている。口径は17.0cmである。**142**は直立する口縁外側に粘土を貼り付け、断面三角形にする甕口縁破片である。口径15.8cmである。**143**は平底の甕底部破片で、底径は7.8cmである。**144**は厚い器壁が直線的に上方に広がる深鉢形の土器である。口縁端部は丸くやや外反させる。口径は13.0cmである。**145, 146**は底部穿孔の底部破片である。**145**は底径6.6cmの小型の底部は裾が外側に開き、底中央部が上げ底になる。底面は穿孔されており、その穿孔が焼成前か後かは不明である。**146**の底部裾は直線的に広がり、厚い底を成している。底面は焼成後に穿孔されている。底径は8.3cmである。**147, 148, 149**は甕の底部破片である。**147**の底部裾はやや広がるが平底を成している。口径6.8cmである。**148**は裾が広がり、底部中央部がやや上げ底になっており、厚い底となっている。底径7.8cmである。**149**は裾の広がりが著しく、上げ底も高い。底径10.1cmである。**150~155**

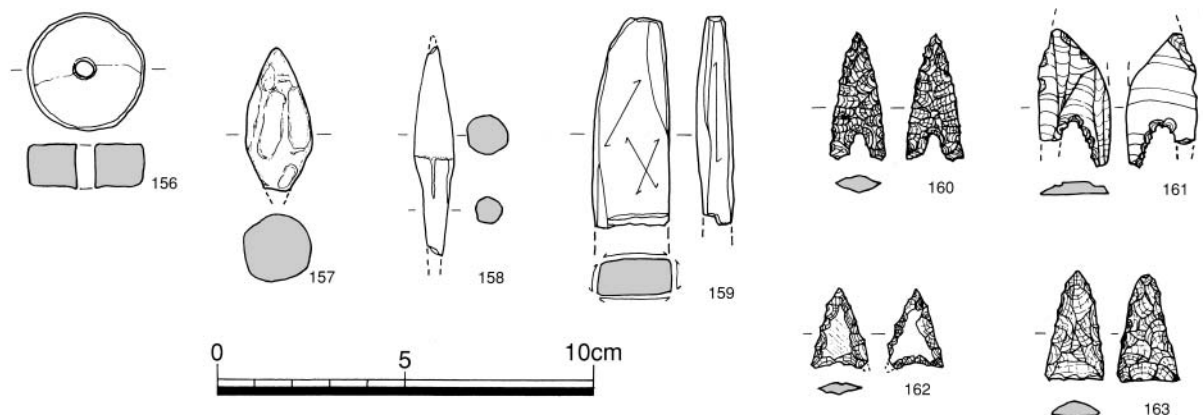


Fig. 41 第2区谷内出土遺物実測図3 (1/2)

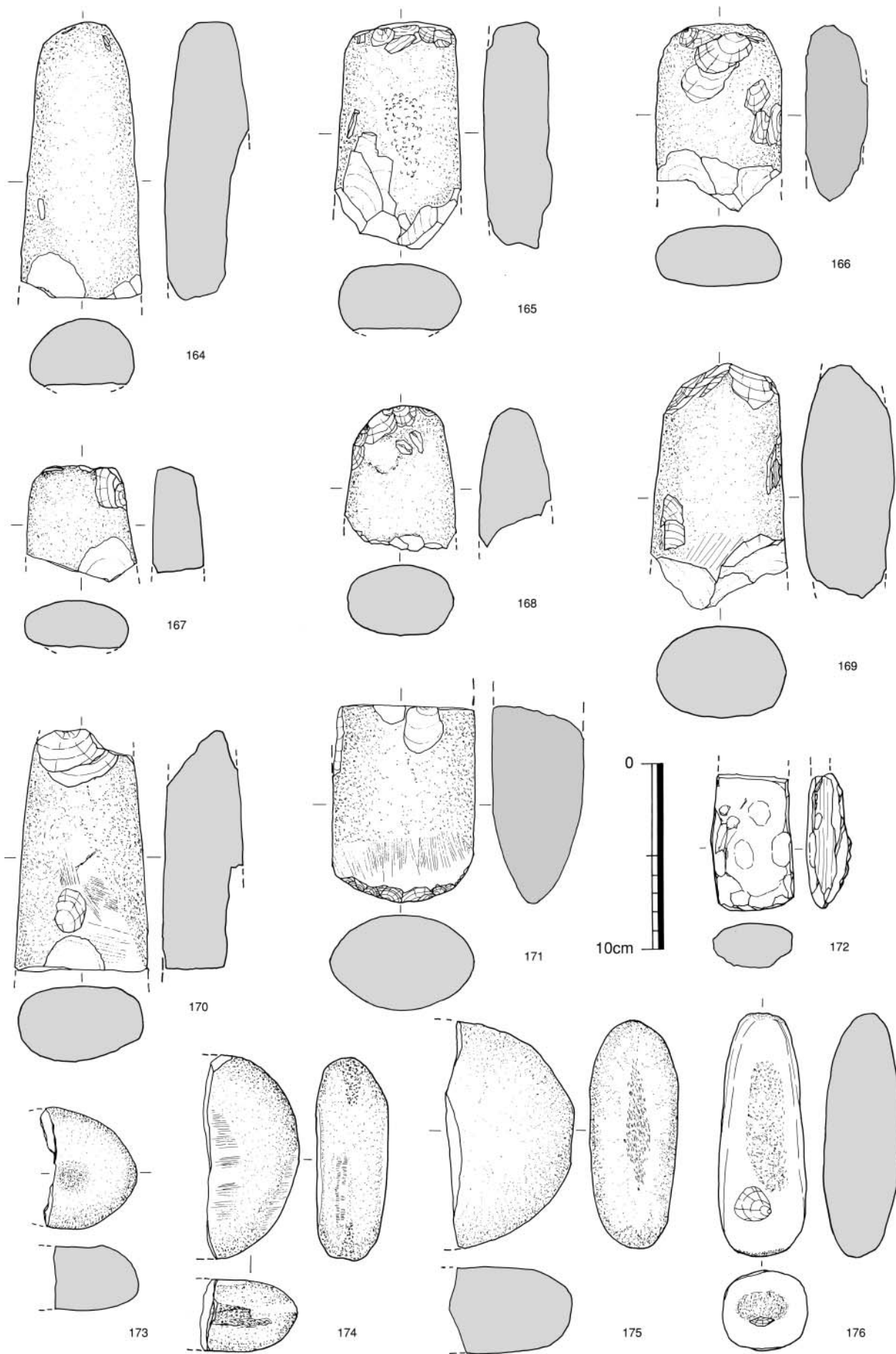


Fig. 42 第2区谷内出土遺物実測図4 (1/3)

は壺である。150は小型の壺で、残存高10.2、底径5.8cmの平底である。頸部下位には連弧による沈線が描かれており、意図的なのか斜め方向をとる。151は壺の頸部付近の破片である。外器面調整はミガキであり、頸部に羽状文が軸をもって二段に描かれている。153～155は壺の底部破片である。底径はそれぞれ9.1、10.3、13.8cmである。156は土製紡錘車である。最大径は3.25cmで、厚さはやや厚く1.23cmである。中央に焼成前穿孔の径5mmの孔が穿たれている。157は手づくね土製投弾である一部欠損しているが残存長3.7、最大径1.7cmで胎土は密である。158は木製鏃である。基部と先端の一部を欠く残存全長は5.5cmである。先端部の断面はほぼ円形であり、段をもって緩やかに細基部へとつながる。木質は硬いが樹種は未分析のため不明である。159は砥石である。一部欠損しているが長細い形状と思われ、四面が砥石として使用されている。160～163は無茎の石鏃である。160は無茎で細身三角形のサヌカイト製と思われる石鏃である。断面は菱形で、丁寧な押圧剥離を施している。全長3.4、幅1.5、厚さ0.4cmである。161は剥片に加工を加えた凹基式の漆黒黒曜石製鏃である。先端と脚の一部が欠損しており、断面は薄い台形を呈する。残存長3.6、残存幅1.8、厚さ0.3cmである。162は無茎の漆黒黒曜石製鏃で、脚部にはわずかに抉りがある。脚の一部が折損している。全長2.1、残存幅1.5、厚さ0.3cmである。163は無茎のサヌカイト製石鏃である。脚はまったくつかず、三角形を呈する。全長2.8、幅1.6、厚さ0.4cmである。164～172は今山産と思われる玄武岩製石斧である。164～170は、ほぼ全面に敲打が施されており、基部だけが残った欠損品である。基部端がやや尖るものと、平坦につくろうとしているものがみられる。164と170は刃部側の裏面が大きく剥離しており、使用時の折損が考えられる。171は玄武岩製大型蛤刃石斧の刃部破片である、刃部には刃をつくるための研磨が施されており、先端は使用のためか小さな剥離がみられる。172は粘板岩製石斧である。側面には自然面が残り、刃部側は豊厚させ、基部は薄くなって欠損している。173は花崗岩製と思われるもので、中央部が径2cm前後の大きさに窪んでいる。174は玄武岩製で平坦面に擦痕がのこる。その両端には敲いてつぶれたようになっている。敲石と考えられる。175も平坦面に窪みはないが、端部に敲打の痕跡がみられる。176は身の部分にも敲打痕がみられるが、端部の方が顕著である。敲石と思われる。

3. まとめ

第1次調査であるが、弥生時代の土器、石器、木器の出土とともに多くの遺構がみつかった。第1調査区で確認された小型の壁立ち建物は、小型の小屋状を呈すると考えられるが、福岡平野で数例見られるような小型住居なのか、または家畜小屋なのか性格の決定は難しい。今後、早良平野内での類例の蓄積を待たねばならない。

第2調査区で出土した大型掘立柱建物は、当該期の集落の大きさを直接示すもので、本来は第1区の壁立ち建物は集落の西端に位置する施設であったと考えることができる。つまり、第1区の壁立ち建物から第2区の谷落ちまでの約80mの集落幅が推定できることになる。また、鍬・鋤・石斧柄など木製品群や谷内に堆積する有機質を多く含んだ黒灰色の厚く水平な堆積は、水田耕作を生業としていることを裏付けている。そして、今山産の玄武岩製大型蛤刃石斧の伐採具の出土は、彼らが積極的に山林等において伐採をとまなう開発をおこなっていたことも明らかにする。

今回の発掘調査は、新しく発見された遺跡の第1次調査であったが、室見川中流域の弥生時代前期後半頃の生活状況を復元する上で貴重な資料が数多く良好な状態で出土し、戸切とその周辺の歴史を明らかにする大きな第一歩となった。

An aerial photograph showing a dense grid of agricultural fields, likely rice paddies, with a central cluster of buildings representing a village. A network of roads or paths crisscrosses the landscape. The image is in black and white.

PLATE
(図 版)

1948 (昭和23) 年 4 月 7 日 米軍撮影航空写真
国土地理院所有USA - R236 - No2 - 46の一部



1) 上籠遺跡調査前状況 (南西から)



2) 上籠遺跡調査風景 (北東から)



3) 第1調査区西半完掘状況 (北東から)



4) 第1調査区西半南西壁状況 (北東から)



5) 第1調査区東半完掘状況 (南西から)



6) 第2調査区②完掘状況 (北東から)

KAG-1



1) 第2調査区①完掘状況 (北東から)



2) 第2調査区①SD-01堆積状況 (北から)



3) 第3調査区東半完掘状況 (北西から)



4) SK-01, SP-01完掘状況 (北西から)



5) 第3調査区西半検出状況 (南から)



6) 遺物包含層検出状況 (南東から)



1) 遺物出土状況 (北東から)



2) 第3調査区西半完掘状況 (南西から)



3) 第3調査区北壁状況 (東から)



4) 第4調査区完掘状況 (北東から)



5) 第4調査区遺構掘削状況 (南西から)

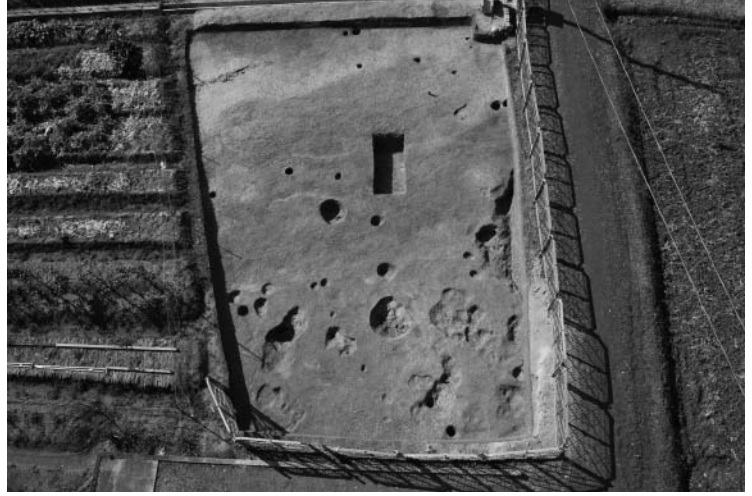


6) 上籠遺跡調査終了状況 (東から)

TRM-1



1) 戸切巡り町遺跡東側完掘状況 (北東から)



2) 戸切巡り町遺跡完掘状況 (北東から)



3) SK-05掘削状況 (北から)



4) SK-06掘削状況 (南東から)



5) ピット状遺構掘削状況 (西から)



6) 北壁断割り状況 (南東から)



1) 戸切巡り町遺跡西側完掘状況 (北東から)



2) 戸切巡り町遺跡西側完掘状況 (北東から)



3) 調査区西側壁土層堆積状況 (北から)



4) 西側調査区北壁断割り状況 (東から)



5) 北側調査区完掘状況 (東から)



6) 北側調査区遺構検出状況 (南東から)

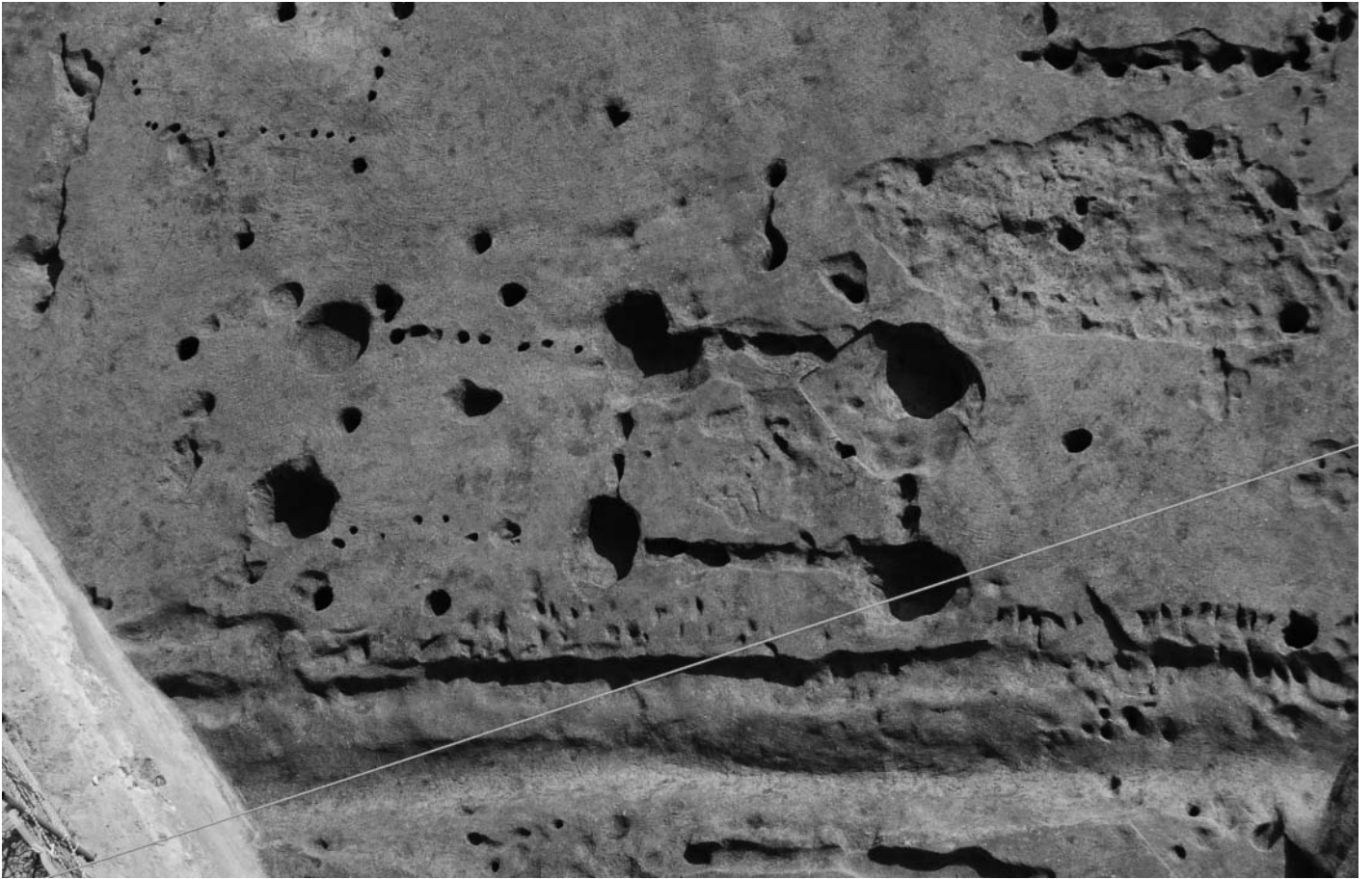
HYG-1 第1区



1) 兵庫遺跡第1調査区完掘状況(東から)



2) 兵庫遺跡第1調査区完掘状況(北から)

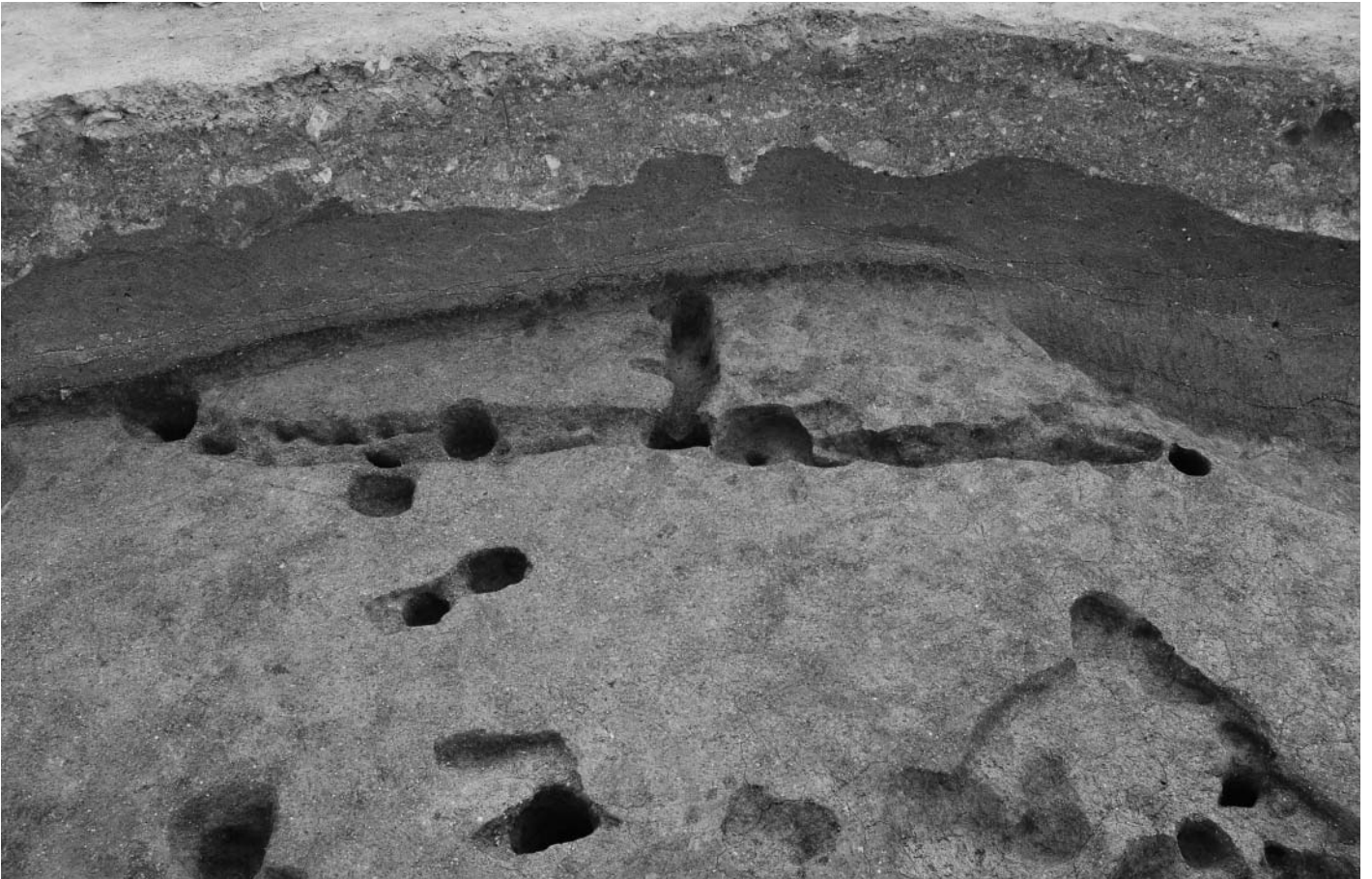


1) SB-01完掘状況（北西から）



2) SB-02完掘状況（南東から）

HYG-1 第1区



1) SB-03完掘状況 (北から)



2) SB-04完掘状況 (南東から)



1) SB-01掘削状況 (北東から)



2) SB-04完掘状況 (南西から)



3) SD-01調査区壁状況 (南西から)



4) SD-03調査区壁状況 (南から)



5) 第1調査区東側完掘状況 (北から)



6) 第1調査区北壁断割り状況 (南西から)

KYG-1 第2区



1) 兵庫遺跡第2調査区完掘状況（北西から）



2) 第2調査区完掘状況（北西から）



3) 第2調査区遺構検出状況（北東から）



4) SB-01, 02完掘状況（東から）



5) SK-01土層堆積状況（南から）



6) SK-01遺物出土状況（北東から）



1) SK-01遺物出土状況 (南から)



2) SK-01杭打ち込み状況 (東から)



3) SK-01,02検出状況 (南から)



4) SK-02土層堆積状況 (南から)



5) SK-02遺物出土状況 (北から)



6) SK-02遺物出土状況 (北から)

KYG-1 第2区



1) SK-03遺物出土状況 (北から)



2) SK-04遺物出土状況 (東から)



3) SK-05完掘状況 (東から)



4) SK-06完掘状況 (南東から)



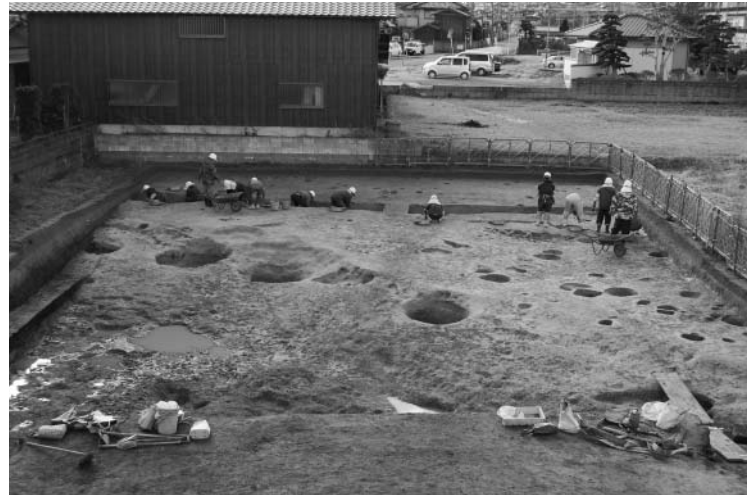
5) SD-01検出状況 (南から)



6) SD-01土層断面状況 (北から)



1) 第2調査区完掘状況 (北東から)



2) 第2調査区作業風景 (北東から)



3) 谷落ち肩状況 (北から)



4) 谷内土層堆積状況 (北から)

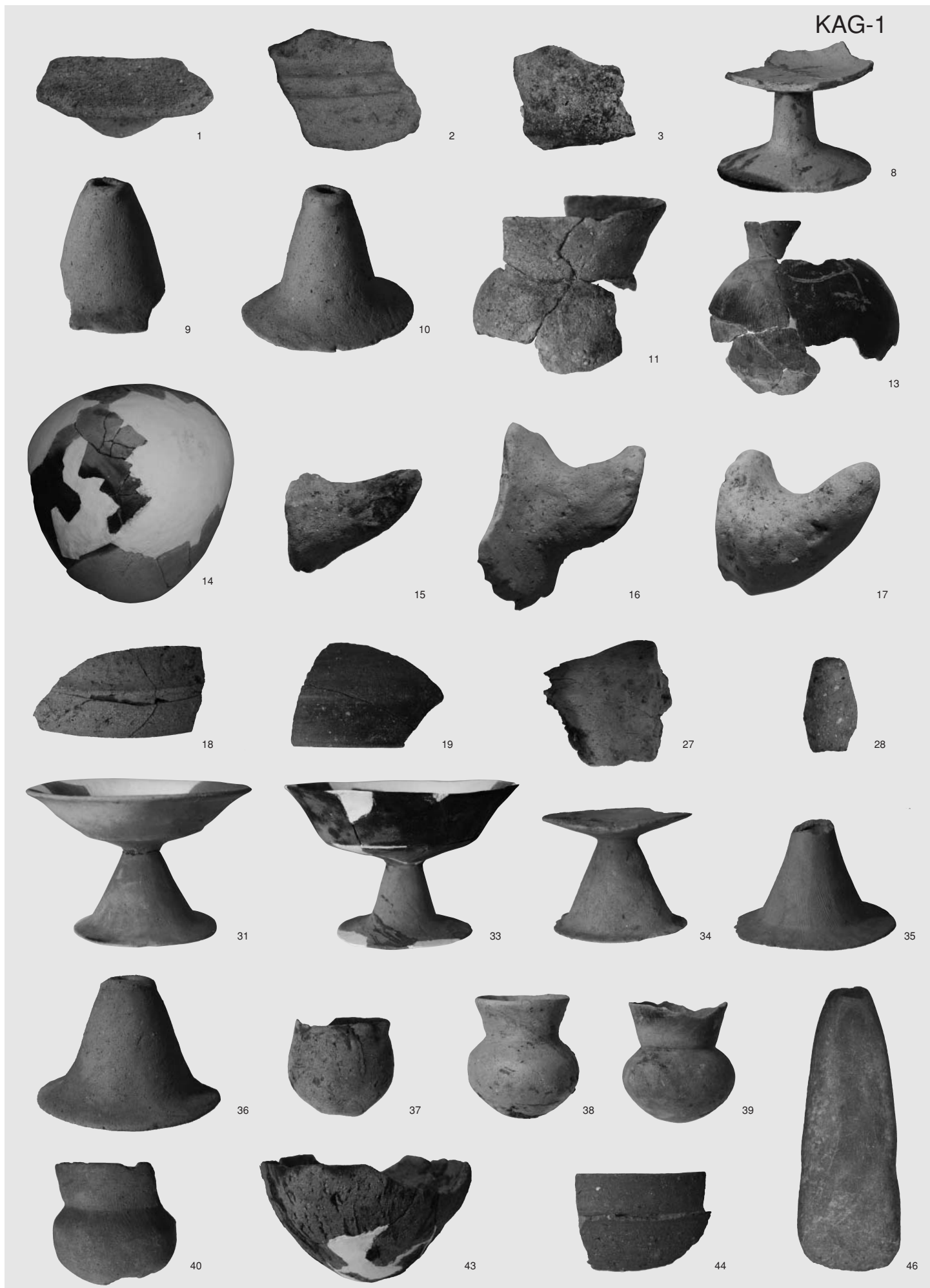


5) 第2調査区東側配置状況 (西から)



6) 第2調査区東側完掘状況 (西から)

KAG-1



出土遺物 (縮尺不統一)

TRM-1



47



48



49



50



51



52



53



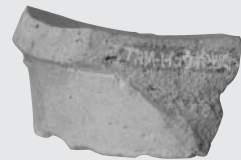
54



55



56

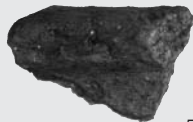


57

HYG-1



58



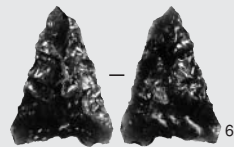
59



60



61



62

SK-01



77



78



79



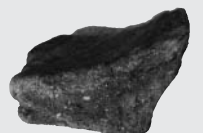
80



81

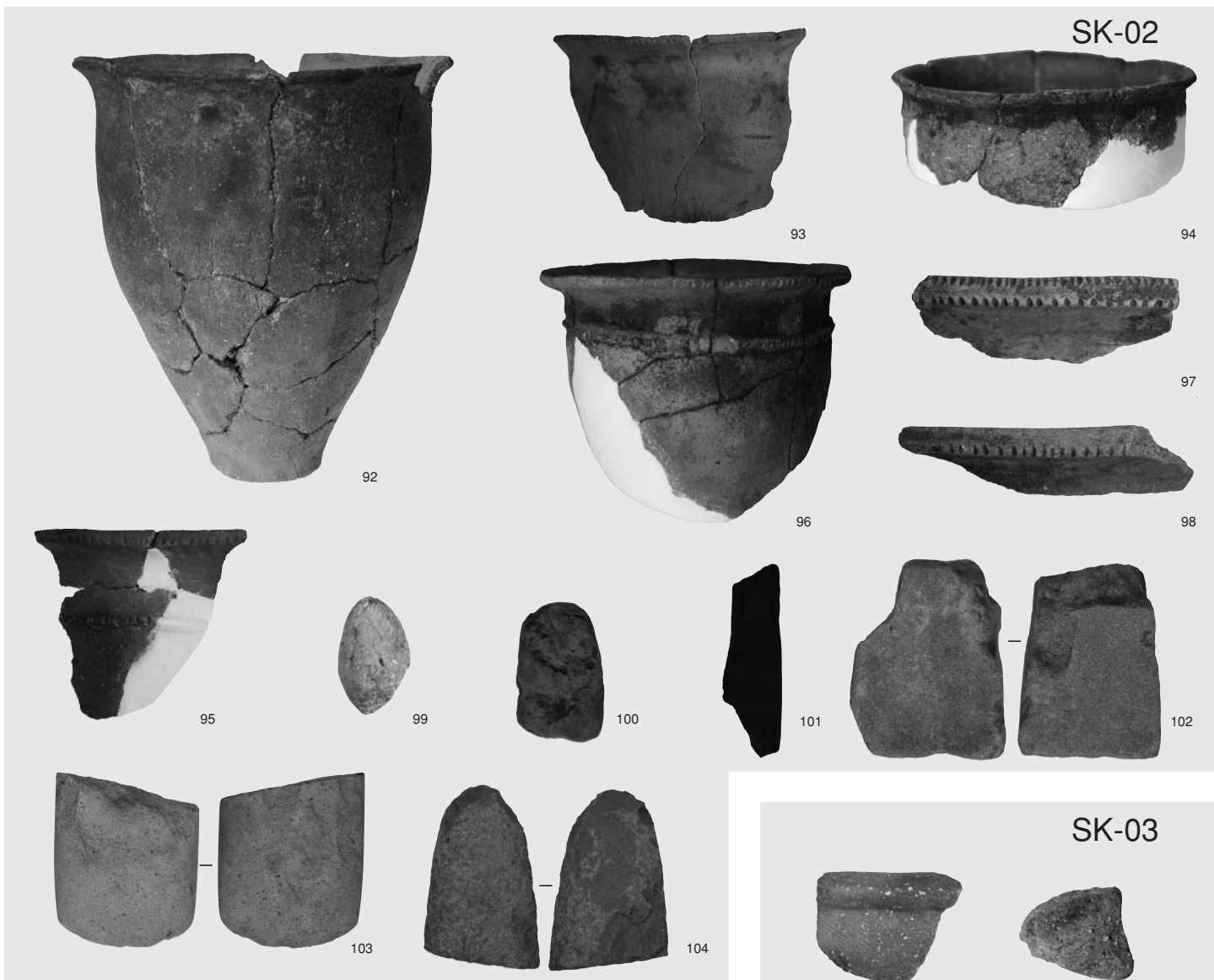


82



83

SK-02



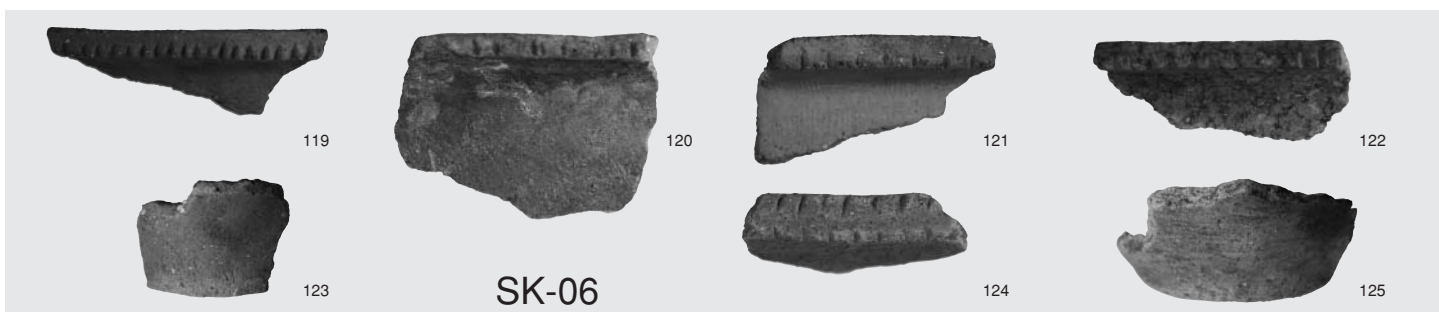
SK-03



SK-04

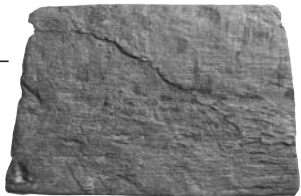


SK-06





89



91



85



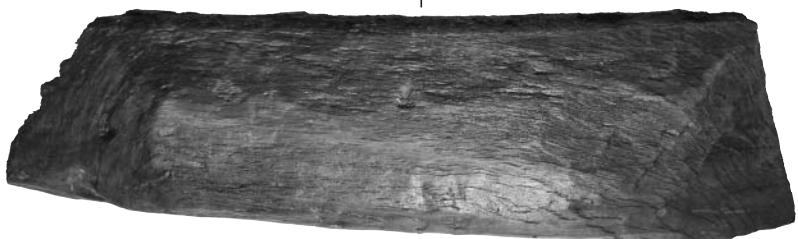
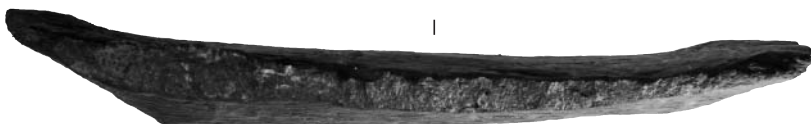
86



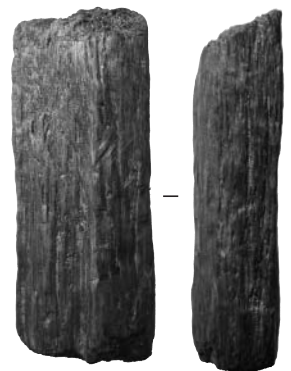
90



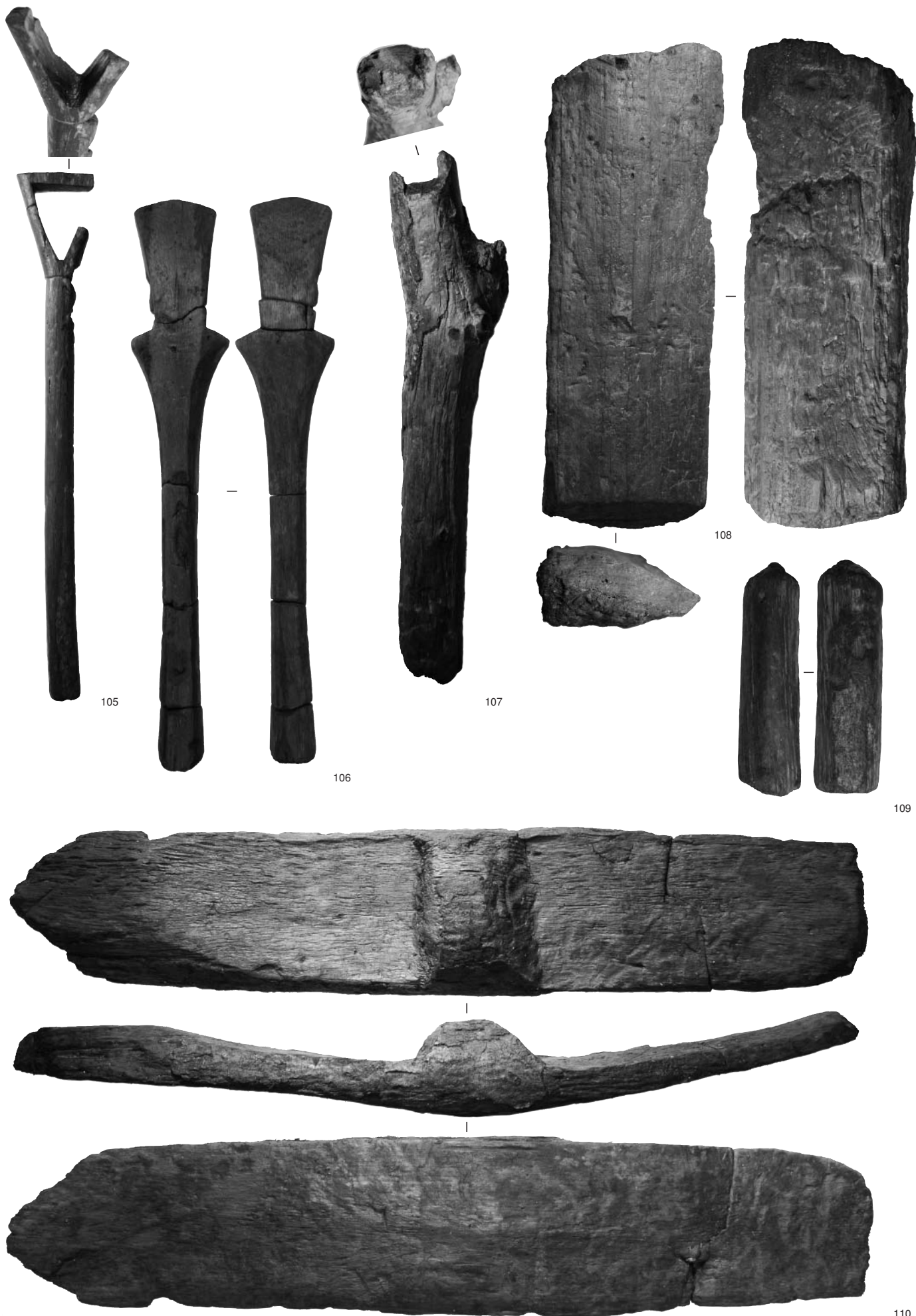
84



87



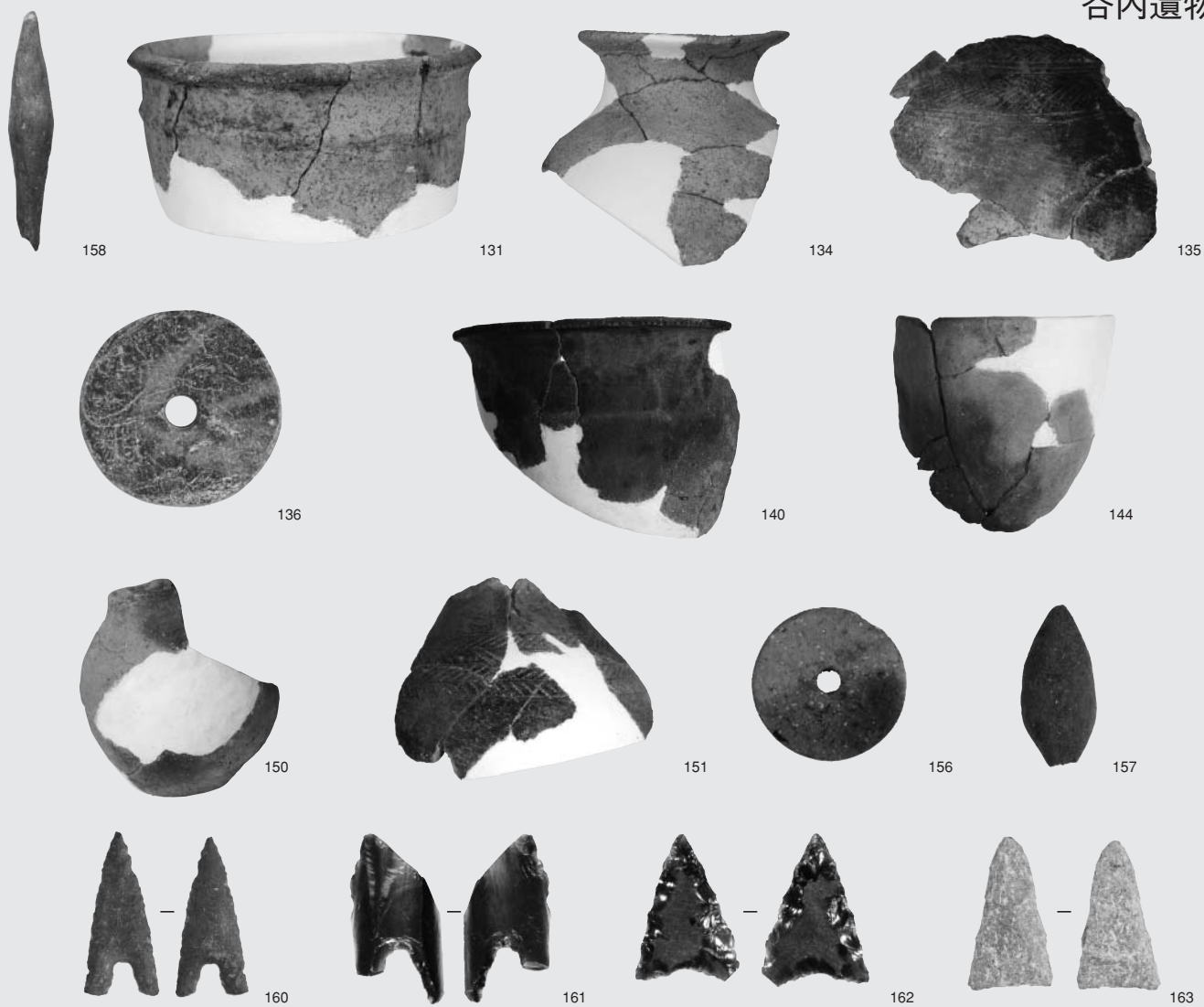
88



出土遺物 (縮尺不統一)



谷内遺物



出土遺物 (縮尺不統一)

－報告書抄録－

書名	市道戸切通線工事に伴う発掘調査報告書 1		
ふりがな	しどうとぎれとおりせんこうじにともなうはつくつちょうさほうこくしょ 1		
副書名	－上籠遺跡 第 1 次調査－ ー戸切巡り町遺跡 第 1 次調査ー ー兵庫遺跡 第 1 次調査ー		
巻次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第 1032 集		
編著者名	加藤隆也		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	20090331		
作成法人ID	40130		
郵便番号	810-8621		
住所	福岡市中央区天神 1-8-1		
遺跡名	上籠遺跡	戸切巡り町遺跡	兵庫遺跡
ふりがな	かみごもいせき	とぎれめぐりまちいせき	ひょうごいせき
遺跡所在地	福岡市西区戸切 2 丁目地内		
市町村コード	40130		
遺跡番号	2844	0403	2846
北緯	33° 33′ 16″	33° 33′ 13″	33° 33′ 12″
東経	130° 19′ 10″	130° 19′ 06″	130° 19′ 02″
調査期間	20070928～20071107	200800107～20080318	20071101～20080318
調査面積	203	403	727
調査原因	道路改良工事	道路改良工事	道路改良工事
種別	集落	集落	集落
主な時代	弥生時代中期から中世	弥生時代中期から中世	弥生時代前期末から中期初頭
遺跡概要	遺物包含層	ピット状遺構、土壙	壁立ち建物、木器水漬け遺構
特記事項	古墳時代中期の 水際祭祀	谷には弥生前期末の 遺物包含層あり	小型壁立ち建物 4 基 木器が出土する土壙



調査終了後風景状況

表紙写真 飯盛山上空から調査地と博多湾を望む
裏表紙写真 兵庫遺跡第1次 第1調査区作業風景

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 1

－ 上籠遺跡 第1次調査 －
－ 戸切巡り町遺跡 第1次調査 －
－ 兵庫遺跡 第1次調査 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1032集
2009(平成21)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 久野印刷株式会社
福岡市博多区奈良屋町3-1

— Results of the 1st excavation of Kamigomo ruins —

— Results of the 1st excavation of Togiremegurimachi ruins —

— Results of the 1st excavation of Hyougo ruins —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1032



2009

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

JAPAN